

はじめに

お茶の水女子大学附属高等学校長 村田 容常

古在由直という東京帝国大学総長がいた。関東大震災後の復興総長であり、足尾銅山の鉍毒分析を行ったことでも著名な学者である。この東大総長が大正11年の新年に学生に向かって話したもののの中につぎのような文言がある。

「日本も昔とちがい今日では世界の日本となり、我国の一挙手一投足が直に世界の形成に影響を及ぼすという有様であるのみならず、現在は総てが国際的になりつつある際であるから今後学生は、単に日本ばかりでなく、世界を目標として学問せなければならぬということである。」

今から約90年前のことである。時は進み国際化がグローバル化となり、グローバル教育が初等中等教育段階まで降りてきた。

現代の日本の教育界には、地球規模の視野で、国際的な課題を発見・解決できる人材を育成することが求められている。そのためには高校段階から、語学力、幅広い教養、コミュニケーション能力、問題探究ならびに解決能力などを高めることが求められるようになっている。そして本校は2014年度のスーパーグローバルハイスクール（SGH）に選定され、事業を開始した。本校は、一学年120名、教員総数25名という小規模の女子高校であり、SGHの申請に際し本校がその任に当たれるであろうかという議論があった。その中で本校の歴史や今までの教育方針、実績、そして大学との連携を考えたとき、本事業はすぐれた女子教育を行う上で必要なことと判断した。本校には生徒の自主自律を重んじ、教養高い女性の教育を行ってきた長年の実績がある。お茶の水女子大学との連携教育である「教養基礎」、大学の教員が直接指導する「選択基礎」などの高大連携プログラムも開発した。また、「アジア・エコリーダーズ」への参加、台北市立第一女子高級中学との交流、タイ王国から留学生の受け入れなど海外交流実績もある。これらを踏まえ、「女性の力をもっと世界に 目指せ未来のグローバル・リーダー」という研究開発を行うこととした。本SGH事業は、グローバルな社会的課題の発見・開発を目指し、探究的な学習を行う必修の課題研究「グローバル地理」、「持続可能な社会の探究Ⅰ、Ⅱ」、選択科目の「グローバル総合」、「グローバル総合アドバンス」からなるもので、国際社会の平和と持続可能な発展に寄与できる基礎学力と広い教養を持った生徒の育成をめざしている。本年はまずグローバル総合を中心にプログラム開発を行った。また、海外校との提携・関係強化に努めた。試行錯誤の1年目であった。不十分な点は多々あるが、ご批判を頂きよりよき教育システムの開発にいかしていきたい。

本校のSGH事業推進のため協力いただいた関係の皆様にご心より感謝し、今後とも一層のご支援、ご指導を賜れるようお願い申し上げます。

報告書 目次

I	【別紙様式5】平成26年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要・・・・・・・・	4
II	【別紙4様式3】研究開発完了報告書・・・・・・・・	6
	目標設定シート・・・・・・・・	19
III	実施報告書・・・・・・・・	22
1	研究開発の概要・・・・・・・・	22
2	各研究グループの取り組み・・・・・・・・	23
2-1	課題研究グループ	
2-2	教養教育グループ	
2-3	特別活動・環境整備グループ	
3	取り組み全体の成果と評価、および課題・・・・・・・・	66
3-1	成果と評価	
3-2	課題と改善点	
	関係資料・・・・・・・・	67
1.	第1回運営指導委員会議事録	
2.	第2回運営指導委員会議事録	
3.	SGH意識調査〔アンケート項目と集計結果(抜粋)〕	
4.	先進校視察報告	
5.	研修先視察報告	
6.	組織図	
7.	教育課程表	

【別紙様式 5】

平成 26 年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

指定期間	ふりがな	おちゃのみずじょしだいがくふぞくこうとうがっこう				②所在都道府県	東京都
26～30	①学校名	お茶の水女子大学附属高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1 年	2 年	3 年	4 年	計	1 学年 3 学級、3 学年 9 学級 全校生徒 360 名	
普通科	120	120	120		360		
⑥研究開発構想名	女性の力をもっと世界に ～目指せ未来のグローバル・リーダー～						
⑦研究開発の概要	グローバルな社会的課題の発見・解決を目指し、探究的な学習を行う必修の課題研究「グローバル地理」、「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」と選択科目の「グローバル総合」、「グローバル総合アドバンス」、および確かな基礎学力と広い教養の涵養を目指す「教養教育」の教育課程の研究開発を行う。						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	(1) 目的・目標					
		<p>グローバル女性人材として、自国の文化を含む多文化理解、共感力、協働精神を有し、国際社会の平和と持続可能な発展に寄与する意欲と能力を持つ人材の育成を目指す。また、自律的に学び、考え、行動し続ける姿勢、チャレンジ精神の育成にも取り組む。文部科学省の全学推進型のグローバル人材育成推進事業に採択されているお茶の水女子大学の教育研究の全資源を日常的に活用し、大学と一体となって研究開発を進め、次のような資質・能力を持った生徒を育成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 確かな基礎学力と広い教養を身につけ、社会の諸課題に高い関心を持つ生徒 ・ 社会の様々な分野における問題を発見し、異なる文化的背景を持つ人々と共生、協働して、解決する意欲と能力を持つ生徒 ・ 英語を含む言語活用能力、論理的思考力、交渉能力、プレゼンテーション能力、ICT活用能力の高い生徒 <p>また、グローバル人材育成推進事業に取り組む大学（主にお茶の水女子大学、東京工業大学）との高大接続のあり方の研究にも取り組む。</p>					
		(2) 現状の分析と研究開発の仮説					
		<p>本校生徒の 65%が将来海外で学び国際的な活動に従事することを希望している。生徒の社会の諸課題への関心は高く、それらを解決しようとする意欲があり、そのために必要とされる能力も高い。しかし、現状は海外体験の機会が不足しており、その改善が課題である。一方、これまで「総合的な学習の時間」に行ってきた課題研究、イオンアジア・エコリーダーズや台北市立第一女子高級中学など海外との交流事業は、一定の成果を上げているが、より組織的・計画的な指導体制の整備によって、さらなる人材育成の効果が期待される。また、本校が長年取り組んできた「教養教育」は、グローバル人材に求められる能力の育成に効果があると考えられる。よって次の仮説A～Cを設定する。</p> <p>A：課題研究「グローバル総合」、「グローバル総合アドバンス」の実施 B：課題研究「グローバル地理」「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」の実施 C：学校設定科目「教養基礎」を含む教養教育の充実</p>					
		(3) 成果の普及					
		<p>「総合的な学習の時間」を活用し教育課程の特例を必要としない本校の取組は、他校でも実践可能である。生徒による成果報告会、公開教育研究会における授業公開、成果報告書、SGH専用ホームページなどで情報発信を行い、成果の普及に努める。また、研究の向上・改善のため、SGH校のネットワークを構築し、定期的な情報交換を行う。</p>					

⑧ -2 課題研究	<p>(1) 課題研究内容</p> <p>国際協力とジェンダー、経済発展と環境、国際交渉力の不足、異文化間の摩擦、資源・エネルギー、人口、貧困・格差など、グローバルな社会的課題に対する興味・関心を高め、問題を発見・解決する探究的な学習を通して、異なる文化的背景を持つ人々と共生、協働して、国際社会の平和と持続可能な発展に寄与する意欲と能力をもつ人材を育成するための教育課程の開発を行う。</p> <p>例えば、グローバル総合「国際協力とジェンダー」では、世界各地が抱える貧困や紛争、そうした地域における女性の地位の低さという課題に目を向け、現状を理解するとともに、女性の立場に配慮した援助や開発といった新たな動きにも注目し、課題の背景を理解した上でその解決・解消にどのような協力ができるのか、広い視野から考察する。</p> <p>また、「経済発展と環境」では、開発と環境についてアジア各国の高校生と情報交換、討論を行い、課題解決の方法を模索する中で、コミュニケーション能力を養い、公共性、倫理観を備えた未来のグローバル・リーダーの育成を目指す。</p> <p>(2) 実施方法・検証評価</p> <p>3年間を通して必修科目「グローバル地理」（1年生の学校設定科目）、「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」（2・3年生の総合的な学習の時間）で、生徒全員がグローバルな社会的課題の背景・要因を学び、その解決に向けてフィールドワークを含む探究的な学習を行う。また、グローバルな諸課題やビジネスに関する関心・意欲・能力の高い生徒に対し、2年次に選択必修の「グローバル総合」（10人程度の少人数編成で3～4講座を開講し、生徒は各自の興味・関心や進路に応じて講座を選択して受講する）、3年次に選択の「グローバル総合アドバンス」を開講し、より専門的な内容を取り上げ、海外研修を含む探究的な学習を行う。</p> <p>検証評価としては、課題研究受講前後において、グローバルな課題やビジネスに対する意識や関心・意欲・態度、課題設定および解決能力、言語活用能力、コミュニケーション能力、交渉能力、海外への進出意欲などがどう変化したか、アンケート、授業中の観察、レポート、定期考査や検定試験などによって検証・評価する。</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等 なし</p>
⑧ -3 上記以外	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価</p> <p>文系理系のコース分けをせずに、学校設定科目教養基礎「国語」「数学」「英語」を含む幅広い必修科目を履修する教育課程で「教養教育」を推進する。</p> <p>生徒の受講態度、意識、進路などの調査結果を分析し、教養教育の成果を確認する。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 なし</p> <p>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組内容・実施方法</p> <p>①お茶の水女子大学の教育研究の全資源を日常的に活用する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アドバイザーボード「大学教授団」 ・「附属高校生向け公開授業」 ・外国語 e-learning システム ・外国語検定試験 (TOEIC、TOEFL、IELTS 等) の受検機会 ・図書館や情報基盤センター ・大学に在籍している世界各国の留学生 ・大学が行うサマープログラム <p>② A F S 等の留学機関から留学生を受け入れ、日常的な異文化体験機会を提供する</p> <p>③ 卒業生や関係諸団体の専門家による講演会「グローバル講座」を実施する</p> <p>④ 自国文化理解のための伝統文化鑑賞教室等のプログラムを実施する</p> <p>⑤ 自主自律で取り組む自治会活動を行わせる</p> <p>⑥ 台北市立第一女子高級中学等、海外の教育研究機関との連携と交流を行わせる</p> <p>⑦ 海外で生活する卒業生との交流等、作楽会（同窓会）と連携する</p>
⑨ その他 特記事項	<p>お茶の水女子大学高大連携特別教育プログラム（H17.4～現在）</p> <p>東京工業大学高大連携教育（H24.3～H33.3）</p>

(別紙様式3)

平成 27年 3月 31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住 所 東京都文京区大塚2-1-1
管理機関名 国立大学法人 お茶の水女子大学
代表者名 羽入 佐和子 印

平成26年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成26年 4月 1日(契約締結日)～平成 31年 3月 31日

2 指定校名

学校名 お茶の水女子大学附属高等学校

学校長名 村田 容常

3 研究開発名

女性の力をもっと世界に ～目指せ未来のグローバル・リーダー～

4 研究開発概要

グローバルな社会的課題の発見・解決を目指し、探究的な学習を行う必修の課題研究「グローバル地理」、「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」と選択科目の「グローバル総合」、
「グローバル総合アドバンス」、および確かな基礎学力と広い教養の涵養を目指す「教養教育」の教育課程の研究開発を行う。(別紙様式1 研究開発実施計画書より)

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程 (26年4月1日 ~ 27年3月31日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
お茶の水女子大学教員による授業			○	○		○	○		○	○	○	
お茶の水女子大学留学生・学生の授業参加		○	○	○				○				
お茶の水女子大学 英語サマープログラム参加					○							
運営指導委員会の開催						○						○

(2) 実績の説明

①人的支援（大学独自財源による）

- ・教諭の配置 高等学校からの要望に沿って、より有効活用可能で教員の負担軽減にもつながるよう、任期付き専任教諭に代えて、課題研究をサポートする非常勤講師を5名採用することにした。
- ・T Aの派遣 来年度からの組織作りに向けて、学生募集等の準備を開始した。

②大学での学習機会の高校生への提供

- ・大学が開講する英語によるサマープログラム（現在3コース開講）にのべ12名の高校生の聴講を受け入れた。来年度は参加生徒の増加を図る。
- ・大学での専門授業を附属高校生向け公開授業として公開しており、今年度はのべ92名の生徒が受講した。
- ・附属高校の全生徒用に大学の E-Learning Plaza を利用できるアカウントを作成し、高校生の自宅や学校での外国語自習を可能とした。

③大学教授団による専門的支援

- ・外国語指導、教育課程・教育方法開発等において専門的見地から支援する本学大学教員を3名選び、運営指導委員会メンバーを委嘱した。
- ・課題研究の授業において本学大学教員6名による特別授業を実施した。
（教養基礎の授業においては本学大学教員11名による特別授業18回を実施した。）

④大学事務組織による支援

- ・大学の国際交流課、学務課を中心に、海外交流協定校との連絡調整や、大学学習機会の提供、海外派遣時の安全確保等の面で、SGH事業を支援した。

⑤高大連携教育および連携入試等、高大接続のあり方に関する研究開発

- ・大学の入試推進室と共同で、平成28年度導入予定の新型AO入試(新フンボルト入試)を、現行の高大連携入試と連携して実施することについて、検討を開始した。

⑥管理機関における事業の管理について

- ・附属高等学校長・副校長を大学の「グローバル人材育成推進本部」の本部員に委嘱し、情報の共有やSGH事業への支援を確実に実行するための体制を整備した。

6 研究開発の実績

6-1 課題研究グループ

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①②③グローバル総合	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
④グローバル地理	△	△	△	△		△	△	△		△	△	
⑤持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ	△	△	△	△		△	△	△		△	△	
⑥グローバル総合アドバンス	△	△	△	△		△	△	△		△	△	
⑦イオン アジア・ユースリーダーズ					○							
⑧台湾研修							○					
⑨生徒海外研修報告会									○			
⑩生徒成果報告会(予定)												◎

○：実施 △：試行 ◎：予定

(2) 実績の説明

①グローバル総合「経済発展と環境～持続可能な開発を目指して～」

- ・お茶の水女子大学の留学生を授業に招き、出身国の環境問題を紹介してもらった。また、ベトナムの大気汚染改善に向けた対策について、英語でディスカッションを実施した。
- ・東京農工大学大学院畠山史郎氏による講義「越境する大気汚染」を実施した。
- ・東京大学、東京工業大学、早稲田大学、上智大学の学生と、都立西高校の生徒を招き、ベトナムの大気汚染の解決方法についてディスカッションを実施した。
- ・イオン アジア・ユースリーダーズに参加し、アジア諸国の学生とともにハノイの大気汚染改善に向けた提言案を発信した。
- ・三井物産株式会社から講師を招き、「再生可能エネルギーと持続可能な社会」についての講義及びディスカッションを実施した。
- ・イオントップバリュ株式会社より講師を招き、「フェアトレードと持続可能な社会」についての講義及びディスカッションを実施した。
- ・環境省が後援する第5回高校生環境活動発表会の全国大会に出場し、環境にやさしい街づくりについての提言を発信、優秀賞を受賞した。

②グローバル総合「国際協力とジェンダー～人権・格差～」

- ・お茶の水女子大学戸谷陽子氏による講義「アートに表象されるジェンダー」を実施した。
- ・お茶の水女子大学近藤のみ氏による講義「遺伝子からみるジェンダー」を実施した。
- ・お茶の水女子大学浜野隆氏による講義「開発と教育」を実施した。
- ・国際 NGO である公益財団法人プラン・ジャパンの活動について学び、来日ユースによる講演会

の開催及び交流会を実施した。

- ・国際会議「サステイナビリティとジェンダー」に参加した。
 - ・お茶の水女子大学三浦徹氏による講義「『アラブの春』その後」を実施した。
 - ・京都女子大学内海成治氏による講義「国際協力の現状と課題」を実施した。
- ③グローバル総合「国際関係と課題解決～貧困・平和・人権～」
- ・日本アイ・ビー・エム株式会社による講義「グローバルリーダーシップ」を実施した。
 - ・お茶の水女子大学小林誠氏による講義「現代の国際関係にどう踏み込むか」を実施した。
 - ・お茶の水女子大学宮内篤氏による講義「国際交渉の実際」を実施した。
 - ・第8回全国高校模擬国連大会に、マレーシア大使役、メキシコ大使役として出場した。
 - ・「グローバルな社会的課題を投資で解決する」をテーマに第15回日経STOCKリーグに参加し、最優秀賞ならびに金融担当大臣賞を受賞した。
 - ・本校1年生及び2年生に向け、第8回全国高校模擬国連大会の成果発表会を実施した。
 - ・外国人講師による英語でのディスカッションを5回実施した。なお、これはグローバル総合アドバンスの試行を兼ねたものである。
- ④グローバル地理
- ・夏季休業を活用して、生徒120名が外部の論文コンテストやコンクールに参加した。
 - ・公益財団法人ジョイセフの専門講師による講義を実施した。
 - ・冬期休業を活用して、生徒120名が社会的な諸課題（2話題以上）に関する自分の意見を、新聞の読者欄に投書した。
- ⑤持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ
- ・「持続可能な社会の探究Ⅰ」及び「持続可能な社会の探究Ⅱ」の内容、担当者、評価方法等の検討を重ね、「持続可能な社会の探究Ⅰ」の指導と評価の年間計画を策定した。
- ⑥グローバル総合アドバンス
- ・「グローバル総合アドバンス」の内容、担当者、評価方法等の検討を重ね、指導と評価の年間計画を策定した。
 - ・外国人講師によるAbstractの書き方講座やプレゼンテーション講座、「高齢社会」や「グローバルなCSR」に関する英語でのディスカッションを、グローバル総合「国際関係と課題解決～貧困・平和・人権～」において、試行として実施した。
- ⑦イオン アジア・ユースリーダーズ
- ・8月17日(土)～23日(日)の日程で、ベトナム社会主義共和国(ハノイ)でのイオン アジア・ユースリーダーズに参加した。
- ⑧台湾研修
- ・10月22日(水)～25日(土)の日程で、台北市立第一女子高級中学での課題別プレゼンテーションとディスカッションを実施した。
 - ・台湾研修の事前学習として、参考映画鑑賞や参考図書の読書、夏季休業事前学習レポート作成及び発表会、お茶の水女子大学大学院生による講義を実施した。
- ⑨生徒海外研修報告会
- ・12月18日(木)に、本校1年生及び2年生に向けた海外研修報告(ベトナム、台湾)を実施した。
- ⑩生徒成果報告会
- ・3月17日(火)に、運営指導委員等を招き、生徒による課題研究論文発表会を実施する予定。

6-2 教養教育グループ

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①生徒の意識調査とその分析			○	○	○			○	○	○	○	
②グローバルを意識した授業				○	○	○	○	○	○			
③卒業生調査										○	○	

(2) 実績の説明

①②について（本年度の目標と実績）

本グループの最終的な目標は、構想調書の仮説Cの通り、「学校設定科目『教養基礎』を含む幅広い必修科目を履修させる教育課程で、多くの科目を学ぶことにより、グローバル女性人材の土台となる基礎学力や広い教養を身につけることができる」ということを検証することである。本年度は準備の年度であるので、仮説Cを検証する前に今後の教養教育について示唆を得るべく、

仮説1「これまでの授業はSGHに効果的な要素が含まれていた」

仮説2「これまでよりもSGHに効果的な通常授業開発は可能である」

という仮説1と仮説2を立て、検証することとした。

その理由は、現在の授業でも、少なからずSGHのプログラムの底支えとなる基礎学力を養成しているが、その実態がどのようなものかを調査すること、もう一つは、今後SGHのプログラムが始まるにつれて、高等学校段階で大学進学に必要な学力や能力を確実に担保しつつも、SGHを意識した授業開発が必要となることが予想され、その可能性を調査することが仮説Cの検証に関わるからである。一方、仮説Cが正しいと検証されたとしても効果の度合いにおいて不十分な場合は、大胆な授業の改革や開発が求められることが予想される。

その場合を想定して準備段今から、その手立てを探り備えておくこともまた必要である。

さらに、生徒の意識調査と卒業生調査を行った。その分析の結果から、今後の課題、生徒の傾向、授業開発・改善のポイントなど今後のSGH活動に対しての示唆をいくつかあげて、次年度の研究の手がかりとして残しておく。

仮説1と2が検証されたことと意識調査、卒業生調査から得られた示唆が本年度の実績である。

③本校卒業後10年未満の卒業生に、本校での教養教育の効果についてインタビューを実施した。

6-3 特別活動・環境整備グループ

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①グローバル講座							○	○	○			
②お茶の水女子大学サマープログラム参加					○							
③お茶の水女子大学e-learningシステムの活用			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
④日本文化を知るための伝統文化鑑賞会									○			
⑤留学生の受け入れ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

(2) 実績の説明

①グローバル講座

- ・「ネパールのユースによる女の子の権利と早すぎる結婚についての講演会及び交流会」
(公益財団法人プラン・ジャパン)
- ・「国際シンポジウム：サステナビリティとジェンダー」
(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター)
- ・「発展途上国の人口問題と国際協力」 (公益財団法人ジョイセフ)

②サマープログラムへの参加

8月に、お茶の水女子大学が本学生と留学生の相互交流を目的として企画したサマープログラムに、高校生がオブザーバー参加する試みを行った。

③e-learningシステムの活用

お茶の水女子大学外国語センター監修の自習用 e-learning 教材を、高校生が日常的に利用できる学習環境を整えた。

④伝統文化鑑賞会

12月に、日本文化に触れ、理解を深めるための歌舞伎鑑賞会を1年生対象に、文楽鑑賞会を2年生対象に実施した。

⑤留学生の受け入れ

2014年4月1日～2015年2月5日、留学生機関AFSを通じて、マレーシアからの留学生を受け入れた。

6-4 推進班（海外との連携，他校視察，発信）

（1）実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
タイ チュラーロンコーン大学附属中等学校生徒との交流		○										
海外提携先の視察・交流協定							○			○		
先進校視察					○		○					
沖縄フィールドワーク視察											○	
ホームページの開設・運用						○						○
パンフレット作成					○							
研究の統括・推進	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

（2）実績の説明

- ・ 5月19日にタイ王国チュラーロンコーン大学附属中等学校から生徒16名，教員2名が来校し，授業参加，全校集会を実施し，交流を深めることができた。
- ・ 10月に海外研修で台北市立第一女子高級中学を訪問した際，本校との交流協定を結ぶことができた。また，1月にタイを視察した際，チュラーロンコーン大学附属中等学校と，交流協定締結に向けて大筋で合意し，来年度中には協定が結べる見込みである。
- ・ 先進校として，8月19日に金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校，10月16日に立命館宇治中学校・高等学校を視察した。課題研究カリキュラム開発，外部資源の活用方法，大学との連携，海外交流アドバイザーの活用方法等についてご教示いただき，その後の本校の取り組みへと活かすことができた。
- ・ SGH ホームページ開設，パンフレット作成・配布により，本校の取り組みを広くわかりやすく伝える媒体を整えた。
- ・ 2月に沖縄フィールドワーク（平成28年度より「持続可能な社会の探究Ⅱ」の中で実施予定）現地視察に行き，課題研究での生徒の訪問先を確保することができた。
- ・ 推進班としては，3つのグループ（課題研究・教養教育・特別活動環境整備）の活動のマネージメントをおこなった。

7 目標の進捗状況，成果，評価

7-1 課題研究グループ

①グローバル総合「経済発展と環境～持続可能な開発を目指して～」

- ・ 7月と12月に実施したアンケートにおいて，「総合的な学習の時間を通し，現代社会の諸課題に関心を高められる」に対する「①大変そう思う」「②ややそう思う」への回答率が，88.8%から100%に変化した。また，「国際化に重点を置く大学へ進学したい」に対する「①大変そう思う」「②ややそう思う」への回答率が，55.5%から77.8%に変化した。これらの結果

から、本講座における探究活動の実施が、生徒たちの現代社会の諸課題への関心を高めたといえる。また、世界で活躍する可能性を持った生徒の増加が期待できるのではないかと思う。

②グローバル総合「国際協力とジェンダー～人権・格差～」

- ・12月に実施したアンケートにおける本講座受講者と2学年全体との比較を試みた結果、留学生との交流事業が幅広い教養・進路選択に有効であるかどうかを問う質問に対する本講座受講者の「①大変そう思う」「②ややそう思う」への回答率が100%、自主的に社会貢献や自己研鑽活動に取り組みたいかどうかを問う質問に対する本講座受講者の「①大変そう思う」「②ややそう思う」への回答率は86.5%と、非常に高い数値であった。この結果から、本講座は幅広い教養を通しての自己研鑽や社会貢献に取り組もうとする意識を高めたといえる。

③グローバル総合「国際関係と課題解決～貧困・平和・人権～」

- ・7月と12月に実施したアンケートにおいて、「国際化に重点を置く大学へ進学したい」に対する「④あまりそう思わない」への回答率が20%減少し、「②ややそう思う」への回答率が11%増加した。また、「可能であれば、海外の大学に進学したい」に対する「①大変そう思う」への回答率は17%増加した。加えて、「自主的に探究課題を発見できる」に対する「①大変そう思う」と「②ややそう思う」への回答率が23%増加した。これらの結果から、本講座は、生徒の進学先に対するグローバル意識及び社会的課題に対して自ら課題を設定する意識を高めたといえる。

④グローバル地理

- ・1年生「地理A」において試行として実施したが、中学までの段階でグループ学習を経験したことのない生徒が多く、7月のグループ発表では初めての経験に戸惑う生徒もいた。

⑤持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ

- ・準備期間中につき、特記事項なし。

⑥グローバル総合アドバンス

- ・準備期間中につき、特記事項なし。

⑦イオン アジア・ユースリーダーズ

- ・研修後のアンケートによれば、参加者全員が「参加してよかった」と回答しており、満足度が非常に高いプログラムであったといえる。
- ・研修後のアンケートの自由記述から、諸外国の学生に比べ自分たちの英語力が不十分であることを実感し、今後の改善すべき課題として受けとめていることがわかった。

⑧台湾研修

- ・研修後のアンケートでは「海外の文化や歴史への関心が広がった」と全員が回答しており、国際的な政治や経済活動への関心、日本の文化への興味関心を広げることができたといえる。
- ・研修後のアンケートによると、語学力や積極的なコミュニケーションを重要だと考える生徒が多数おり、また、帰国後も意識や行動の変化をその後の結果に繋げる生徒が大半であったことから、本研修は高い効果があったといえる。

⑨海外研修報告会

- ・校内だけにとどまらず、全国へ発信していこうと意欲を高めていった一部の生徒たちが、環境省後援の環境活動報告全国大会に出場したことは、海外研修報告会の効果といえる。

7-2 教養教育グループ

①「グローバルを意識した授業」実施の評価

ア. 本授業を行った教科への事後アンケートより、従来の本校の通常授業のおよそ75%の科目がSGHプログラムに必要な基礎学力養成に効果のある授業であったと考えることができる(実施報告書2-2より)。これは構想調書にある仮説Cの一部分を検証したことになる。

イ. ア.の結果から、SGHプログラムにより効果的な通常授業を開発するに当たり、上の結果からおよそ75%の科目が、今までの授業内容の該当部分を強調または、若干の手を加えるだけでSGHにより効果的な授業が、比較的容易に開発できる。ただ、SGHプログラムから遠い関係にある教科については、SGHに関する内容を中心に授業をつくりかえることは、困難を伴うとともに本来の教科の目標を逸脱する恐れがあるので、教科の特性やカリキュラムを考慮しつつSGHに対応することが肝要であるということになる。そして上の結果から、本校の授業が、SGHに効果がある授業にすでになっていたといえる。

以上から、

仮説1「これまでの授業はSGHに効果的な要素が含まれていた」

仮説2「これまでよりもSGHに効果的な通常授業開発は可能である」

は、検証されたといえる。

② 生徒の意識調査からわかる今後のSGH活動に対する示唆

(i) 生徒が考える「今後身に付けたい、伸ばしたい能力や資質」

第2回生徒の意識調査より質問1(2)「今後身に付けたい、伸ばしたい能力や資質の結果は上位から5つあげてみると、英語を活用する力(65.8%)、幅広い教養(58.7%)プレゼンテーション能力(57.5%)、課題を発見し解決する力(37.0%)、論理的な思考力(36.2%)となっている。今回の調査では、「英語の活用」、「幅広い教養」、「プレゼンテーション能力」に生徒の解答が集中しているので、それらを授業に優先的に取り入れることで、意欲・関心を生かしながらさらに効果的な取り組みが行えるものと考えられる。

(ii) 生徒が考える「高めたい能力」と「役立つこと」の相関関係

質問6(2)「プレゼンテーション能力を高めたい」と質問6(3)「プレゼンテーション能力を身に付けることは将来の役に立つ」との相関係数は0.76であり、7(2)「ICTを活用する能力を高めたい」と7(3)「ICTを活用する能力を身に付けることは将来の役に立つ」の相関係数は0.78と高めの数値を示している。

このことから、「ある能力を高めたい」ということと「ある能力が将来役に立つ」ということの相関が強いということがわかる。したがって、生徒の学習への意欲は、それが将来役立つかどうかということと関わっているという仮説が生まれる。しかし、一方で役立つかどうかは今すぐにはわからず、「役立つからやる」という態度は、本来の教養ではないという考え方もあることにも注意が必要だろう。ともかく、「役立つ」と「高めたい」は相関が高い、今後生徒を良い方向へ導く手段として活用の可能性がありそうだということはいえる。

(iii) グローバル意識と体験との関係

第2回意識調査、質問3(2)「必要に応じて他者と協力して活動を進められる」と質問4-I-(2)-2「標準的な英語であれば、ネイティブ同士の会話の要点を理解できる」との相関係数は、現段階では0.17と非常に低かった。したがって生徒たちの考える「他者」は、身近な友人たちや日本人であるという先入観があるのではないかと推察される。グローバルな意識を持つためには、まず身近な先入観から変えていく必要がある。このことから「海外研修など、外国語を多く使用する環境での体験の増加によって、日本人以外にも

『他者』をイメージすることができるようになる」という仮説が考えられる。今後、外国人講師とのコミュニケーションや海外研修などの体験を中心とした SGH のプログラムが進むにつれて、この相関関係が高くなることが期待できる。

(iv) SGH への生徒の期待と SGH の目標との関係

質問 1 (1) 「SGH の取組は、面白そう」と質問 1 (3) 「海外に留学したり、仕事で国際的に活躍したい」との相関係数は 0.47、また 同じく質問 1 (1) と質問 2 (3) 「現代社会の諸課題について、もっと学習したい」との相関係数は 0.43、質問 1 (1) と質問 3 (3) 「課題を発見し、解決方法を考え探究する活動は将来の役に立つ」との相関係数は 0.40、質問 1 (1) と質問 4-I (1) 「英語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝えたい」との相関係数は 0.41 となり、SGH の関心の高さと海外留学、国際的に活躍、現代社会の課題、問題解決、解決法の探求、英語でのコミュニケーションなど相関係数は高いとはいえないものの、他の質問項目の相関係数と比較すると無視はできない高さになっている。このことから、初年度の SGH のイメージは生徒に正しく伝わっているものと思われる。初年度の生徒の SGH への期待と教師が考える SGH への意識付けはうまくいったといえる。

(v) 「海外留学したい、国際的に活躍したい」に影響を与える要因

質問 1 (3) 「海外に留学したり、仕事で国際的に活躍したりしたい」という回答にもつとも影響をあたえているのは、今回の意識調査の質問項目のうちどの項目かを多変量解析の一つである重回帰分析を行って調べてみた。結果として有効であったものは以下の 7 つの質問項目であった。

1. 「可能であれば、大学生の時に留学したい」	t 値の絶対値	9.10
2. 「国際化に重点を置く大学へ進学したい」	t 値の絶対値	5.93
3. 「SGH の取組は、面白そう」	t 値の絶対値	3.38
4. 「英語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝えたい」	t 値の絶対値	3.29
5. 「可能であれば、海外の大学に進学したい」	t 値の絶対値	3.23
6. 「SGH の取組は、大学の専攻分野の選択に影響を与える」	t 値の絶対値	2.02
7. 「現代社会の諸課題について、もっと学習したい」	t 値の絶対値	1.8

③卒業生調査による教養教育の効果

本校の教養教育は卒業後にグローバルな視野を持つことや国際的に活動することなども含めて卒業生には良い効果をもたらしているようである。卒業生の話だと現在の授業との結びつきも薄れ、数値化しにくいことから、(2) の仮説 1 の検証とは別にしてここで述べたが、結果として (2) の仮説 1 の検証結果が正しいことを支持する事実となるであろう。

7-3 特別活動・環境整備グループ

(①～⑤)の各詳細については、実施報告書を参照のこと)

①特別活動・環境整備グループを総括して言えることではあるが、環境を整え、生徒たちの活動量を増やす様々な講座や取り組みは、確かに生徒たちの興味関心を向上させることができる、また、進路の参考やその後の高いモチベーションにつながることも確認できた。しかし、内容の理解という点においては、十分な事前学習の有無によるところが大きい。また、理解の深化を求めるのであれば、生徒が学んだ内容をゆっくり咀嚼する時間を与える必要があり、企画の詰め込みは避けなければならない。学校では、SGH に関する講座や企画以外にも様々な

取り組みや行事が行われている。生徒たちの学びが消化不良に終わることなく、より大きな効果を期待するのであれば、関係教科や担当者が事前学習を充実させること以外にも、学校として3ヵ年を見通し、教科を越え、多角的かつ計画的に講座や企画、行事などを再配置する必要がある。

- ②サマープログラムは、今回、オブザーバー参加という形をとったため、生徒たちの英語による発言場面は多くは見られなかった。しかし、大学関係者から高校生の積極的な取り組みに対して高い評価を受け、また、参加した生徒たち自身も力不足を痛感し、次へのモチベーションを高めることができたことが確認された。来年度以降、大学生に混ざり、本格的な参加が見込めるのではないかと手ごたえを得ることができた。
- ③お茶の水女子大学 e-learning システムの活用については、1年目の手探り期間であったこともあり、生徒たちへの周知の仕方やタイミングにもやや問題があったため、有効活用されていないことがわかった。しかし、「利用したい」と希望している生徒は多いため、この希望を上手く e-learning システムの活用につなげることが、来年度の課題となるであろう。
- ④歌舞伎や文楽は、事前や事後のレクチャーを受けることで、単なる物語の理解にとどまらず、それ以外の楽しみ方を味わうこともできた。しかし、日本文化を知るための伝統文化鑑賞であれば、これらに限定することなく、幅広い視点で企画を見直すことも可能であろう。
- ⑤留学生の受入れは、生徒同士の接する時間が長ければ長いほど好意的に受け止め、習慣や文化の違いに配慮しながら、双方にとって楽しく充実した学校生活を送れるよう、生徒同士が努力、工夫する姿が見られた。異文化理解は、頭ではなく身体と時間を使って理解するものであるということ、実体験を通して学ぶ良い機会となったのではないだろうか。留学生の受入れが特別なものではなく、ごく自然な形で行われる環境を、学校としてさらに整備していく必要がある。

7-4 全体を通じて

- ・SGH をテーマとした校内研修会を2回行い、取り組みの概要を共有する機会や、各教科で授業内で意識して取り組めることを出し合う中で、日々の授業改善について考える機会を持つことができた。課題研究に関わる教員のみならず、各教科で「グローバルを意識した授業」を実践することで、教員全体でSGHとして取り組む意識が高まりつつある。また、SGHの取組を実施するにあたって、改めて本校で長い間取り組んできた教養教育が意味を持つことを再確認した。(教員の変容)
 - ・12月、1年～3年の保護者にSGHに関してアンケート調査を実施した。
「本校がSGHに指定されていることを実感している」に対し肯定群(そう思う・ややそう思う)が73%(とくに今年度はグローバル総合を実施した当該学年の2年生保護者は80%が肯定)、「SGHとしての活動に対して期待している」に対し肯定群(そう思う・ややそう思う)が90%という結果から、保護者からの取り組みへの期待がうかがわれる。(保護者の変容)
 - ・SGH指定により、海外研修の実施、チューラーロンコーン大学附属中等学校との交流、プラン・ジャパン講演会など、海外教育機関、学外の組織等との連携事業が充実した。また、お茶の水女子大学との新たな視点での連携の可能性を探ることができた。(学校の変容)
-
- ・目標設定シート項目の実績

(1-d) グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高い大会における入賞実績

1年生	私たちの身の回りの環境地図作品展(環境地図教育研究会)	努力賞
1年生	プラン・ジャパン 「読んで世界に近づこう」第1回 読書感想文コンクール	優秀賞
2年生	イオン アジア・ユースリーダーズ (ハノイの大気汚染改善策を競うプログラム)	一位(2名)
1年生 3年生	イオン アジア・ユースリーダーズ (ハノイの大気汚染改善策を競うプログラム)	二位(2名)
1年生	高校生環境小論文コンクール(ベネッセコーポレーション)	優秀賞
1年生	第14回 立命館論文大賞(論文部門)	佳作
1年生	第14回 立命館論文大賞(小論文部門)	優秀賞
1年生	第14回 立命館論文大賞(小論文部門)	入選
1年生	金融と経済を考える高校生小論文コンクール	佳作
1年生	NRI(野村総合研究所)学生小論文コンテスト2014	奨励賞
1年生	JICA 国際協力中学生高校生エッセイコンテスト	佳作
1年生	読売新聞社主催 地球に優しい作文活動報告コンテスト	入賞
2年生	第5回 高校生環境活動発表会 全国大会	優秀賞(4名)
2年生	第15回 日経 STOCK リーグレポートコンテスト(高校部門)	最優秀賞・金融担当大臣賞(5名)
2年生	第15回 日経 STOCK リーグレポートコンテスト(高校部門)	入選(8名)

(2-a) 課題研究に関する国外の研修参加者数

イオン アジア・ユースリーダーズ(ベトナム)	6名
台湾研修	29名

(2-b) 研究に関する国内の研修参加者数

2014 ヤング天城会議(日本アイ・ビー・エム株式会社)	1名
日経エデュケーションチャレンジ	9名
ガールズ1Day(マイナビ)	8名
国際シンポジウム「ダイバーシティリーダーシップ」(お茶の水女子大学)	2名
国際シンポジウム「サステナビリティとジェンダー」(国連大学, お茶の水女子大学共催)	16名
第17回 模擬国連合同練習会	2名
第18回 模擬国連合同練習会	4名

(2-d) 課題研究に関して大学教員および学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)

お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授 小林誠氏	1名×1回
お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 客員教授 宮内篤氏	1名×1回
東京農工大学大学院 農学研究院 教授 畠山史郎氏	1名×1回
お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授 戸谷陽子氏	1名×1回
お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 准教授 近藤るみ氏	1名×1回
お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授 浜野隆氏	1名×1回
お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 教授 三浦徹氏	1名×1回

京都女子大学 発達教育学部 教授 内海成治氏	1名×1回
お茶の水女子大学 留学生(中国、ハンガリー)	2名×6回
東京大学(2名), 東京工業大学(2名), 上智大学(1名), 早稲田大学(2名)の学生	7名×1回
お茶の水女子大学 学生(地理学コース) 6名	6名×1回
東京都立西高等学校 生徒	4名×1回

(2-e) 課題研究に関して企業または国際機関等の外部人材が参画した延べ回数

日本アイ・ビー・エム株式会社	2人×1回
イオントップバリュ株式会社	1人×1回
三井物産株式会社	1人×1回
公益財団法人プラン・ジャパン	4人×1回

(2-f) グローバルな社会またはビジネス課題に関する公益性の高い大会における参加者数

第8回 全国高校模擬国連大会	4名
第15回 日経ストックリーグ	14名
第5回 高校生環境活動発表会 全国大会	4名

8 次年度以降の課題及び改善点

課題研究に関しては、実施1年目ということで、担当教員も次に何をすべきかを模索しながら進めたため、生徒たちが学び得た成果を生かして提言までまとめて発信していく過程に不十分なところがあった。また、生徒のモチベーションの維持やディベート及びディスカッションの質を向上させることも難しく、具体的な目標や評価方法の確立とその共通理解を図っていく必要がある。海外研修に関しても、研修先等が直前に確定するなど、実施初年度ならではの課題が多かった。また、本校1年生及び2年生に向けた海外研修報告会では、報告を聞く生徒たちの報告内容への理解度が低く、質疑応答が活発になされたとはいえなかった。次年度は、より詳細なスケジュール表を作成し、それを提示することで生徒たちの自主的に取り組む姿勢を促すこと、また、単に生徒が内容に満足するだけでなく、その効果に対しても実感が持てるような計画を立案することが課題である。海外研修においては、フィールドワーク先についての新たな検討も含め、より効果的な研修内容や事前学習の模索、また、海外研修報告を聞く生徒たちにとっても効果的な報告会のあり方の検討も課題である。

研究体制に関しては、今年度は3つのグループ（「課題研究グループ」「教養教育グループ」「特別活動・環境整備グループ」）と、それらの長と研究部でつくる「推進班」という組織で研究を行ってきたが、発信については議論する部署がなく、推進班で行うこととなってしまった。また、「教養教育グループ」が意識調査の項目を作成し、教養教育に関しての評価を行ったが、本研究全体を評価する担当組織が必要であった。一方で、環境整備に関しては今年度ほぼ整えることができ、また特別活動に関しても、「グローバル講座」や自国文化理解のための行事は教科主導で実施していく見通しがたっている。そのため、次年度以降の組織は、「課題研究グループ」「連携・評価・発信グループ」の2本立てで行うこととする。

【別紙様式7】

ふりがな	おちゃのみずじよだいがくふぞくこうとうがっこう	指定期間	26～30
学校名	お茶の水女子大学附属高等学校		

平成27年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）								
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(29年度)
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数								
a	SGH対象生徒:		92人	人	人	人	人	360人
	SGH対象生徒以外:		62人	90人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 全員がSGH対象生徒なので、全員が何らかの研鑽に取り組むことを目標にする。(分母は全校生徒360人)								
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数								
b	SGH対象生徒:		31人	人	人	人	人	25人
	SGH対象生徒以外:		17人	12人	人	人	人	人
目標設定の考え方: SGH実施による波及効果を期待するが、海外の安全や保護者の経済状況の影響を受ける。(分母は全校生徒360人)								
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合								
c	SGH対象生徒:		66%	%	%	%	%	75%
	SGH対象生徒以外:		%	65%	%	%	%	%
目標設定の考え方: 初期値が高いので、この高水準を維持・向上させたい。								
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数								
d	SGH対象生徒:		32人	人	人	人	人	20人
	SGH対象生徒以外:		人	10人	人	人	人	人
目標設定の考え方: グローバルな社会的課題に関わるものへの積極的な参加/応募を進めることで入賞者の倍増を目指す。(分母は全校生徒360人)								
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合								
e	SGH対象生徒:		26%	%	%	%	%	25%
	SGH対象生徒以外:		16%	14%	%	%	%	%
目標設定の考え方: 2年生終了時のベネッセ「英語コミュニケーション能力テスト」スコア680以上として設定								
(その他本構想における取組の達成目標)								
f	SGH対象生徒:							
	SGH対象生徒以外:							
目標設定の考え方:								

1' 指定4年目以降に検証する成果目標								
	24年度	25年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度	目標値(32年度)
国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合								
a	SGH対象生徒:		%	%	%	%	%	75%
	SGH対象生徒以外:		51%	63%	%	%	%	%
目標設定の考え方: 今後国際化に重点を置く大学の増加により、進学率は増加が見込まれる。								
海外大学へ進学する生徒の人数								
b	SGH対象生徒:		人	人	人	人	人	4人
	SGH対象生徒以外:		3人	0人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 本人の意欲・関心以外に保護者の経済力に左右される。(分母は1学年120人)								
SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合								
c	SGH対象生徒:		%	%	%	%	%	30%
	SGH対象生徒以外:		-	-	%	%	%	%
目標設定の考え方: 1年次から必修で取り組む「グローバル」関係の科目の履修は専攻分野の選択に影響を与えると期待する。								
大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数								
d	SGH対象生徒:		人	人	人	人	人	25人
	SGH対象生徒以外:		-	-	人	人	人	人
目標設定の考え方: 留学、海外研修の定義によって数値が変わることが予想される。 また、本校では大学院進学率が高く、そこでは上昇が見込まれる。(分母は1学年120人)								

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標 (アウトプット)								
	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	目標値(29年度)
課題研究に関する国外の研修参加者数								
a	1人	10人	35人	人	人	人	人	30人
目標設定の考え方: 「グローバル総合」の受講生30名程度が海外研修を行う。(分母は1学年120人)								
課題研究に関する国内の研修参加者数								
b	1人	13人	42人	人	人	人	人	360人
目標設定の考え方: 必修の「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」の受講者全員が国内研修を行う。(分母は全校生徒360人)								
課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数								
c	0校	1校	1校	校	校	校	校	3校
目標設定の考え方: 語学研修のみの提携校は含まない								
課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
d	4人	6人	37人	人	人	人	人	44人
目標設定の考え方: 大学教員は1講座あたり3人を想定、留学生等は1講座あたり2人×4回を想定、4講座の合計数を算出(H26はグローバル総合3講座で実施)								
課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
e	5人	5人	8人	人	人	人	人	16人
目標設定の考え方: 1講座あたり4人を想定、4講座の合計数を算出(H26はグローバル総合3講座で実施)								
グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数								
f	5人	4人	22人	人	人	人	人	10人
目標設定の考え方: 「グローバル総合アドバンス」受講生を中心に積極的な働きかけを行い、倍増を目指す。(分母は全校生徒360人)								
帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)								
g	3人	3人	1人	人	人	人	人	1人
目標設定の考え方: 附属中学からの帰国留学生を受け入れているがこれは含まない(タイ国費留学生減少に伴い減員。分母は全校生徒360人)								
先進校としての研究発表回数								
h	0回	0回	1回	回	回	回	回	2回
目標設定の考え方: 公開教育研究会や全附属関係では毎年発表は行っているが、テーマはグローバルに限定していない。指定後はグローバルを中心に研究発表の機会を設ける。								
外国語によるホームページの整備状況								
i	○整備されている △一部整備されている ×整備されていない							
		△	△					○
目標設定の考え方:								
(その他本構想における取組の具体的指標)								
j								
目標設定の考え方:								

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度
全校生徒数(人)	360	360	358	0	0	0	0
SGH対象生徒数			358				
SGH対象外生徒数			0				

Ⅲ 実施報告書

1 研究開発の概要

(1) 研究開発の概要

グローバルな社会的課題の発見・解決を目指して探究的な学習を行う、必修の課題研究「グローバル地理」、「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」と、選択科目の「グローバル総合」、「グローバル総合アドバンス」、及び確かな基礎学力と広い教養の涵養を目指す「教養教育」の教育課程の研究開発を行う。

(【別紙様式5】平成26年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要を参照)

(2) 本年度の研究開発の経緯

指定1年目の本年度は、3つのグループ(課題研究グループ、教養教育グループ、特別活動環境整備グループ)に分かれて活動を行い、その統括と推進を推進班がおこなった。

カリキュラム開発に関しては、本校の総合的な学習の時間において実績のある課題研究型の講座「国際協力とジェンダー」に新たに2講座(「経済発展と環境」、「国際関係と課題解決」)を加え「グローバル総合」とし、これらを中心としたSGHプログラムの開発と試行を行った。また、海外研修先(ベトナム、台湾)での社会課題に関するディスカッションや、グローバルな社会課題をテーマとした大会への参加などを取り入れながら、課題の発見・解決を目的とした課題研究型の学習方法も模索した。加えて、次年度以降開講する「グローバル地理」、「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」、「グローバル総合アドバンス」の開発準備も行った。こうした講座以外では、企業や国際NGOとの連携によるグローバルな諸課題に対する関心を高めるための「グローバル講座」や、自国文化理解のためのプログラム(歌舞伎教室、文楽教室)を実施し、海外研修先の開拓や交流協定締結も行った。また、グローバルリーダー育成に関する環境に関して、校内のみならず、お茶の水女子大学の資源を活用し、整備した。加えて、生徒意識調査を2回行い、生徒の基本情報を把握することで、意識の変化による今年度の取り組みの分析及び次年度以降の取り組みの方向性の検討を実施した。

(3) 本年度の具体的な取り組み内容

①課題研究グループ

- ・課題研究「グローバル総合」の試行とカリキュラム開発及び生徒・担当教員による評価
- ・課題研究「グローバル地理」、「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」、「グローバル総合アドバンス」のカリキュラム開発準備
- ・大学の留学生の活用、企業や国際NGO、大学教員等の外部人材の活用
- ・海外研修の事前研究と現地プログラムの開発
- ・生徒による成果発表会及び関係者・第三者による評価

②教養教育グループ(主に教養教育の効果に関する分析)

- ・生徒意識調査の項目検討及び実施と分析
- ・「グローバルを意識した授業」の実施と分析
- ・卒業生調査の実施と分析

③特別活動・環境整備グループ

- ・「グローバル講座」のテーマ及び講師の選定と実施
- ・大学が行うサマープログラムへの高校生の参加
- ・e-learningシステムの附属高校生の利用方法の検討と実施
- ・自国文化理解のためのプログラム検討と実施
- ・AFS等留学機関からの留学生受け入れ

④推進班(主に研究の統括・推進)

- ・海外提携先の開拓及び視察・交流協定締結
- ・先進校視察、フィールドワーク先の現地視察
- ・ホームページの開設と運用
- ・パンフレット作成
- ・研究開発実施報告書の作成

2 各研究グループの取り組み（研究開発の内容・評価・課題・成果の普及等）

2-1 課題研究グループ

(1) -1 グローバル総合

(1) -1. 1 「経済発展と環境～持続可能な開発を目指して～」

①実施のねらい

1年次の「グローバル地理」で獲得した知識・技能を土台に、アジアの環境問題の現状を理解し、解決方法を探るための議論・探究を行うことで、主体的に課題を発見し解決する能力やコミュニケーション能力を養う。また、環境問題を解決するための具体策を検討したり、異質な意見をまとめたりする経験を通して、公共性と倫理観、リーダーシップを備えた未来のグローバルリーダーの育成を図る。

②課題研究の内容

2年生の選択者9名を対象に実施。実施内容の概要は以下の通り。

- | | |
|--------|---|
| 4月 | ・ベトナムの地理的情報を収集した。また映像資料を通じて、ベトナム戦争の枯葉剤による環境破壊の事実及び現在まで続く影響を考察した。 |
| 5月 | ・映像資料や文献を通じて、日本がどのように公害問題を克服してきたかを調査した。 |
| 5月～7月 | ・文献や新聞記事、インターネットを通じて、ベトナムを中心にアジアの環境問題の現状を調査し、各自が発表した。
・お茶の水女子大学の留学生を授業に招き、出身国の環境問題を紹介してもらった。また、留学生とともに、ベトナムの大気汚染改善に向けた対策について、英語でのディスカッションを実施した。 |
| 7月 | ・大気汚染研究の第一人者である東京農工大学大学院教授畠山史郎氏による講義を実施した。
・東京大学、東京工業大学、早稲田大学、上智大学の学生と、都立西高校の生徒を招き、ベトナムの大気汚染の解決方法について考え、ディスカッションを実施した。 |
| 8月 | ・受講者のうち5名が、イオンワンパーセントクラブによるアジアユースリーダーズのメンバーとしてベトナムのハノイを訪問し、フィールド調査を実施した。また、アジア諸国の高校生と討論しながら、ハノイの大気汚染の解決方法を模索し、共同提言を行った。 |
| 9月 | ・ホームページ、校内新聞、文化祭でベトナム研修の成果を発表した。 |
| 10月 | ・三井物産株式会社より講師を招き、再生可能エネルギーと持続可能な社会について議論した。
・イオントップバリュ株式会社より講師を招き、フェアトレードと持続可能な社会について議論した。
・受講者のうち4名が、フィールドワークの一環として台湾を訪問し、台北市立第一女子高級中学の生徒と互いの国の環境対策について討論した。 |
| 11月 | ・お茶の水女子大学地理学コースの学生に向けて、海外研修（ベトナム、台湾）の成果をプレゼンテーションした。また、12月の校内報告会に向けて、プレゼンテーションの改善に向けてのアドバイスをもらった。 |
| 12月 | ・校内の発表会、後援会の雑誌で海外研修（ベトナム、台湾）の成果を発表した。 |
| 12月～1月 | ・「これまでの学習を通じて発見した課題に対して、解決方法や提案を考える」というテーマでの論文作成を冬季休業中の課題として設定した。また、冬季休業明けにその報告と修正を行った。 |
| 2月 | ・環境省が後援する高校生環境活動発表会の全国大会に出場し、環境にやさしい街づくりについて提言を行った。 |
| 3月 | ・生徒論文発表会（予定） |

③実施の効果とその評価

③-1 授業内アンケート結果

③-1. 1 ベトナム研修前（4月～7月、事前学習及び準備期間）

研修に参加した生徒に対し、帰国直後の9月に、事前学習及び準備期間についてのアンケート調査を実施した（下表）。その調査から、生徒たちはより実践的な学習に対して大きな効果を実感していることが分かる。たとえば、お茶の水女子大学の留学生との英語でディスカッション練習（評価項目4）や、大学生との合同勉強会及び英語でのディスカッション練習（評価項目6）に対し、全員が「とても役に立った」と回答している。このような実践的な学習は、主体的に自分の意見を発信し、コミュニケーション能力を高める上でも有効であったと考える。

また、実践的な学習に比べると評価が高くないが、東京農工大学の専門研究者による講義を受けたこと（評価項目7）や、高度経済成長期の日本の公害問題について学習したこと（評価項目2）は、知識を深め、探究活動の基礎づくりとして、欠かすことができなかつたと考える。

（単位：人）

	評価項目	とても役に 立った	まあまあ役 立った	あまり役立 たなかつた	役立たな かつた
1	ベトナムの環境問題についての事前 調査と発表会	3	2	0	0
2	日本の公害問題についての事前学習	2	3	0	0
3	留学生との交流や彼らの話を聞いた こと	3	2	0	0
4	留学生とのディスカッション練習	5	0	1	0
5	西高生とのディスカッション練習	5	1	0	0
6	大学生との合同勉強会・ディスカ ッション練習	6	0	0	0
7	専門家（東京農工大学大学院教授 山史郎氏）の講義	2	4	0	0

※ 項目1～5については計5名の回答

③-1. 2 ベトナム研修（8月）

（1）-5 イオン アジア・ユースリーダーズを参照

③-1. 3 民間企業より講師招聘

三井物産株式会社、イオントップバリュ株式会社より講師を招き、海外のビジネスや環境保全の活動に関する情報提供を受けるとともに、持続可能な社会について議論した。以下は生徒の声の抜粋である。

（i）テーマ：再生可能エネルギーについて

- ・再生可能エネルギーは现阶段ではコストが高く、日本における普及は十分でない。そのコストを抑える技術を開発するのが私たちの世代の役割であると思う。それゆえ、風間先生がおっしゃっていたように、理系と文系両方の知識を備えることが必要であると感じた。再生エネルギーだけで全てをまかなうことは難しくても、化石エネルギーと再生エネルギーを上手く組み合わせた社会を作っていけたらと考える。
- ・以前から再生可能エネルギーに興味があったので、お話を聞いて理解を深めることができた。シェールガスなどが発見されて、しばらくは化石燃料の供給も大丈夫ということがわかったが、私たちの世代だけで資源を使い切ってしまうといけないので、次の世代にも残せるよう考えていかなければと感

じた。

- ・世界で活躍されている風間先生のお話を伺うことで、再生可能エネルギーへの理解が深まると同時に、資源エネルギー問題を自分の身近に感じようになった。有限な資源に頼るだけでなく、自分たちの世代が新エネルギーへの解決策を見つけないといけないと思い、大いに刺激を受けた。
- ・私たちが日々使っているエネルギーがどのように変化しているかを学べ、また、自分の質問もどんどんぶつけられる貴重な機会だった。風間先生のお話を聞いて、専門分野に特化することももちろん大切だが、広い分野まで知識を広げていくことの大切さを再認識した。自分の進路を考える上での参考にもなった。

(ii) テーマ：「南北格差とフェアトレード」

生徒の声（抜粋）

- ・フェアトレードの仕組みは家庭科で学んで知っていたが、それを経済的な面から見たことがなかったので、新たな視点をもつことができた。日本にフェアトレードの商品が普及しないのはなぜかをみんなで考えてみて、まだまだ課題が多いことが分かった。
- ・フェアトレードは私たちのような若年層にしか知られていないことも問題であるが、裏を返せば私たちの世代が成長して消費の中心になったらもっと普及するのではないかと思う。また、私たちが自分たちの親や祖父母の世代に伝えていなければならぬと感じた。

③-1. 4 台湾研修（10月）

(1)-6 台湾研修を参照

③-1. 5 海外研修（ベトナム、台湾）

12月に講座独自の事後アンケートを実施した。受講者の全員が、海外研修後も意欲や興味・関心の高まりが継続していると回答している。海外研修に参加したことで、より具体的に将来国際的に働きたいと思うようになった、アジアの学生の勤勉な姿に刺激され、意欲的に学習するようになったといった効果が表れているようである。

③-2 全校生徒対象アンケートの結果

顕著にあらわれた結果として、「総合的な学習の時間を通し、現代社会の諸課題に関心を高められる」という質問があげられる。12月時点で受講生徒全員（100%）が「①大変そう思う」「②ややそう思う」と回答しており、同時点の2学年全体の値（67.3%）と比較して著しく高い。7月時点では88.8%が「①大変そう思う」「②ややそう思う」の回答であったことを考えると、受講を進め探究活動が継続するにしがたい、さらに生徒たちは現代社会の諸課題への関心を高めていったといえる。

取組全般に関する質問では、留学生との交流事業について、12月時点で受講生徒全員（100%）が「①大変そう思う」「②ややそう思う」と回答している。同時点の2学年全体の値（77.0%）に比べ、その差は顕著である。本講座では、5月から9月まで継続的にお茶の水女子大学の留学生と英語で大気汚染問題についてディスカッションする機会を設けてきたが、生徒は有効な取り組みと感じたようである。

「国際化に重点を置く大学へ進学したいか」という質問に対しては、7月時点で「①大変そう思う」「②ややそう思う」と回答した生徒は55.5%で、2学年全体の52.2%と大きく相違ないが、12月時点では77.8%が「①大変そう思う」「②ややそう思う」と回答しており、2学年全体の54.9%と大きく違いが出ている。「大学で留学したい」とする生徒も1月時点で88.9%にのぼり、世界で活躍する可能性を持った生徒の増加が期待できるのではないかと思う。

④研究開発上の課題および今後の研究開発の方向・成果の普及

海外フィールドワーク後にその成果を校内で発表した。意欲の高い生徒にとっては、成果報告会が1つの目標となり、探究活動を積極的に行う動機づけになったようである。さらに、高校生環境活動発表会の全国大会に出場できたことは、次年度以降の学習者へもよい刺激を与えたものと考えられる。

しかし、受講者の約半数が参加したベトナム研修は、一般財団法人イオンワンパーセントクラブ主催のものであり、次年度以降も本校から複数名が参加できるとは限らない。そのため、次年度以降の海外フィールドワークについて、新たに検討する必要がある。

(1) - 1. 2 「国際協力とジェンダー～人権・格差～」

①実施のねらい

ジェンダーの視点をふまえてグローバルに諸問題を捉え発信し得る力を持つ女性リーダー育成を目指す。具体的には、世界各地で抱える貧困や紛争地域における、女性の地位の低さの問題について現状を理解する。一方、女性の立場に配慮した援助や開発による新たな問題解決方法について、世界各地の女性・男性のありかたや問題点を調べ、背景を探り、解決・解消に向けてどのような協力ができるか、海外の高校生との連携や共同研究も視野に入れ、幅広い角度から考え、手法を探る。

さらに、グローバルな問題を考えるとともに、自己の在り方、生き方、進路といったキャリアデザインも合わせて考えつつ、発信していく力を養う。

②課題研究の内容

2年生の選択者16名を対象に実施。実施内容の概要は以下の通り。

- 4月 ・ 講座の目的の確認と自己紹介といったガイダンスを実施した。
- 5月 ・ ジェンダーについて、ジェンダーセンシティブの基本的な概念を理解した。
・ ジェンダーへの歴史的アプローチを「日本女性史」「日本女性の歴史」等から考え、未開社会、日本の原始から古代について概観した。
・ お茶の水女子大学戸谷陽子氏による講義「アートに表象されるジェンダー」を受け、アートの世界を題材に表象リテラシーを学んだ。また、講義を受けて、感想・意見交換を行い、考えを深めた。
- 6月 ・ お茶の水女子大学近藤るみ氏による講義「遺伝子からみるジェンダー」を受け、生物学的な男女の違いについて学ぶとともに女性研究者としての立場からお話を伺った。また、感想・意見交換を行い、考えを深めた。
・ お茶の水女子大学浜野隆氏による講義「開発と教育」を受け、国際協力の基本的な概念と国際協力の現状と課題について学び、感想・意見交換を行い、考えを深めた。
- 7月 ・ ジェンダーならびに国際協力についての意見交換を行うために、台北市立第一女子高級中学との交流準備を行った。
・ 1学期のまとめ（感想・討議）及び夏季休業中の課題のテーマの設定について話し合った。
- 9月 ・ 課題レポートの発表を実施した。また、レポート発表を聞いて意見交換を行い、考えを深めた。
- 10月 ・ 国際NGOである公益財団法人プラン・ジャパンの活動について学び、来日ユースによる講演会開催後に交流会を行った。
・ 台北市立第一女子高級中学との交流準備を行った。（メールやグーグルソフトを使用したアンケートの実施）
・ 台湾研修を実施した（16名中15名参加）。
- 11月 ・ 国連大学ならびにお茶の水女子大学共催の国際会議「サステイナビリティとジェンダー」に参加し、国際的な視点から開発教育の現状を学ぶとともに、ジェンダーの概念とのつながりについて学んだ。
・ 台湾研修を終えて、交流・活動内容をレポートにまとめた。
・ お茶の水女子大学三浦徹氏による講義「『アラブの春』その後」を受け、中東諸国における現状および宗教と国際協力の在り方とその課題について考えた。また、感想・意見交換を行い、考えを深めた。
- 12月 ・ 海外研修発表会の準備を行い、交流の成果について発表を行った。
・ 2学期のまとめ（感想・討議）並びに年間テーマの確認を行った。
- 1月 ・ 冬季休業中課題の発表を行い、レポート発表を聞いて意見交換を行い、考えを深めた。
・ 京都女子大学内海成治氏による講義「国際協力の現状と課題」を受け、国際協力の事例と課題について学び、感想・意見交換を行い、考えを深めた。
- 3月 ・ 生徒論文発表会（予定）

③実施の効果とその評価

③-1 授業内アンケートの結果

大学の専門家による講義について、各授業後に実施したアンケートの結果は下の表の通りであった。専門家ならではの広い見地からのお話し、現地へ赴かねばわからないことなど内容の濃いものであり、生徒も大変満足感が高かった。授業を受けて新たな課題や取り組むべきことに気づき、そこから自己の課題設定につなげることができた。

(単位：人)

	評価項目	非常に満足	かなり満足	どちらとも いえない	あまり満足 でない	全く満足で ない
1	大学の先生方の講義1	13	3	0	0	0
2	大学の先生方の講義2	8	7	1	0	0
3	大学の先生方の講義3	16	0	0	0	0
4	大学の先生方の講義4	15	1	0	0	0
5	大学の先生方の講義5	15	0	0	0	0

*講義5は、1名欠席のため総数が15名となっている。

台湾における海外研修や国際会議への参加は、生徒にとって大きな経験となったといえよう。海外研修に至っては、その土地の文化や歴史を学ぶとともに何よりも現地に足を運ばなければわからないことを大いに感じることができた。また、コミュニケーション能力のさらなる研鑽の必要性を感じ取ることができた。これらは将来に必ず大きな成果となると考える。

③-2 全校生徒対象のアンケート調査結果

7月と12月に実施したアンケート結果による、本講座受講者の授業評価を以下に述べる。

まず、受講者各自の意識変化に関して、取組全般・教養の項目の中で最も意識が高まったのは、「自主的に社会貢献や自己研鑽活動に取り組みたい」であった。「海外に留学したり、仕事で国際的に活躍したい」や「SGHの取組は、大学の専攻分野の選択に影響を与える」も意識が高まっていた。課題を発見し解決する力の項目では、「自主的に探究課題を発見できる」が最も意識が高まっていた。言語活用能力の項目では、英語を活用する能力について「トピックが身近であれば、長い話や複雑な議論を英語で理解できる」「文章の構成を意識しながら、必要な情報を手に入れられる」で、顕著な意識の高まりを確認することができた。また、日本語を活用する能力については「学んだトピックや興味や経験の範囲内なら、抽象的でも議論できる」「自分の意見を聴衆の前で述べられ、質問にも応じられる」「成果や提案などを効果的に伝えたり、論文を書けるようになりたい」において、意識の高まりを確認することができた。

評価が低くなった項目は、「SGHの取組は、面白そう」や「幅広い教養、進路選択に有効『選択基礎』」「綿密な読みが必要な場合、読む速さや読み方を変えて、正確に読める」「関心の高いトピックを、相違点や共通点を比較しながら読める」「ディベートやディスカッションなどで、論拠を並べて主張を述べられる」であった。

さらに、12月に実施したアンケートにおける本講座受講者と2学年全体との比較を試みた。ほとんどの項目において「①大変そう思う」「②そう思う」と回答した生徒の割合は、本講座受講者の方が高かった。特に高かったのは、留学生との交流事業が幅広い教養・進路選択に有効であるかを問う項目と、自主的に社会貢献や自己研鑽活動に取り組みたいかを問う項目であった。

なお、「課題学習において大切なこと」として挙げられた内容は、次の通りである。

<ul style="list-style-type: none"> ・興味・関心 目的意識・客観的に多面的に考えること ・なぜ、という疑問を頭の中に留めておくこと ・どうしてそのようなことが起きてしまうのかという原因の考察

- ・いくつかの視点から見た内容を論拠にすること
- ・色々な文献を読み、客観的且つ論理的な考察をすること
- ・調査の正確さ、深さ、表現力の豊かさ
- ・正しい情報を選択する、メディアリテラシー！
- ・テーマ設定の仕方・コミュニケーション能力
- ・色々な立場から調べる物事を見て考えること
- ・論理的な思考力・調べた後、自分の考えを決めること

以上のことから、幅広い教養を通しての自己研鑽や社会貢献に取り組もうとする意識が高まり、自己の在り方、生き方、進路といったキャリアデザインも合わせて考えることができたといえよう。

④研究開発上の課題および今後の研究開発の方向・成果の普及

初年度ということもあって、担当教員も次に何をすべきかを模索しながら進めていく中で、生徒ともども戸惑うこともあった。それが学び得た成果を生かして提言までまとめて発信していく過程の不十分さにつながったことは否めない。また、「総合的な学習の時間」という、受験科目ではなく具体的評価もつかない中で、生徒のモチベーションをいかに維持させるかも課題である。次年度に向け、はじめに年間授業計画だけでなくスケジュール表を提示し、自主的に取り組む姿勢を促すこと、また、早めに事前準備に取り掛かり、夏季休業中にはある程度自国及び他国理解を含めた基本的な情報の共有などを済ませておく必要があると考える。

(1) - 1. 3 「国際関係と課題解決～貧困・平和・人権～」

①実施のねらい

現代の社会では、グローバル化の進展により、文化や信条の異なる人たちとの一層の協働が求められるようになってきている。同時に、国境を越えたグローバルな課題が生じ、山積している。そうした問題の解決は、国際関係を考慮したうえでの解決策立案でなければ現実性をもたない。本講座は、貧困や平和、人権といったグローバルな課題が発生する背景に何があるのか、そしてその解決のためには現実的にどうすべきかを探究する活動を通じて、グローバルな視野とグローバルな課題解決力をもった人材を育成することを目的とする。

②課題研究の内容

今年度の本講座における課題研究のテーマは2つある。1つは「今後の日本のODAはどうあるべきか」、もう1つが「グローバルな社会的課題を投資行動で解決する」である。これらの課題研究を通して、グローバル化が進む世界において日本はどうしていくべきか、また自分自身どうしていくべきかを考える内容とした。また、課題研究をしていく際に必要となる基礎的能力を身につけるため、課題解決のための論理的思考力やグローバルリーダーシップ、現代の国際関係、国際交渉の実際といった講義を、担当教諭だけでなく、日本アイ・ビー・エム株式会社やお茶の水女子大学と連携して実施した。詳細な実施内容は以下の通りである。なお、本講座の受講者数は14名（途中海外留学生1名）である。

- | | |
|-------|---|
| 4月～5月 | <ul style="list-style-type: none"> ・ガイダンスとして、本講座の目的やスケジュールを説明した。 ・本講座の導入として、課題解決のための論理的思考力を身につける演習をグループワーク形式で実施した。課題解決の手順を、課題の定義、原因究明、解決策立案、選択・実行の4局面に分け、それぞれの局面でブレインストーミングやロジックツリーを用いて最適な解を導くという内容である。また、課題解決策の優先順位を、実行難易度と効果のマトリクスにおいて論理的に決定する演習や、数値目標のある解決策立案のためのアンケート調査の方法の演習も実施した。 |
| 5月 | <ul style="list-style-type: none"> ・日本アイ・ビー・エム株式会社の協力をいただいて、「グローバルリーダーシップ」をテーマにした講義・演習を実施した。グローバルな諸課題を解決するためには、日本国内だけでなく、グローバルな協業が求められる。そうした場面においてもリーダーシップを発揮できる力を身につけるために、本講座はグローバル企業である |

日本アイ・ビー・エム株式会社がどのような活動をしているのかを学び、また、どのようなリーダーシップが必要となっているのかを学ぶ内容とした。日本アイ・ビー・エム株式会社は「日経 WOMAN による女性が活躍している企業ランキング」で 2011 年から 2013 年まで 1 位、「東洋経済新報社による多様な人材を活用している企業ランキング」で 2011 年にダイバーシティ経営大賞となっている企業であるため、女性のグローバルリーダーシップに関してより具体的・実践的な講義となった。また、「もしもあなたがグローバルチームのリーダーだったら」という演習を実施し、グローバルな協業において何が最も重要なのかを考えた。

- 6 月
 - ・お茶の水女子大学小林誠氏の協力をいただいて「現代の国際関係にどう踏み込むか」というテーマの講義を実施した。まず、現代の国際関係にはリアリズム（現実主義）とリベラリズム（自由主義）の 2 つの見方があることを学んだ。次に、国際関係のモデルとしてチキンゲームと囚人のディレンマの 2 つを学び、囚人のディレンマを克服する方法として「tit-for-tat 戦略」を学んだ。最後に、1997 年のハノイ対話の映像資料をもとに、対立を協調に変えるためにどうすべきかを学んだ。
- 7 月
 - ・第 8 回全国高校模擬国連大会の課題である「今後の日本の ODA のありかた」や「人間の安全保障」に関して、2 人 1 組のグループワーク形式で探究活動を実施した。なお、本探究活動の夏季休業中の課題でもある。
- 9 月
 - ・お茶の水女子大学宮内篤氏の協力をいただいて「国際交渉の実際」というテーマの講義を実施した。国際通貨基金為替通商局エコノミストの経験やバーゼル銀行監督委員会への参加経験をふまえ、国際交渉がどのように行われているか、どのような点がポイントとなるのかについて学んだ。また、国際会議がどのように進められるのか、国際合意への道はどのようなものかについて学んだ。最後に、日本が活路を見出すためのポイントについて学んだ。
 - ・7 月以降取り組んできた探究活動の成果発表を実施した。なお、希望する 4 チーム 8 名の中から上位 2 チームを第 8 回全国高校模擬国連大会への学校代表として大会にエントリーしたところ、2 チームともに第一次審査を通過し、マレーシア大使役、メキシコ大使役として 11 月に実施される本選（全国大会）に出場することとなった。
- 10 月～12 月
 - ・「グローバルな社会的課題を投資行動で解決する」ことをテーマに、4～5 名のグループワーク形式で探究活動を実施した。なお、その成果の客観的な評価を得ることを目的として、第 15 回日経 STOCK リーグに参加した。
- 12 月
 - ・本校 1 年生及び 2 年生に向けて、第 8 回全国高校模擬国連大会の成果発表会を実施した。
 - ・「自身で社会的課題を設定し、その解決策を考える」というテーマでの論文作成を、冬季休業中の課題として設定した。
- 1 月～2 月
 - ・外国人講師 2 名による、使用言語を英語に限定する講座を 5 回実施した。内容は、冬の課題論文の Abstract の作成やその添削、また英語でのプレゼンテーションやディスカッションである。なお、その 5 回は、次年度から開講するグローバル総合アドバンスの試行として位置付けている。
- 3 月
 - ・生徒論文発表会（予定）

③実施の効果とその評価

③-1 講座内アンケートの結果

本講座の効果検証として、2 つの視点で講座内アンケートを実施した。テーマごとに実施した満足度調査と、12 月末に実施した効果調査である。満足度調査は「今日の授業を受けてどの程度満足したか」を 5 段階に分けたアンケート形式で実施した。効果調査は「本講座を振り返ったとき、それぞれのパートがどの程度その後の探究活動に役に立ったか」を 4 段階に分けたアンケート形式で実施した。これらと比較することで、次年度以降その内容を効果的に修正することをねらいとしている。

満足度調査

(単位：人)

	調査項目	非常に満足	満足	普通	不満	非常に不満
1	日本アイ・ビー・エム株式会社による授業① 「グローバルな働き方」	6	6	1	0	0
2	日本アイ・ビー・エム株式会社による授業② 「グローバルリーダー演習」	2	7	3	1	0
3	お茶の水女子大学小林誠氏による授業	5	6	2	0	0
4	お茶の水女子大学宮内篤氏による授業	6	3	4	0	0
5	本講座全体の満足度	3	7	3	0	0

効果調査

(単位：人)

	効果調査	非常に役立った	役立った	あまり役立たなかった	全く役立たなかった
1	論理的思考に関する授業	5	6	0	1
2	日本アイ・ビー・エム株式会社による授業	2	3	6	1
3	お茶の水女子大学小林誠氏による授業	0	5	5	2
4	お茶の水女子大学宮内篤氏による授業	3	0	8	1
5	第8回全国高校模擬国連大会(校内選考を含む)	4	3	0	0
6	第15回日経STOCKリーグ	6	5	1	0

※項目5は大会への参加を希望した8名のみ回答

これらの調査結果から、今年度の本講座に対する満足度は一定程度あるが、その効果に関しては生徒が実感しづらいものであったことが分かる。とりわけ、日本アイ・ビー・エム株式会社やお茶の水女子大学といった外部講師による授業ではそれが顕著である。授業1つひとつの内容に満足はしても、最終的にそれが年間の活動の中でどのように位置づいているのかが明確でなかったためこのような結果となったのだろう。本講座では、12月に生徒自身が課題設定をし、それについて探究活動をして論文作成をすることを活動のまとめとしている。生徒一人ひとりが異なる課題設定をするため実現が困難ではあるが、極力12月の探究活動に収束していくような年間計画を作成することが次年度の課題と考えている。

③-2 全校生徒対象アンケートの結果

7月と12月に実施したアンケート結果をもとにした本講座の効果検証のうち、特記すべき点は以下の通りである。なお、表中の値は、第2回アンケートにおける第1回アンケートからの数値の伸びを表す。

(単位：%)

	項目	大変 そう 思う	やや そう 思う	どちら とも 言 えない	あまり そう 思 わ な い ／ あ ま り で き な い	全く そ う 思 わ な い ／ 全 く で き な い
1(7)	国際化に重点を置く大学へ進学したい	-1	+11	+11	-20	±0
1(10)	可能であれば、海外の大学に進学したい	+17	-6	+4	-8	-6
3(1)	自主的に探究課題を発見できる	+8	+15	-27	+4	±0
4-II (2)7	ディベートやディスカッションなどで、 論拠を並べて主張を述べられる	-19	-1	+11	+10	±0
4-II (2)8	考えの根拠を示し、語いや文構造を適切 に用いて、論理的な文章を書ける	-5	+31	-37	+10	±0

「国際化に重点を置く大学へ進学したい」という項目に対して、「④あまりそう思わない」と回答した割合が20%減少し、「②ややそう思う」と回答した割合が11%増加した。また、「可能であれば、海外の大学に進学したい」という項目に対して、「①大変そう思う」と回答した割合が17%増加した。これらのことから、本講座は生徒の進学先に対するグローバル意識を高めたといえる。また、「自主的に探究課題を発見できる」という項目に対して、「①大変そう思う」「②ややそう思う」と回答した割合が、合計で23%増加した。このことから、本講座は社会的課題に対して自ら課題を設定する意識を高めたといえる。

「考えの根拠を示し、語いや文構造を適切に用いて、論理的な文章を書ける」という項目に対して、「②ややそう思う」と回答した割合が31%増加したが、一方で「ディベートやディスカッションなどで、論拠を並べて主張を述べられる」という項目に対して、「①大変そう思う」と回答した割合が19%減少し、「④あまりできない」と回答した割合が10%増加している。これらのことから、本講座はレポートや論文に必要な能力を向上させることはできたが、その過程にあるディベートやディスカッションに必要な能力を向上させる点については課題が残ったといえる。

④研究開発上の課題および今後の研究開発の方向・成果の普及

アンケート分析の結果から、本講座の研究開発上の課題は2点挙げられる。1つは外部との連携による特別授業のテーマ設定である。年間の活動における特別授業の位置づけを明確にし、生徒が内容に満足するだけでなく、その効果に対しても実感が持てるよう計画を立案する必要がある。もう1つは、ディベートやディスカッションに必要な能力を向上させる工夫である。レポートや論文の作成数を見直し、ディベートやディスカッションにあてる時間を確保するとともに、生徒自身にディベートやディスカッションへの評価軸を持たせるような工夫が必要である。今後の研究開発の方向に関しては、生徒のグローバル意識の向上が見られている以上、概ね今年度の方向でよいのではないかと考えている。あとは先述した課題を克服していきたい。

(1) - 2 グローバル地理

①実施のねらい

グローバルな社会的課題を学び、幅広い教養を備えたグローバル人材としての土台を育成する。また、学習の成果を個人やグループでまとめ、発信することで、主体性・積極性・チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感などを養う。

②課題研究の内容

次年度の開講に向けて、以下の試行を行った。

- 4月～6月 ・世界の自然環境の学習を通じて、地形環境や気候環境が人々の生活に及ぼす影響について理解させた。
- 7月 ・文献やインターネットを通じて、世界の環境問題の現状を調査し、その成果をグループ単位で発表した。課題設定に関しては、夏季休業中の小論文コンクール等への応募を念頭に置くことを指導した。
- 7月～8月 ・夏季休業中の課題として、以下に取り組み、外部の小論文コンテスト・コンクールに発信した。
- 必修課題：「読んで世界に近づこう」というテーマのもと、発展途上国の女性が抱える問題について考え、自分の意見を発信させた。公益財団法人プラン・ジャパン主催の読書感想文コンクールに応募。
- 選択課題：以下の4つのコンクールの中から1つを選択し、自分の意見や探究成果を発信させた。
- 1) Benesse 主催 高校生環境小論文コンクール
 - 2) 読売新聞社主催 環境小論文コンテスト
 - 3) JICA 主催 国際協力に関する高校生エッセイコンテスト
 - 4) 環境地図教育研究会主催 第24回私たちの身のまわりの環境地図作品展
- 9月 ・世界の農業の発達と特色、経済のグローバル化、民族・言語・宗教についての学習を通じて、経済と文化における地理的環境や歴史的背景の影響を考察した。
- 10月～12月 ・アジアの諸地域について、自然環境の特色や社会と産業の特色を理解するとともに、民族問題・宗教問題などの地理的な諸課題を地域性や歴史的背景、日常生活を踏まえて考察した。
- 12月 ・公益財団法人ジョイセフの専門講師による講義を通じて、世界と日本の人口問題、妊娠・出産と女性の生き方、発展途上国の問題などについて考察した。
- 12月～1月 ・冬季休業中課題として、新聞を読み、興味・関心をもった社会的な諸課題（2話題以上）に関する自分の意見を、新聞の読者欄に投書した。

③実施の効果とその評価

1年生「地理A」において試行として実施したが、中学までの段階でグループ学習を経験したことがない生徒が多く、7月のグループ発表では初めての経験に戸惑う生徒もいた。自分の意見を発信する訓練を重ねていくことを通じて、主体性・積極性・チャレンジ精神、責任感・使命感などを養っていく必要があると考える。

夏季休業中には、7月に行った調べ学習の成果等を個人で発信する手段として、外部の小論文コンクール等へ応募させた。いずれのコンクールにおいても、優秀賞等を受賞する生徒が出た。受賞した生徒が自信をつけたのはもちろんのことだが、周囲の生徒にとっても、身近な友人たちが受賞するのを目の当たりにすることで、大きな刺激を受けたものと考えられる。

12月には、人口問題について、専門講師による講義を受けた。講義後のアンケートでは、約8割の生徒が内容を理解できたと回答し、約7割の生徒が興味・関心が向上したと回答している。人口問題という、一見進路とは全く関係ないテーマであるにもかかわらず、進路の参考になったと回答した生徒が3割、どちらかといえばそうであると回答した生徒を含めると約7割が参考になったと回答した。また、自由記述から、発展途上国の現状を知ること、望まない妊娠などを原因とする人口爆発の問題等に対し女性として自分が何かできるのではないかと、またしなければならぬのではないかとという責任感・使命感を感じた生徒が多くいたことがうかがえた。グローバルな女性リーダーを育成する上で、有意義な講義であったと考える。

冬季休業中課題として、新聞を読み、現代社会の諸課題に対する自分の意見を発信することを課した。普段、新聞を読む習慣がある生徒は多くなく、最近では家庭で新聞を購読していないケースもあるため、課題発見能力の向上、幅広い教養を備えた人材の育成といった面だけでなくメディア・リテラシーを育成する一手段としても有効であったと考える。学年120名の生徒のうち、1割を超える相当する生徒の

意見が、読者欄に掲載されたことで、新聞を身近に感じるとともに、自分の意見を発信することへの抵抗感が払拭された意義は大きいと考える。

④研究開発上の課題および今後の研究開発の方向・成果の普及

今後もお茶の水女子大学等との連携をさらに図っていきたい。専門研究者の講義を受けることで、当該分野の知識を向上させ、興味・関心を高めるとともに、探究的な学習においてより深く学習することができることを期待する。しかし、特別授業期間以外に外部講師を招聘することは、時間割の制約が大きく、次年度以降の課題である。

(1) - 3 持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ

①課題研究のねらい

「持続可能な社会の探究Ⅰ」（第2学年次）及び「持続可能な社会の探究Ⅱ」（第3学年次）は、「グローバル地理」（第1学年次）（平成26年度は「地理A」）や各教科の授業、グローバル講座における学習を通して高めた興味・関心に基づき、持続可能な社会を実現するための課題を各自が発見し、課題研究のテーマを設定し、協同して探究的な学習活動を行うことを通して、課題設定及び解決の能力を高めていくことを目的とする。また、「グローバル地理」や各教科、「グローバル総合」を含めた「総合的な学習の時間」、グローバル講座等の学習活動により獲得した知識、思考力、技能を活用する機会を設けることにより、それらの能力をより高めていくことも期待できる。

②課題研究の内容

準備期間中につき特記事項なし。

③実施の効果とその評価

準備期間中につき特記事項なし。

④研究開発上の課題および今後の研究開発の方向・成果の普及

今年度は、次年度以降に上記①のねらいを達成するための「持続可能な社会の探究Ⅰ」及び「持続可能な社会の探究Ⅱ」の内容、担当者、評価方法等の検討を重ね、「持続可能な社会の探究Ⅰ」の指導と評価の年間計画を作成した。

「持続可能な社会の探究Ⅰ」及び「持続可能な社会の探究Ⅱ」は、生徒の関心に沿った課題研究を2学年にわたって行うことを想定しているため、個々の生徒の意欲・関心に沿った多様なテーマの課題探究に対応できるよう、地歴科教諭1名、理科科教諭1名、英語科教諭1名、国語科教諭1名の4名が両講座の指導及び評価にあたる。評価は課題研究への取り組み、課題研究の成果となるレポートやプレゼンテーションにより行う。また、各生徒が設定したテーマに沿って課題研究を行うにあたり、フィールドワークを義務づけることとした。第2学年次の5月に都内近郊でフィールドワークを実施する日を設定し、第3学年次の4月には沖縄にてフィールドワークを実施する日を設ける。フィールドワークを実施することで、各自のテーマに関する事前学習や訪問先へのアプローチを含めた準備、実施、振り返りといった一連の活動を通して課題研究の方法を身につけることをめざしている。また、第2学年次の早い段階でフィールドワークを実施させることにより、その後各自が自発的にフィールドワークを行うことも期待される。第2学年次の第2学期以降は、第1学期のフィールドワークの反省をいかして、沖縄におけるフィールドワークの準備を進める。沖縄におけるフィールドワーク後の課題研究の内容等については、それまでの課題研究の成果の共有や発信を通して、各自が学びを深め、技能を高めていくことができる内容、評価方法等の検討を続けており、平成27年度中には指導と評価の年間計画を完成させる予定である。

(1) - 4 グローバル総合アドバンス

①実施のねらい

2年次の「グローバル総合」や「持続可能な社会の探究Ⅰ」、その他の探究的な活動で得た調査研究の成果を具体的な行動につなげることにより、持続可能な発展に寄与するグローバル女性人材として必

要な知識・理解, 思考力・判断力, 技能, 課題設定及び解決能力を高めることをねらいとする。

②課題研究の内容 (試行)

グローバル総合「国際関係と課題解決」において, 1月・2月の全5回を用いて試行した。内容は以下の通り。

- 1月14日 ・グローバル総合アドバンスの概要説明及び外国人講師の紹介をした。
・冬季休業中課題の論文の Abstract を, 外国人講師の指導を受けながら英語で作成した。授業中の使用言語は原則英語。
- 1月21日 ・論文のテーマにあわせて2つのグループ(「グローバルイシュー」グループ, 「高齢社会」グループ)に分け, Abstract に対するより細かな指導を実施した。授業中の使用言語は原則英語。
- 1月28日 ・グループ内で英語でのプレゼンテーションを実施し, Abstract を共有した。また, そのプレゼンテーションに対する英語での質疑応答を実施した。外国人講師は生徒とは異なる観点での質問を行った。
- 2月4日 ・冬季休業中課題の論文のテーマ設定の理由・動機と, どのように探究活動を実施したのかを英語でプレゼンテーションし, それに対してディスカッションを実施した。
- 2月18日 ・冬季休業中課題の論文を作成するにあたり, これまでの4回の授業を踏まえて改善すべき点や, もっとこうしておけば良かった点をグループ内でディスカッションし, その成果を全体にプレゼンテーションした。

③実施の効果とその評価

今回の取り組みは試行ではあるが, 実際に授業を実施したことで外国人講師と次年度の年間計画をより細かく立案することができた点は成果といえる。

④研究開発上の課題および今後の研究開発の方向・成果の普及

試行期間中ではあるが, 英語でのディスカッションを実施することの難しさを感じた。プレゼンテーションは, 事前に準備をすることで日本語と大差なく生徒たちは実施できていたが, その場その場で自身の意見を作り, 発信していくディスカッションになると, 黙ってしまう生徒が多かった。本講座はあくまでも探究活動を主にしたもので英語の授業ではないが, 一定の英語力がないと授業に参加できない。そうした点をどのように克服するかが今後の課題である。

(1) - 5 イオン アジア・ユースリーダーズ

①実施のねらい

本研修は, グローバル総合「経済発展と環境」の海外フィールドワークの一環として, イオンワンパーセントクラブが主催したイオン アジア・ユースリーダーズプログラムに参加したものである。本プログラムは, アジア諸国の高校生・大学生がディスカッションを通じて, ベトナム・ハノイの大気汚染解決に向けた提言案をハノイ市に提出する試みである。海外の学生とともに, 環境問題を解決するための具体策を検討したり, 異質な意見をまとめたりする経験を通して, 公共性と倫理観, リーダーシップを備えた未来のグローバルリーダーの育成を図ることを目的とする。

②実施の内容

概要は以下の通りである。

- 日 程: 2014年8月17日(土)~23日(日)
- 行 き 先: ベトナム社会主義共和国(ハノイ)
- 引率教員: 沼畑早苗 (地歴公民科)
- 参加生徒: 2年生5名, 3年生1名

高校生部門には, 日本からは本校生徒6名を含む計11名が参加し, インドネシア12名, ベトナム10名と混成チームで大気汚染改善に向けた提案を競った。主なスケジュールは以下の通りである。

- 1 日目：ハノイ入り，オリエンテーション，政府関係者とのウェルカム・レセプション
- 2 日目：ベトナム農業活動体験・チームビルディング
- 3 日目：
- 午前：「ハノイの大気汚染の事情」についての講義
- 1) ハノイ市天然資源・環境局 TA NGOC SON氏
 - 2) ハノイ運輸会社 NGUYEN THUY氏
 - 3) Action for Environment Organization (NGO団体) BUI HA QUYEN氏
- 午後：ヒアリング・視察
- 1) ALPHA高校にて高校生に対する環境意識ヒアリング
 - 2) バイクの排気ガス状況について実験
- 4 日目：1) PM2.5濃度の測定：交差点，バスステーション，公園，ホテルの室内
- 2) ハノイのバスを乗車，バスサービスの現状を視察
- 5 日目：グループディスカッション
- 6 日目：1) プレゼンテーション
- 2) 表彰式，最優秀案を政府へ提言，フェアウェル・レセプション
- 7 日目：成田着

③実施の効果とその評価

アンケートによれば，参加者全員が「参加してよかった」と回答しており，満足度が非常に高いプログラムであったといえる。自由記述から，昨年の本プログラム参加者以外は，旅行で海外を訪れたことはあっても，課題探究を目的とした海外研修ははじめてであり，本研修を大変有意義なものであったととらえているのが感じられる。また，大気汚染に関する事前学習も十分行って臨んだが，諸外国の学生に比べると，自分たちの英語力が不十分であることを実感し，今後の改善すべき課題として受けとめている。さらに，積極的に自分の意見を相手に伝えていくことが大切であることを実感し，アジア諸国の学生の優秀さを目の当たりにできたことで，今後の学習意欲向上につながっている。グローバル人材になるためには，もっと日本を知らなければいけない，国際政治や外交への興味関心が広がったという回答もあった。

以下は参加生徒の感想である。

- ・大気汚染の解決法について議論していく中で行き詰ったのが，経済発展との兼ね合いだった。一つの対策は誰かにマイナスの影響を与えてしまうなど，色々な角度からの視点・議論が必要だと気付かされた。また，ある一国の問題を解決するには，他国の価値観を押し付けるのではなく，その国の文化，慣習，思想，普段の生活，政治事情などを理解してから解決策を提案すべきであり，また，それらを理解するためにその国について一番良く知っている現地の人と交流をすることが何よりも大切なことだと，今回のベトナム研修旅行で学ぶことができた。
- ・リーダーを務め，自信をもって決定することの大切さを学んだ。もちろん人の話を全く聞かずに一人で突っ走ることは良くないが，柔軟さと決断力，この両方がリーダーには求められるのだと思う。チームワークを意識し，一部だけで話を進めてしまわないように，さらに効率的に物事が進むように気を配った。
- ・今回交流した国々は欧米や日本から見ると「発展途上国」にあたる国々だったが，参加者の人柄や学力は予想をはるかに上回り，東南アジア諸国へのイメージが180度変わった。私を含めた日本人の課題は英語力だと感じた。他の国の人たちは英語をツールとして使いこなしていたが，日本人はまだまだ英語を使い慣れていないと思った。もっと英語力を向上させることで他国の人たちと同じ土俵に立って話せるようになれば，より活躍できると感じた。これからも一生懸命英語を勉強したい。
- ・積極的に人前で自分の意見を言えるようになった。どのように言えば相手にしっかり自分の考えが伝わるかを考え，意見交換できるようになった。また，他国の高校生や大学生を見ていて，大切なことは自分に自信を持つことではないかと思った。
- ・ベトナムを見て，まるでひと昔前日本がたどった道をたどっているような気がした。私はまだTwitter や Facebook などを利用していないが，将来使う時に，ただ自分の楽しみのためだけに使うのではなく，環境問題をはじめとするさまざまな問題を多くの人に知ってもらうために有効活用

したいと思うし、今回自分が経験したことも他の人に伝えていきたいと思った。

④研究開発上の課題および今後の研究開発の方向・成果の普及

講座受講者の約半数が参加した本研修は、イオンワンパーセントクラブ主催のものであった。次年度以降は本校が参加できるかどうかは未定である。本研修は環境問題を学ぶだけでなく、異質な意見をまとめる体験を通してリーダーシップを育成する上でも大変有意義なプログラムであり、本講座の屋台骨ともいえる海外フィールドワークであったため、今後確実に毎年実施する方法を検討していく必要がある。

(1) - 6 台湾研修

①実施のねらい

本研修は、グローバル総合を受講の生徒が、海外フィールドワークとして台湾にて研修を行ったものである。台湾協定校との連携を中心に、自ら課題を設定し、解決することを通じて生徒の国内外への感心を高め、グローバルな姿勢や視点の育成と行動に繋げることを目的とした。概要は以下の通りである。

日 程：2014年10月22日(水)～25日(土)

渡 航 先：台湾

参加生徒：2年生29名

引率教員：菊池美千世(副校長)，増田かやの(養護教諭)，葭内ありさ(家庭科教諭)

②実績の説明

②-1 実施の内容

・事前学習

台湾に関する学習

- ・夏季休業中にDVDの貸出、映画館での参考映画鑑賞、参考図書の読書
夏季休業中事前学習レポート・発表会
- ・各自がテーマを設定し、レポートを作成
- ・レポート発表会 9月5日・9日・11日 昼休み

中国語のレッスン等

- ・「校歌を台湾語で歌おう」「やさしい台湾語講座」
- ・9月末からお茶の水女子大学大学院生(台湾からの留学生)による講義
課題解決に向けての台湾協定校での事前アンケート

・研修スケジュール

1日目：国立故宫博物院・原住民博物館の見学

2日目：

午前：①台湾女企業家の方の講話

②中正記念堂見学

午後 ①台湾日本人会&台北市日本工商会を訪問し、事務局総幹事と現地で活躍されている、日本人女性起業家の方の講話

②台湾大学キャンパス見学

3日目：①台北市立第一女子高級中学訪問

②台北賓館、総統府見学

③課題別プレゼンテーションとディスカッション

課題(ジェンダー、国際協力、環境、政治、経済)

3日目夕刻～4日目午前：台北市立第一女子高級中学の生徒自宅へホームステイ

・学内報告会

12月18日(木)午前 研修報告会にて成果を報告

③実施の効果とその評価

課題解決のプログラムは生徒の心に大きく響く経験となった。事後アンケートからは、「海外の文化や歴史への関心が広がった」とする生徒が全員であり、国際的な政治や外交、経済活動への関心や日本の文化への興味関心を多くの生徒が広げた。また、語学力や積極的なコミュニケーションを重要だと考える生徒が多数となった。帰国後も意識や行動の変化をその後の結果に繋げる生徒が大半であり、効果が見られた。

④研究開発上の課題および今後の研究開発の方向・成果の普及

本年度は、年度当初に台湾研修実施が未定であり、台湾での研修先等も直前に確定するなど、実施初年度ならではの課題が多かった。生徒からは日本文化の知識不足に対する感想も挙げられた。より効果的な研修内容や事前学習の模索が今後の課題である。校内報告会を行ったことは学内生徒に良い影響を与え、成果の普及となった。

(1) - 7 生徒海外研修報告会

①実施のねらい

海外研修の成果をグループでまとめる経験を通じて、コミュニケーション能力や論理的思考力を養う。また、報告会を通じて、言語活用能力を養うとともに、自分の探究成果や意見を発信していくとの重要性に気づかせる。

②実施の内容

12月18日(木) 9:30~11:30

③実施の効果とその評価

校内報告会のための発表準備は、授業時間以外にも多大な時間を要するものであったが、意欲の高い生徒にとっては、報告会の実施が1つの目標となり、主体的に自分たちの考えをまとめていったことは実施の意義が大きいと考える。

また、どうせやるのであれば、校内だけにとどまらず全国へ発信していこうと意欲を高めていった一部の生徒たちが、環境省後援の環境活動報告全国大会に出場したことは、海外研修報告会の効果といえる。

④研究開発上の課題および今後の研究開発の方向・成果の普及

今年度の報告会では、報告を聞く生徒たちの報告内容への理解度が低く、質疑応答が活発になされたとは言えなかった。研修報告を聞く生徒たちにとっても効果的な報告会のあり方の検討も課題である。

(1) - 8 生徒成果報告会(予定)

3月17日(火)午後、グローバル総合講座を受講した生徒による、本校1年生及び2年生及び運営指導委員等に向けた成果報告会を実施する予定である。

2-2 教養教育グループ

(1) 本年度の目標と実績

本グループの最終的な目標は、構想調書の仮説Cの通り、「学校設定科目『教養基礎』を含む幅広い必修科目を履修させる教育課程で、多くの科目を学ぶことにより、グローバル女性人材の土台となる基礎学力や広い教養を身につけることができる」ということを検証することである。本年度は準備の年度であるので、仮説Cを検証する前に今後の教養教育について示唆を得るべく、

- ・仮説1「これまでの授業はSGHに効果的な要素が含まれていた」
- ・仮説2「これまでよりもSGHに効果的な通常授業開発は可能である」

という仮説1と仮説2を立て、検証することとした。

その理由は、現在の授業でも少なからずSGHのプログラムの底支えとなる基礎学力を養成しているが、その実態がどのようなものであるかを調査する必要があること。もう一つは、今後SGHのプログラムが進むにつれて、高等学校段階で大学進学に必要な学力や能力を確実に担保しつつSGHを意識した授業開発が必要となることが予想され、その可能性を調査することが仮説Cの検証に関わるからである。一方、仮説Cが正しいと検証されたとしても、その効果が不十分な場合は大胆な授業の改革や開発が求められることが予想される。その場合を想定して、今からその手立てを探り、備えておくことも必要である。

また、生徒の意識調査と卒業生調査を行った。その分析の結果から、今後の課題、生徒の傾向、授業開発・改善のポイントなど、今後のSGH活動に対しての示唆をいくつか挙げて次年度の研究の手がかりとして残しておく。

(2) 「グローバルを意識した授業」の実施（仮説1と仮説2の検証）

(2)-1 検証の手立て

仮説の検証にあたり、次のことを行った。

- | | |
|--------|--|
| 7月 | 校内研修会への準備 |
| 8月～9月 | 校内研修会で構想調書をあらためて読み直し、教養教育について教員に理解を深めてもらったうえで、SGHを意識した授業プランの報告書を提出してもらうことにした。提出された授業プランについては実際に授業を行ってもらい、その報告や評価等も記入してもらうものとした。 |
| 10月 | 秋に運営指導委員会と第2回目の校内研修を行い、さらに知見や意識を深めて、引き続き教科の授業プランの完成と授業の実践を呼びかけた。「これまでの授業の中にもSGHのプログラムの基礎学力養成に寄与する部分が必ずあるはず。授業を振り返ることでその要素を見つけ、それを意識するだけでも授業は変わる」ということを伝え、授業開発の糸口を見つけてもらうようにした。また、全面的に開発することが可能であれば、そのプランと実践を報告してもらうように呼びかけた。 |
| 10月～2月 | 各教科で、「SGHを意識した授業」を考えてもらい、実際に授業を行ってもらってその成果や課題を報告書に記入して提出してもらった。担当教員による従来授業内容との比較アンケートを実施した。 |

提出があったのは、次の教科・科目である。以下にそれぞれの報告書を(2)-2に掲載する。

国語科・教養基礎国語Ⅰ・Ⅱ	(資料①)
国語科・国語総合	(資料②)
地歴公民科・現代社会	(資料③)
地歴公民科・政治経済	(資料④)
理科・化学基礎	(資料⑤)
英語科・コミュニケーション英語Ⅰ	(資料⑥)
家庭科・家庭総合	(資料⑦)
情報科・社会と情報	(資料⑧)

今回は各教科で1つは提出してもらった。しかし、授業の進度の都合などにより、立案までは進んでいたが実践するには至らなかったり、部分的な実践まではできたが授業プランが締切日までに終了しなかったため最後のまとめができなかった教科もあった。

数学科が教養基礎「数学」ⅠでSGHを意識した授業をはじめに考え、それを例として各教科にも「SGHを意識した授業」の開発を進めるよう呼びかけた。教養基礎「数学」Ⅰという授業は本校の教養教育の特色を表す授業の1つで、「虹の数学」とも呼ばれているものである。この授業では、単に数学を学ぶのではなく、「虹がどうしてあのように見えるのか」という疑問に対して、自然科学と数学の両方にわたって学習を進め、それを軸に高校数学を体系的に学び、自然科学や虹にまつわる歴史や文化なども学習していこうとする教養教育らしい授業である。このような本校の特色となる授業は、他に、教養基礎「国語」、教養基礎「英語」がある。

数学科の教養基礎「数学」Ⅰの例を以下に示す。SGHを意識した教養基礎「数学」Ⅰは、大幅に授業変更したのもではなく、後述の分類に従えばAに属するものである。これまでの授業もSGHを意識したものと変わらない授業であったため、新たにSGHを意識しながら授業のポイントを押さえれば十分授業が開発されることがわかった。SGHプログラムに必要な生徒の資質・能力のうち、論理的思考や論理的表現、論理的コミュニケーション、問題解決能力などを養成する要素がすでに授業に組み込まれているからである。教養基礎「数学」Ⅰは残念ながら締め切りまでに授業を終えることができなかったが、例として各教科の報告書の前に掲載する。なお、太字がこれまでの授業内容をSGH向けに再認識したものである。

<教養基礎数学Ⅰの例>

グローバルを意識した授業（2014年度） 実施計画・報告

<教科・科目名> 教養基礎「数学」Ⅰ	<テーマ・単元など>	<対象学年> 1年	<担当者> 三橋・内藤
<p><実施時期> 2学期における教養基礎「数学」Ⅰの授業において</p>			
<p><ねらい・目的></p> <p>①自然現象である「虹」を数学的に考察し、指導要領の内容のより深い理解へとつなげる。 ②オリジナルの解法を考え、実行することにより問題解決能力を高める。 ③解法の説明を記入することで論理的思考力、論理的表現力を伸ばす。 ④解法を発表する、発表を聴き質疑応答を行うことによってプレゼンテーション能力と論理的コミュニケーション能力を高める。</p>			
<p><概要（内容・方法等）></p> <p>①既習事項と虹が見える原理をもとに、コンパスと定規のみで水滴内を通る虹光線の経路の作図方法を考えて作図する。（ワークシート） ②試行錯誤を通して問題解決に取り組む体験をさせ、基本原理や具体的解法例を活用して問題を解決し、問題解決能力を高めさせる。（ワークシートとそのやり直し） ③自分の解法を文章で説明し、教員の質問に答えるなどして、論理的思考力、論理的表現力を学びその力を伸ばさせる。（ワークシート、質問とその応答） ④ユニークな解法の数名を選び、全員の前で発表させる。発表の方法や練習によりプレゼンテーション能力を高め、その発表を理解し、また質疑応答を行うことを通して、論理的コミュニケーション能力を高める。（発表会、質疑応答、議論 発表会ワークシート、）</p>			
<p><評価の方法・観点></p> <p>①（方法）作図ワークシート（観点）正しく作図できたか（論理的思考）（問題解決） ②（方法）作図ワークシート（観点） 解法の説明文を読み、論理的文章であるか。また、不明な点について教員の質問に論理的に答えられたかを評価する。（論理的表現）（論理的コミュニケーション） ③（方法）発表会開催（観点） わかりやすく工夫のある発表（プレゼン）ができたか。聴く側の生徒の質問に対して的確に答えられたか。また、発表を聴く側の生徒は的確な質問ができたか。 （論理的表現）（論理的コミュニケーション） ④（方法）発表会用ワークシート（観点） 発表者のアイディアに対する理解など思考の痕跡があるか。 （論理的思考）（論理的表現）</p>			
<p><ふりかえり（方法と検証）></p> <p>・ 作図ワークシート、発表会に関する取り組みの様子、発表会用ワークシート</p>			
<p>備考 太字はSGHのために新たに追加したものや、観点をSGH用に解釈し直したものです。</p>			

(2) - 2 実施 (授業開発の「SGHを意識した授業」報告書)

資料① グローバルを意識した授業 (2014年度) 実施計画・報告

<p><教科・科目名> 教養基礎「国語」Ⅰ・Ⅱ</p>	<p><テーマ・単元など> 読書レポートの作成・発表</p>	<p><対象学年> 1・2年</p>	<p><担当者> (クラス順) 1年 荻原・植田・今成 2年 今成・磯貝・植田</p>
<p><実施時期> 2学期における教養基礎「国語」Ⅰ・Ⅱの授業において (1) 課題説明…7月 (2) 第1回レポート発表…9月 (3) 第2回レポート発表…11月 (4) レポート返却…11～12月</p>			
<p><ねらい・目的> ①レポート作成を通して、生徒個人々の興味ある分野への理解を深めさせ、論理的思考力を育成する。 ②レポート発表や質疑応答を通して、プレゼンテーション能力と論理的コミュニケーション能力を高める。</p>			
<p><概要 (内容・方法等) > ①1年4月に配布された読書リストの中から、軸となる本を選び、それに関連した本を2冊以上読んで、1年生は400字×3枚以上、2年生は400×4枚以上のレポートを作成する。(夏休みの課題、原稿用紙縦書き・手書き指定) …実施時期(1) ②9月の最初の2時間続きの授業で、クラスごとのレポート発表を行う。 (1時間目:6人前後でのグループ発表 2時間目:グループの代表者による発表。時間は共に、発表3分、質疑応答2分) …(2) ③11月の2時間続きの授業で、学年のレポート発表を行う。 (クラス代表2名×3クラス 計6名、発表5分、質疑応答2分) …(3) ④レポートは、教員が採点し、2学期の最後の授業までに返却する。返却の際、留意点などを示し、学年末のレポート作成に役立たせる。…(4)</p>			
<p><評価の方法・観点> ①④(方法) 教員による採点 (観点) テーマの選定について、調査について、引用の区別について、構成について、重点項目について、参考文献の挙げ方、プレゼンテーション用資料、文章表現 (論理的思考) ②(方法) 1時間目 グループの生徒同士で1番よかった発表者を選出する。2時間目 個人々で点数化した評価シートに記録する。(観点) ・レポートの考察がしっかりしているか ・引用が明確か ・売りが明確か。・わかりやすく魅力的な発表か。(論理的表現、論理的コミュニケーション) ③(方法) 個人々で、評価シートに記録する。発表者個人に、任意でコメントを書く。 (論理的表現、論理的コミュニケーション)</p>			
<p><ふりかえり(方法と検証)> ・教員による評価 評価用紙(100点満点でのレポート採点) 例年に比べると、調査の行き届かないものも多く、総じて出来が悪い。問題点を認識させて、学年末では向上することを期待したい。 ・生徒による発表記録の用紙(グループ代表発表、学年発表) 熱心に書いている生徒も多くおり、関心・意欲があることがうかがえる。 ・生徒による学年末の教養基礎アンケート(検証は次年度)</p>			
<p>備考 3学期にもレポート学習あり</p>			

資料② グローバルを意識した授業（2014年度） 実施計画・報告

<p><教科・科目名> 国語・国語総合（現代文）</p>	<p><テーマ・単元など> 文明の電源</p>	<p><対象学年> 1年生</p>	<p><担当者> 荻原</p>
<p><実施時期> 2学期後半</p>			
<p><ねらい・目的> ①評論を読解し、論理的な文章の構造を理解する。 ②日本の文明摂取について筆者の考えを理解する。 ③本人が英語が苦手な理由について筆者の考えを理解する。 ④筆者の見解に対して自分の考えを持ち、表現する。</p>			
<p><概要（内容・方法等）> ①教材（司馬遼太郎の評論）を読む。 ②奈良時代および明治時代を中心に日本の文明がどのように作られてきたかに関する筆者の主張を読解する。 ③本人が英語が苦手になった理由について筆者の考えを読解し、自分の経験と照らす。 ④（全員ではない）文明論の比較検討や語学習得等について、今後の探究活動につなげる。</p>			
<p><評価の方法・観点> ①（方法）グループディスカッション （観点）筆者の見解に対して自分の意見を積極的に述べられたか。（論理的思考・論理的コミュニケーション） ②（方法）作文 （観点）筆者の見解に対して自分の意見を論理的に述べられたか。（論理的思考・論理的表現） ③（方法）定期試験 （観点）文章を論理的に読解できたか。（論理的思考） ④（全員ではない）（方法）レポートで本テーマを選び、調査・考察。 （観点）適切な調査方法と考察でレポートが作成できたか。（探究力・論理的思考・論理的表現）</p>			
<p><ふりかえり（方法と検証）> ①時間の関係でペア・トークにとどめたが、話し合いは活発に行われた。 ②③定期試験において自分の考えを論理的に表現させた。8割以上の生徒が日本の文明の特質についてわかりやすく表現し、半数以上の生徒が結論先行型を用いた。 ④レポート課題はまだ提出期限に間がある。</p>			
<p>備考：本単元は、国語科1年生のテーマ「歴史のうねりと社会」との関連で、毎年行うものである。</p>			

資料③ グローバルを意識した授業（2014年度） 実施計画・報告

＜教科・科目名＞ 現代社会	＜テーマ・単元など＞ 国際経済の動向と国際協力	＜対象学年＞ 3年生	＜担当者＞ 玉谷
＜実施時期＞ 2学期における必修現代社会の授業（3単位時間）において			
＜ねらい・目的＞ ①現在の国際経済のしくみやその成立過程への理解を深め、現代社会の諸課題との関わりを考察する。 ②現代社会の諸課題に関する討議・発表を通して、論理的コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力を高める。 ③諸課題の解決策への考察を通して国際経済のしくみや国際協力のあり方への理解を深め、それを表現することにより、論理的思考力、論理的表現力を伸ばす。			
＜概要（内容・方法等）＞ ①貿易、貿易をめぐる議論、IMF-GATT体制の成立と展開について、国際情勢や経済状況の推移との関連の中で理解できるよう留意して、説明する。（ワークシート） ②川北稔『砂糖の世界史』岩波ジュニア新書（1996年）の一部を読ませ、近代世界システム論について説明する。（資料プリント） ③4人グループで、iPadを活用しながら現代社会の諸課題について討議し、その内容を発表する。（討議、発表、質疑応答、ワークシート） ④4人グループで、iPadを活用しながら現代社会の諸課題の解決法について討議する。（討議、ワークシート） ⑤丸紅の企業PRフィルム「世界を変える情熱」、NHK クローズアップ現代「人権リスク」を紹介し、諸課題の解決と企業活動との関係に関して、一学期の学習事項をふまえて考察させる。（ビデオの視聴、ワークシート） ⑥課題を1つ設定し、その解決法に関するレポートを作成する。（レポート）			
＜評価の方法・観点＞ ①（方法）ワークシート （観点）意欲的に討議・発表・質疑応答に参加し、理解を深めたか。 （関心・意欲、プレゼンテーション能力、論理的コミュニケーション能力） ②（方法）レポート （観点）適切な課題を設定し、討議・発表・質疑応答・講義をふまえた解決策を示せたか。 （知識・理解、論理的思考力、論理的表現力） ③（方法）テスト （観点）授業や課題研究によって得た知識が定着しているか。 （知識・理解、論理的思考力、論理的表現力）			
＜ふりかえり（方法と検証）＞ （方法）授業への取り組みの様子、ワークシート、レポート、期末考査 （検証） ・生徒は授業に意欲的に取り組み、特にグループワークでは現代社会の諸課題に関してお互いの考えを共有し、深め合っていた。レポートにもグループワークで得た考えやデータが反映されていた。 ・グループワークをふまえたレポートが多くなった分、レポートのテーマや考察内容に多様性がなくなった面もあった。			
備考			

資料④ グローバルを意識した授業（2014年度） 実施計画・報告

<p><教科・科目名> 公民科・政治経済</p>	<p><テーマ・単元など> 国際経済と貧困問題</p>	<p><対象学年> 第1学年</p>	<p><担当者> 北原 武</p>
<p><実施時期> 10月上旬</p>			
<p><ねらい・目的> 国際経済（主に貿易）の理論を学んだ後に現在世界が抱える貧困問題の実情を知ること、どのように貧困問題を解決していくべきかを、経済学的なアプローチで探究できるようにすることを目的とする。</p>			
<p><概要（内容・方法等）> ①国際経済における貿易の理論とそれぞれの特徴（長所と短所）を、講義を通して学ぶ。 ②現在世界が貧困問題を抱えていることを、統計資料の読み解きを通して学ぶ。 ③貧困問題とは具体的にどのような問題なのかをグループで調査・探究し、その成果をプレゼンテーションを通してクラスで共有する。その際、各グループにそれぞれ1つの調査国を割り当てる。 ④貧困問題を解決するための具体的方策を考え、レポートにまとめる。</p>			
<p><評価の方法・観点> ①調査・探究の成果物としてのプレゼンテーション資料を評価する。その際、調査・探究資料（参考文献等）が十分に活用されているかを評価の観点とする。 ②調査・探究に関するプレゼンテーションを評価する。その際、人に伝えようという意欲をもったプレゼンテーションができているかを評価の観点とする。 ③貧困問題を解決するための具体的方策レポートを評価する。その際、具体的・合理的な解決策となっているかを評価の観点とする。</p>			
<p><ふりかえり（方法と検証）> 評価の方法・観点①に関しては、調査シートを用意したり、ウェブサイトを紹介したりしたこともあり、多くのグループが達成できていた。一方②に関しては、プレゼンテーションスキルが身につけている生徒と身につけていない生徒の差がかなりあった。プレゼンテーションスキルに特化した授業は行っていないため、今回のような取り組みを通年で複数回実施するなどして、最終的には生徒全員が一定のスキルを身につけられるようにすべきだろうと思っている。③に関しては、自国の状況をふまえて他国に特定分野の投資を求めるなど、合理的な解決策を立案するグループがあった。ただし、全体としては、長期的にどのように貧困問題を解決するかというビジョンを持つグループは少なく、課題が残った。</p>			
<p>備考</p>			

資料⑤ グローバルを意識した授業（2014年度） 実施報告

<p><教科・科目名> 理科・化学基礎</p>	<p><テーマ・単元など> 酸と塩基「中和反応の量的関係」</p>	<p><対象学年> 1年</p>	<p><担当者> 溝口 恵</p>
<p><実施時期> 2学期10月（2時間）</p>			
<p><ねらい・目的> 2人1組で中和反応の実験をおこない、得られた実験データを解析し、酸と塩基の濃度、体積、強弱、価数の関係について考察、その考えを記述・発表する。実験を通して協働作業能力、課題解決能力、論理的思考力、論理的表現力を高める。</p>			
<p><概要（内容・方法等）> ①予め実験プリントを読んで、実験の目的・方法を理解する。（実験プリント） ②ペアで相談しながら酸を適宜選択し、使用する濃度や体積を変えながら、同一濃度の塩基水溶液を用いて中和を行い、その体積を測定する。（実験プリント・データシート） ③得られた実験データをもとに、酸の種類（強弱・価数の違い）による中和の量的関係について考察する。（実験プリント・考察） ④クラスの実験グループごとに実験データを発表する。 ⑤集まったデータから更に考察をすすめ、中和の量的関係性について考えを記述、代表者数人が発表、質疑応答を行う。（データシート、質疑応答）</p>			
<p><評価の方法・観点> ①（方法）机間観察（観点）正しく実験準備をしているか 《観察・技能》 ②（方法）机間観察・実験プリント・データシート（観点）実験課題の目的を理解し、操作手順に誤りがなく、ペアで協働しながら実験を行っているか 《協働作業、課題解決能力》 ③（方法）実験プリント（観点）ペアの実験データから、中和の量的関係について考察できているか 《論理的思考力・論理的表現力》 ④（方法）データ報告会（観点）他者に対してわかりやすく発表できたか 《論理的表現力》 ⑤（方法）データシート・発表（観点）新たに集まったデータを解析し、再度考察をすすめ、考えをまとめ、記述できたか。発表者は、わかりやすく考えを表現できたか。《論理的思考力・論理的表現力》</p>			
<p><ふりかえり（方法と検証）> ・実験プリント（考察・感想）とデータシートを回収し、その記載内容の状況から学年の約8割近くの生徒が、中和の量的関係について理解をすることができた。 ・代表者によるデータ報告と考察発表の機会を設けた。（ただし、授業時数の関係上1部のクラスのみ実施）発表内容はおおた良好であったが、報告の仕方（化学用語を用いた論理的、明快な説明）に課題が残る生徒がたぶんに見られた。これは、提出レポートの考察記載の状況とも類似しており、論理的表現力の育成に課題を残した。</p>			
<p>備考</p>			

資料⑥ グローバルを意識した授業（2014年度）実施報告

<p><教科・科目名> 英語・コミュニケーション英語 I</p>	<p><テーマ・単元など> Lesson 6・地球環境</p>	<p><対象学年> 1年</p>	<p><担当者> 津久井貴之</p>
<p><実施時期> 10月中旬～11月初旬</p>			
<p><ねらい・目的> 世界的な動物学者へのインタビューを扱った教科書単元を基に、チンパンジーの生態や環境保護に関わる内容について英語でその場でインタビューに応じたり、英語で質問をしたりする表現の能力を高める。</p>			
<p><概要（内容・方法等）> ①動物学者のインタビューや講演の映像を視聴し、その概要を把握させる。また、必要な情報についてメモを取ったり、graphic organizer（議論の流れや要点を図で表したもの）にまとめたりするスキルを身に付けさせる。 ②教科書本文の読解や音読を通して、インタビューの方法や形式に慣れさせる。 ③プロジェクト型学習として、動物を1種選び、その生態や知的な側面について、簡潔に英語で紹介できるようにする。 ④その場で、Interviewer 役の生徒と、答える側の Interviewee（ある動物について調べてある）役の生徒がインタビューを英語で行う。</p> <p>【教科書題材について】 Jane Goodall という女性の動物学者は、50年近くをアフリカの密林の中で過ごし、徹底したフィールドワークの中から、人間以外が道具を作り、使うことを初めて発見した女性動物学者である。現在は、森林破壊やチンパンジーの個体数の減少を目の当たりにし、世界各国の若者を対象とした健康保護活動に軸足を移している。1人1人ができることを確実にすることが世界を変えるという信念の基に講演・啓発活動に世界中を飛び回っており、「グローバルを意識した授業」として取り上げるのにふさわしい題材である。</p>			
<p><評価の方法・観点> 【観点1：英語によるスピーキングの能力】 パフォーマンステストとして、1人2分程度でネイティブと英語のディスカッションを行った。 【観点2：英語によるインタビューへの積極性、表現の能力】 授業中の観察により評価を行った。 【観点3：英語でメモを取ったり概要をまとめたりする能力】 生徒のノートを回収し、評価を行った。</p>			
<p><ふりかえり（方法と検証）> ・調べたことや視聴したビデオなどを基に、その場で質問したり応答したりする活動や場面に慣れ、慌てずに英語でやりとりを続けようとする姿勢が身に付いてきたことが、パフォーマンステストの映像からうかがえる。 ・生徒が発話する英語は、英文構造的・語彙的にまだ不十分であり、伝えたい内容を十分に表しているとは言えない。引き続き、ディスカッションやプレゼンテーション活動に取り組みせる必要がある。 ・生徒全員の発話した英語ややりとりの様子が映像に残されており、生徒に視聴させ自己評価と今後の課題を把握させるなどして、今後の学習の目標を明確にさせるとともに意欲を高めさせたい。</p>			
<p>備考 ・生徒のパフォーマンステストの映像、当該授業の指導案、授業映像は全て記録として残してある。</p>			

資料⑦ グローバルを意識した授業（2014年度） 実施計画・報告

<p><教科・科目名> 家庭科・家庭総合</p>	<p><テーマ・単元など> 消費の背景へのまなざし - エシカル・ファッションを題材に - 単元：消費生活・被服・環境・食物</p>	<p><対象学年> 2年生</p>	<p><担当者> 葭内・清水</p>
<p><実施時期> 4月～12月（授業は11月初旬まで，外部講師による特別授業は12月）</p>			
<p><ねらい・目的> ①消費の「背景」を捉える力を育む ②衣生活に必要な知識と技術を身につける。 家庭科学習指導要領では、「消費者の権利と責任」を理解し自立した消費者を育てることをねらいとしており，自らの消費行動が社会に与える影響について考えて行動し，持続可能な社会の一員としての消費者のあり方を理解した生徒を育成することを目指している。「エシカル・ファッション」は，消費と環境教育・国際理解教育・キャリア教育・伝統文化への理解と深く関わるテーマである。そこで，「エシカル・ファッション」を通して，生徒にグローバルな消費者市民的視点を育成することをねらいとする。どのように商品が自分たちの手元に届き，消費されるのか，自らの消費行動の社会への影響はどのようなものか，を理解させ，このことにより目の前の商品の背景に広がる事柄への想像力を養い適切な消費行動をとる能力を身につけ，責任をもつ自立した消費者としての資質を育成したい。同時に，衣生活に必要な知識と技術を身につけ，自らの衣生活を主体的に捉える力を養いたい。</p>			
<p><概要（内容・方法等）> 4月 中国縫製工場ドキュメンタリー映画視聴で生産の背景を考察 天然素材（麻・綿）の1枚の布から服を作成 四国藍染め職人ビデオレターによる事前学習 5月 天然製法の藍染液作成 6月 情報科と連携しICT（iPad Facetime）を用いた遠隔授業による藍染目実習を通して日本の伝統工芸の理解・服のトレーサビリティへの理解を体感させる 8月 夏休み課題 エシカルワード調べ・藍染め布をシャツにアレンジ・コーディネート 9月 ファッションショー・ファッションカタログ作成 文化祭では家庭科製作の服を用いたエシカルファッションショーを開催 開発途上国や東北支援の外部エシカルブランド，フェアトレードの服を活用 （主催はアフガンボランティア部） 10月 エシカル・ファッションワークを通じ消費が環境や社会にどのように繋がり，影響を与えるかを考える チョコレートや紅茶（葭内視察済のスリランカフェアトレード農園のもの）試食などを通じグローバルな視点を養う 学びのアウトプット：リーフレット作成 全国の高校生向けにエシカル・ファッションを解説するリーフレットを作成し全国に配布 （外部講師と連携） 12月 外部講師グローバルエシカル・ファッション会社の講演 講師：パタゴニア日本支社長辻井隆行氏（エシカル消費・環境・キャリア形成・国際協力関連） 意識調査</p>			

<評価の方法・観点>

関心・意欲・態度・・・自らの衣生活や消費行動に関心をもち、実習や課題に意欲的に取り組めたか。

(方法) 感想や調べ学習、衣服製作品など各課題へよく取り組めたかを評価

思考・判断・・・・・・衣生活の背景に広がる諸問題について考え、解決方法を考える事ができたか。

衣服表示の適切な読み取りができるか。

(方法) 映画感想と発表・表示作成・リーフレットの完成度を評価

(倫理的思考) (問題解決) (倫理的コミュニケーション)

技能・表現・・・・・・衣服製作を通して布の扱いや伝統染色の技術や手法を身につけ、個性ある創意工夫がきたか。

(方法) 天然素材の藍染めの服作品製作・コーディネート課題の完成度を評価

修得した知識を整理して効果的に他者へ伝えることができる。

(倫理的コミュニケーション)

(方法) リーフレットをわかりやすく工夫でして作成できたか。

知識・理解・・・・・・消費、環境、衣生活で扱う課題を理解できているか。

(方法) エシカルワード調べ・解説ワークシート・作成したリーフレットの内容が適切であるかを評価 (倫理的思考)

<ふりかえり(方法と検証)>

方法：感想、各課題、意識調査による検証

検証：前年度末の事前学習に始まり、夏の調べ学習など、新たな試みを行ったところ、例年に比して総じて生徒の意欲と意識がさらに高かった。衣服製作品もレベルの高い作品が多く見られ、伝統技術の理解と共に、技能を身につけることができた。学習後の知識を他者へ伝えるためのリーフレット作成にも意欲的に取り組み、内容からは、生徒が知識を正しく理解し、なぜ学ぶのかを体得していることがわかった。まとめの講演会の感想と意識調査からは、本授業の目的が効果的に果たされたことがわかった。

備考 4月～6月(藍染め関連)は科学研究費採択、

7月～12月の実施は平成26年度消費者教育推進のための調査研究事業採択

資料⑧ グローバルを意識した授業（2014年度） 実施計画・報告

<教科・科目名> 情報	<テーマ・単元など>	<対象学年> 1年	<担当者> 松野
<p><実施時期> 「創作課題」の前,あるいは「問題解決」や「アカデミック・スキルズ」を扱う授業の一部として</p>			
<p><ねらい・目的> ①アイデアを発想・思考・整理するのに有効とされる方法が存在することを知り,概要を理解する ②思考にはクセがあり個人差があることを知り,協同作業時に他者の思考を理解する能力を育む ③ロールプレイすることによって理解を深め,グループワーク時に他者の思考を想像する態度を育む</p>			
<p><概要(内容・方法等)> Six Thinking Hats法(Edward de Bono 提唱)を Brainstorming法(Alex F Osborn 提唱)の前段階と位置づけて実施する。 これまでにマインドマップ(Tony Buzan 提唱の手法)やKJ法(川喜田次郎提唱の手法)など, 個人で実施できる発想・思考法を知っているとよい。 ①今日やる活動の内容と意義の説明。 ②予め生徒を6つに分類しておき,それに基づき小グループを組む。 ③分類の内容とは関係なく,ふだんの自分自身の考え方の傾向を述べ共有する。 ④テーマに沿ってSix Thinking Hats法を行う。この活動の目的はこの方法を身に着けることではなく,活動を通して考え方の傾向を理解することにある。(大きめの紙かホワイトボード) ⑤テーマに対して得られた内容と感想をいくつか発言し,それぞれまとめる。(プリント)</p>			
<p><評価の方法・観点> ①取り組む方法の内容と意義を理解し,活動の内容に反映できるか。 ②試行錯誤することによってテーマに対するありきたりでない答えを考えられるか。 ③自身の発言内容や他者への共感の仕方など,活動に対して積極的な参加の姿勢が見られるか。</p>			
<p><ふりかえり(方法と検証)> 授業時間の都合で実施時間が短かったこと,また考え方を切り替えるという要求に慣れていなかったことなどから,切り替えが難しいと感じる生徒が多かったようだ。一方,分析的な思考や批判的な思考を意識して取り組んだことから,ふだんの自分自身がしないような考え方や自分とは異なる考え方をする他人の存在に目が向いたようだ。また,今回は簡単な質問紙への回答をもとに予め振り分けた6~7人の班で実施した。班は色々なタイプが混ざるように構成したが,話の広がり方は班によって大きく異なり,ペースを掴み損なうと沈黙している間に時間切れとなるケースがみられた。必要に応じて教員が呼び水になるとよいかもしれない。</p>			
<p>備考</p>			

(2) - 3 提出された報告書について追加のアンケートを実施

これら提出のあった教科・科目の担当者に対し、後日次のようなアンケートを行った。

<問> 今回報告された授業は、どの程度、従来の授業に手を加えたものかを教えてください。次の中から最も妥当なものの記号で教えてください。

- A. ほぼ従来通りで、SGH に役立ちそうな内容を意識して授業にした。新たな内容を入れたのは10%未満である。
- B. ほぼ従来通りであるが、SGH に役立ちそうな内容を新たに10%~50%未満で加えた。
- C. SGH に役立つ内容を意識し、50%~80%未満は新たな内容にし、手を加えた。
- D. SGH に役立つ内容をかなり意識して、80%以上は新しい内容にした。

授業の新規開発の度合いを数値化するのは、厳密にはその尺度設定が難しく困難である。しかし、教員は日頃の授業との対比において、新しく導入する内容や手法の新規分を感覚的にとらえているものである。新しいものを取り入れようとするほど、構想の時間や授業準備など教員の負担が大きくなる。その苦労を従来の授業との比較において答えてもらうことは可能であり、妥当である。

感覚的な回答の集計になるが、大まかでもその様子をつかんでおくことは、今回の分析に大いに役立つものであった。コメント文が付記されてきた教科があったのでそれも載せておく。

教科・科目	解答	コメント
国語科・教養基礎国語Ⅰ・Ⅱ	A	
国語科・国語総合	A	Bかもしれないが、どちらかといえばA。
地歴公民科・現代社会	C	例年、実施してきたテーマと時間数でしたが、3回中2回は授業内容を変えて、グループワーク中心にしました。なので、7割程度かと。
地歴公民科・政治経済	D	SGH 3年間を見通して新たに立案した授業である。
理科・化学基礎	A	
英語科・コミュニケーション英語Ⅰ	A	
家庭科・家庭総合	A	すでに従来の内容がSGHに適合している。
情報科・社会と情報	A	強いてあげるなら

(2) - 4 実施の評価

ア. 8科目の内6つの科目については、Aと答えている。すなわち、ほぼ従来通りの授業でSGHを意識した授業になるということある。数値化すると75%に上る。したがって、従来の本校の通常授業のおよそ75%の科目がSGHプログラムに必要な基礎学力養成に効果のある授業であったと考えることが出来る。これは構成調書にある仮説Cの一部を検証したことになる。

イ. アの結果から、SGHプログラムへのより効果的な通常授業を開発するに当たり、およそ75%の科目が今までの授業内容の該当部分を強調または、若干の手を加えるだけでSGHプログラムへのより効果的な授業が開発できるということがわかった。もちろんSGHをかなり意識して授業を大幅に変更し、SGHにより対応した授業開発に取り組むことも地歴公民科の授業の例を見るとおり可能である。ただ、SGHプログラムから比較的遠い関係にある教科については、SGHに関する内容を中心に授業をつくりかえることは困難を伴うとともに、本来の教科の目標を逸脱する恐れがあるので、教科の特性やカリキュラムを考慮しつつSGHに対応することが肝要である。いずれにせよ、上の結果から、本校の授業ではSGHプログラムに効果がある授業がすでに行われていたといえる。以上から、仮説1「これまでの授業はSGHに効果的な要素が含まれ

ていた」、仮説2「これまでよりも SGH に効果的な通常授業開発は可能である」は、検証されたといえる。

(3) 生徒の意識調査からわかる今後の SGH 活動に対する示唆

(3)-1 実施

6月～8月	第1回 SGH 意識調査を企画 質問項目の検討 質問用紙の作成 アンケートの実施 集計方法の検討 結果をフィードバック
10月～2月	第2回 SGH 意識調査を企画 質問項目の追加と削除 質問用紙の作成 アンケートの実施 集計方法の検討 2回分のアンケートの分析 結果をフィードバック

(3)-2 分析の結果と示唆

アンケートを行って集計結果を表、グラフにまとめ、可能なものは質問間の相関係数をとるなど、統計的分析をおこなった。その分析の結果を踏まえて、今後の課題、生徒の傾向、授業開発・改善のポイントなど、今後の SGH 活動に対する示唆となるものを次にいくつかあげる。なお、これらの分析は主に第2回の意識調査を中心に行った。その理由は、もっとも現状の様子を表していること、また2回分のデータだけではあまり有意義なことが言えないことが理由である。しかし、比較が必要であれば用いることにした。

(3)-2.1 生徒が考える「今後身に付けたい、伸ばしたい能力や資質」

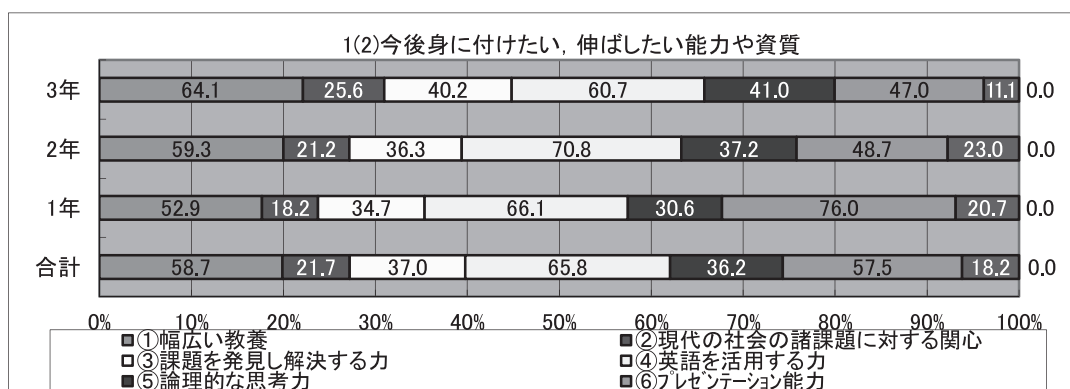
第2回生徒の意識調査より質問1(2)「今後身に付けたい、伸ばしたい能力や資質」の結果を下に載せる。上位から5つほどあげてみると、英語を活用する力(65.8%)、幅広い教養(58.7%)プレゼンテーション能力(57.5%)課題を発見し解決する力(37.0%)、論理的な思考力(36.2%)となっている。

①～⑦の解答の選択肢は、SGH プログラムを行うに当たって、教員が生徒に必要と考えた能力や資質である。したがって、これらの能力や資質は SGH プログラムへのより効果的な授業を開発したり改善していく際に意識して取り入れていくべき内容である。それに加えて、先ほど述べたように、生徒が考えている、あるいは欲している能力や資質の順位がでている。生徒の解答で割合の多い順から授業に取り入れていくことも生徒の授業への意欲・関心の高まりを生かすという意味で重要である。

今回の調査では、「英語の活用」、「幅広い教養」、「プレゼンテーション能力」に生徒の解答が集中しているため、それらを授業に優先的に取り入れることで、意欲・関心を生かしながらさらに効果的な取り組みが行えるものと考えられる。

調査名 [SGH意識調査(お茶の水女子大学附属高等学校) (2015. 1)]

		1(2) 今後身に付けたい、伸ばしたい能力や資質									
		全体	①幅広い教養	②現代の社会の諸課題に対する関心	③課題を発見し解決する力	④英語を活用する力	⑤論理的な思考力	⑥プレゼンテーション能力	⑦ICTを活用する能力	⑧その他	不明
学年	1年	121 100.0	64 52.9	22 18.2	42 34.7	80 66.1	37 30.6	92 76.0	25 20.7	0 0.0	0
	2年	113 100.0	67 59.3	24 21.2	41 36.3	80 70.8	42 37.2	55 48.7	26 23.0	0 0.0	0
	3年	118 100.0	75 64.1	30 25.6	47 40.2	71 60.7	48 41.0	55 47.0	13 11.1	0 0.0	1
	合計	352 100.0	206 58.7	76 21.7	130 37.0	231 65.8	127 36.2	202 57.5	64 18.2	0 0.0	1



(3) -2. 2 生徒が考える「高めたい能力」と「役立つこと」の相関関係

質問項目6(2)「プレゼンテーション能力を高めたい」と質問6(3)「プレゼンテーション能力を身に付けることは将来の役に立つ」との相関係数は0.76であり、7(2)「ICTを活用する能力を高めたい」と7(3)「ICTを活用する能力を身に付けることは将来の役に立つ」の相関係数は0.78と高めの数値を示している。

このことから、「ある能力を高めたい」ということと「ある能力が将来役に立つ」ということの相関が強いということがわかる。したがって、生徒の学習への意欲は、それが将来役立つかどうかということと関わっているという仮説が生まれる。相関関係であるためより詳しい調査が必要ではあるが、このデータから考えて、将来役立つことを授業の導入で何らかの形で示せれば、生徒の意欲は高められるものと考えられる。しかし、一方で役立つかどうかは今すぐにはわからず、「役立つからやる」という態度は、本来の教養ではないという考え方があることにも注意が必要だろう。

いずれにせよ、「役立つ」と「高めたい」は相関が高く、今後生徒を良い方向へ導く手段として活用の可能性がありそうだとはいえる。

(3) -2. 3 グローバル意識と体験との関係

第2回意識調査、質問3(2)「必要に応じて他者と協力して活動を進められる」と質問4-I-(2)-2「標準的な英語であれば、ネイティブ同士の会話の要点を理解できる」との相関係数は、現段階では0.17と非常に低かった。相関関係であることと、質問のしかたなどにもよるのだろうが、この相関関係の低さから考えて、「他者と協力して活動」と生徒が考えた場合、他者にあたる部分は

日本人をイメージしていた生徒が多かったのではないかと考えられる。いずれにせよ、「他者と協力して活動」と「英会話の要点がわかる」はほとんど無関係であると考えている生徒がほとんどであると予想される。

グローバルな意識を持つには、まず身近な先入観から変えていく必要があるため、「海外研修など、外国語を多く使用する環境での体験を増やすことによって、日本人以外の『他者』もイメージできるようになる」という仮説が考えられる。SGH プログラムはこの仮説の立証をまず目標にしなければならないということが、この分析から考えられる。今後、外国人講師とのコミュニケーションや海外研修などの体験を中心とした SGH プログラムが進むにつれて、日本語や日本人を前提とした意識が崩れ、グローバルな意識への第一歩を踏み出せるのではないだろうか。

(3) - 2. 4 SGH への生徒の期待と SGH の目標との関係

質問 1 (1)「SGH の取組は、面白そう」と質問 1 (3)「海外に留学したり、仕事で国際的に活躍したい」との相関係数は 0.47、また 同じく質問 1 (1) と質問 2 (3)「現代社会の諸課題について、もっと学習したい」との相関係数は 0.43、質問 1 (1) と 質問 3 (3)「課題を発見し、解決方法を考え探究する活動は将来の役に立つ」との相関係数は 0.40、質問 1 (1) と質問 4-I (1)「英語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝えたい」との相関係数は 0.41 となり、SGH の関心の高さと海外留学、国際的に活躍、現代社会の課題、問題解決、解決法の探求、英語でのコミュニケーションなど相関係数は高いとはいえないものの、他の質問項目の相関係数と比較すると無視はできない高さになっている。

このことから、初年度の SGH のイメージは生徒に正しく伝わっており、初年度の生徒の SGH への期待と教師が考える SGH への意識付けはうまくいったといえる。今後、SGH プログラムが順次実践され、それに参加することでこれらの相関関係が強くなっていくことを期待したい。

(3) - 2. 5 「海外留学したい、国際的に活躍したりしたい」に影響を与える要因

質問 1 (3)「海外に留学したり、仕事で国際的に活躍したい」という回答にもっとも影響をあたえているのは、今回の意識調査の質問項目のうちどの項目かを多変量解析の一つである重回帰分析を行って調べてみた。

有意 F の値が 0.05 よりもかなり小さいので回帰式のあてはめについては充分で、問題はない。重決定 R^2 が 0.67 であることから、「海外に留学したり、仕事で国際的に活躍したい」に関しては 67% 説明できているといえる。回帰式のあてはめが良い割には、決定係数が伸びていない。それは、今回の調査にはなかった項目が、より大きな影響を持っている可能性がある。予想としては、英語の学力、留学の費用の準備など経済的な問題が考えられる。この問題についても今後の調査が必要であると思われる。

今回重要なのは t 値である。この絶対値が 1.4 以上であれば、その要素の効果は無視できないと考えられ、絶対値が大きければ大きいほど重要な要素であることを示す。したがって、「海外に留学したり、仕事で国際的に活躍したい」という質問に影響を与えているものをその影響の大きい順にあげてみると、

1. 「可能であれば、大学生の時に留学したい」	t 値の絶対値	9.10
2. 「国際化に重点を置く大学へ進学したい」	t 値の絶対値	5.93
3. 「SGH の取組は、面白そう」	t 値の絶対値	3.38
4. 「英語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝えたい」	t 値の絶対値	3.29
5. 「可能であれば、海外の大学に進学したい」	t 値の絶対値	3.23
6. 「SGH の取組は、大学の専攻分野の選択に影響を与える」	t 値の絶対値	2.02
7. 「現代社会の諸課題について、もっと学習したい」	t 値の絶対値	1.86

多くが進学と関係があり、特に大学で海外留学を希望していたり、国際化の進んだ大学へ進みたいという希望が大きく関係している。また、英語を使って自分の考えや探究の成果を人に伝えたいという要素や、社会の諸課題についてもっと学習したいという要素も影響を与えている。加えて、SGHに対する関心や期待の影響も大きい。これらのことから、SGHプログラムの成功によって留学や海外での活躍を希望する生徒が増えてくると予測される。

大学進学と関係があるのは、本校が進学校である以上、当然の結果かもしれない。しかし、前述のとおり、「役に立つ」から「その能力を伸ばしたい」という傾向があるのと同様で、大学進学に関係するからSGHに興味がある、あるいは、大学進学に有利になりそうだからSGHの取り組みに関心があるという考えも払拭しきれない。海外での活躍を社会が期待するので、その方向に行くのが良いものだと頭から思い込んでいる可能性もある。このあたりは詳しく調査しなければわからないが、こうした可能性も踏まえつつ、生徒が持つ留学や国際的に活躍したいという意欲を、英語を用いながら現代社会の問題について学習を深めることを中心としたSGHの取り組みによって伸ばしていくことが、今後の研究においての課題となっていくことは間違いないだろう。

(4) 卒業生調査による教養教育の効果

(4) - 1 卒業生調査

本校卒業後10年未満の卒業生に、本校での教養教育の効果についてインタビューを実施した。

(4) - 2 卒業生調査による教養教育の効果

- ・本校での教養教育が高校卒業後の学びに関して役に立っているという意見が得られた。
 - 「大学では高校までの科目というものが取り払われたような学びが多いが、お茶高での学びはどの方向にも引き出しを作ってくれている。(大学生)」「教養教育がその仕事に関する色々な知識を入れる下地になっている。更に知的好奇心が触発されて、もっと新しい知識を得たい、それを仕事に生かしたい、という気持ちにさせられた。(社会人)」「ただ一列に座って暗記するのではなく、考えて他の学生と話し合い、発表(発信)するという経験は、グループでの話し合いやプレゼンテーション、授業内での質問や発言に活かされている。(大学生)」「外国人と関わる機会が多く、文化や社会の話も話題に上る。様々な教科を勉強したため、興味の幅は広い方だと思うが、もっと勉強しておけば良かったと思っている(大学院生)」
- ・高校時代に留学や国際社会での活躍に興味を持っていた背景として、本校で受けた教育によってグローバルな視点から社会課題に目を向けるようになり、その結果として、留学という一つの目標を持つようになったことが分かった。
 - 「異なる文化や背景で育った学生たちと議論をしてみたかった、さまざまな視点から社会の問題について考えてみたかった(大学生)」「(授業で歴史的事実の背景について突き詰めて学び、)異文化への理解の大切さを実感し、偏見にとらわれず自分の肌で感じて自分の頭で判断しよう、と考えるようになった。それがもとで、自分の目で確かめて、その国の人と直に接したい、何を考えているのか知りたいと思ったこと(社会人)」「海外でのインターンシップ、各国の学生が集まるボランティアツアー、ほかにも、海外に出て人と交わったり学んだりする場がたくさんある中で、留学も含めて計画中。(大学生)」「海外で活躍する先輩を目にし憧れたこともあり、高校時代から留学を希望していた。実際、修士1年でフランスへ2ヶ月半研究留学をし、現在も外国人研究者と英語で議論しながら研究活動をおこなっている。国際的に認められる研究者を目指している。(大学院生)」

以上から、本校の教養教育は卒業後にグローバルな視野を持つことや国際的に活動することなども含めて卒業生には良い効果をもたらしているようである。卒業生の話だと現在の授業との結びつきも薄れ、数値化しにくいことから、(2)の仮説1の検証とは別にしてここで述べたが、結果として(2)の仮説1の検証結果が正しいことを支持する事実となるであろう。

2-3 特別活動・環境整備グループ

下記の事業を行った。事業の詳細は次ページからの資料参照。

①グローバル講座

- ・「ネパールのユースによる女の子の権利と早すぎる結婚についての講演会及び交流会」
(公益財団法人プランジャパン)
- ・「国際シンポジウム：サステナビリティとジェンダー」
(お茶の水女子大学ジェンダー研究センター)
- ・「発展途上国の人口問題と国際協力」(公益財団法人ジョイセフ)

②サマープログラムへの参加

③e-learning システムの活用

④伝統文化鑑賞会

⑤留学生の受け入れ

SGH事業(特別活動・環境整備)報告書

担当者: 佐藤 健太

事業名	サマープログラム
実施日時	2014年 8月 4日(月) ~ 8日(金) 9:00 ~ 12:30
場所	お茶の水女子大学
対象者 (参加者数)	希望者 (10人)
連絡先 (企業名・担当者等)	お茶の水女子大学グローバル人材育成推進センター 特任講師他
実施概要	<p>サマープログラムとは、夏休み期間中(7/25~8/10)にお茶の水女子大学が主催している国際交流事業の一環で行われているプログラムで、お茶の水女子大学に通う留学生及び海外の学生、お茶大生を対象に相互の交流を図るイベントである。サマープログラムは英語版と日本語版の2種類あり、今年度は8/1~10に「英語によるサマープログラム(以下、英語サマプロ)」と7/22~25に「日本語によるサマープログラム(以下、日本語サマプロ)」が開催された。</p> <p>英語サマプロは文字通り、英語をベースとした交流で過去には自由参加セミナー『日本の米食文化』には附属中学校と連携し、中学生がセミナーに参加したこともあったようである。一方、日本語サマプロは日本語を留う留学生に交じり、日本語で交流ができる場であるため、英語に自信がなくても手取り早く身近に外国の方と触れあえるという意味では「英語サマプロ」よりハードルは低いのではなかろうか。</p> <p>また、英語サマプロ・日本語サマプロどちらにも設定されている講義では、用意されたトピック(講義テーマ)について大学の先生がそれぞれ授業を行い、参加者でグループディスカッションを行うという内容である。ちなみに今年度のトピックはⅠ:社会学、Ⅱ:自然科学、Ⅲ:人文学の3つのテーマだった。</p> <p>どちらのサマプロも様々な国籍の留学生と実際に交流できる貴重な機会であり、今年度初めてこのサマープログラムの参加を大学側に依頼し、英語サマプロは8/4~8に行われるレギュラークラス、日本語サマプロは7/22~25に行われる初級クラスの講義の聴講をさせていただけることになった。そこで、本校で希望する生徒を募ったところ、日本語サマプロには残念ながら1人も手が挙がらなかったが、英語サマプロには10名から参加の希望があった。参加者の内訳は1年生7名、2年生3名であった。夏休みに入ってしまったため、生徒への事務連絡はメールを利用した。</p> <p>参加した10名の生徒たちは、それぞれ指定されたトピックごとに教室に分かれ、講義を聴講。グループディスカッションにも参加した。</p> <p>担当された大学の先生から、「高校生はがんばるね!」と高評価をいただき、お茶高生が大学生や大学院生、留学生に交じりながら、懸命に授業に食らいついて、英語でディスカッションやコミュニケーションに励む姿勢がみられた。</p> <p>参加生徒の感想は次の通り。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な国から来た人たちの意見や考え、その国の風習を聞けて、英語と外国文化の知識を深めることができました。自分の意見を言う等の発言ができなかったので、物怖じせずに発言できるようになりました。(1年) ・普段触れないような話題に触れたので良かったです。(1年) ・内容が図で示されていたので理解できた。(1年) ・休み時間に隣の韓国人とはなせずうれしかったです。次も機会があったら、もっといろんな人と話したい。(1年) ・リスニング力をあげて、英語が聞き取れるようにしたいです。(1年) ・難しかった。ディスカッションで自分の意見を言うことができなかった。(1年) ・難しかった。もっと英語をやらなくてはいけないと思う。(1年) ・色々な国からの留学生の方の話聞くのがおもしろかったです。また、先生の講義内容は難しかったですが、その分リスニングの練習になったと思います。自分より英語力の高い大学生の中で受講できて、英語を勉強するよい機会になりました。(2年) ・全て英語の授業ということで、内容が理解できるか不安でしたが、辞書の力を借りて何とか理解することができました。女性としてこれから生きていく上で、とてもためになるお話でした。また、留学生の方もたくさん来ていて、私も隣の学生さんと英語でコミュニケーションできたのでよかったです。今回は自分でコースを選ぶことができなかったため、次回は選択できると思います。(2年) ・内容は難しかったけれど、いろいろな国の人がいて楽しかったです。(2年)

アンケート集計結果 (回答数: 10)

1. 参加したきっかけ (複数回答可)	5 おもしろそうだった		4 友だちに誘われた		3 家族に勧められた		2 先生に勧められた		1 参加が必須だった	
	9人	90%	2人	20%	2人	20%	1人	10%	人	%
	4 そうである		3 どちらかといえばそうである		2 どちらかといえばそうではない		1 そうではない			
2. 参加してよかった	8人	80%	2人	20%	人	%	人	%		
3. 内容は理解できた	3人	30%	4人	40%	3人	30%	人	%		
4. 次の機会にも参加したい	8人	80%	2人	20%	人	%	人	%		

アンケート結果及び分析

国際交流に意欲的な生徒が参加したこともあり、興味関心の高さを感じた。プログラム参加後も「参加してよかった」と答えた生徒が80%、「どちらかといえばよかった」も含めれば100%に上った一方、内容への理解は「理解できた」と答えた生徒は30%にとどまり、「どちらかといえば理解できなかった」生徒が30%もいた。大学生対象のプログラムであるため難度がやや高く、講座についていけなかった様子がうかがえた。ただ、生徒にとってはそれが刺激となったようで、『もっと英語を頑張らないといけない』と力不足を痛感し、今後の英語学習へのモチベーションとなったようである。また、「次回も参加したい」と答えた生徒が80%と高く、プログラムへの満足度が感じられた。次年度も継続して実施していく価値がある。今年度は生徒への募集が直前となってしまい、十分なアナウンスができなかった。次年度以降は早めに告知をし、もっと多くの生徒の参加を促すことができればと考えている。

SGH事業(特別活動・環境整備)報告書

担当者: 沼畑 早苗

事業名	ベトナム研修
実施日時	2014年 8月 17日(土) ~ 23日(日)
場所	ベトナム ハノイ
対象者 (参加者数)	3年生1人 2年生5人 (計6人)
連絡先 (企業名・担当者等)	イオンワンパーセントクラブ
実施概要	<p>総合的な学習で「経済発展と環境」を受講する2年生の5人と3年生1名が、イオンワンパーセントクラブ主催のアジア・ユースリーダーズプログラムに参加した。このプログラムは、アジア諸国の高校生・大学生がハノイの大気汚染の解決提案をテーマにしたディスカッションを通じて、改善・解決策を政府に提案をすることを目的としている。高校生部門には、日本からは本校生徒を含む計11名が参加し、インドネシア12名、ベトナム10名と混成チームで提案を競った。本校の参加は昨年に続き、2度目である。主なスケジュールは以下の通り。</p> <p>1日目 ハノイ入り、オリエンテーション、政府関係者とのウェルカム・レセプション 2日目 ベトナム農業活動体験・チームビルディング 3日目 午前「ハノイの大気汚染の事情」についての講義 ①ハノイ市天然資源・環境局より ②ハノイ運輸会社(バス会社)より ③Action for Environment Organization (NGO団体)より 午後 ヒアリング・視察 ①ALPHA高校にて高校生に対する環境意識ヒアリング ②バイクの排気ガス状況について実験 4日目 ①PM2.5濃度の測定:交差点、バスステーション、公園、ホテルの室内にて ②ハノイのバスを乗車、バスサービスの現状を視察 5日目 グループディスカッション 6日目 ①プレゼンテーション ②表彰式、最優秀案を政府へ提言、フェアウェル・レセプション 7日目 成田着</p>

アンケート集計結果 (回答数: 6)

1. 参加したきっかけ (複数回答可)	5 おもしろそうだった		4 友だちに誘われた		3 家族に勧められた		2 先生に勧められた		1 参加が必須だった	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
	6人	100%	人	%	人	%	人	%	人	%
	4 そうである		3 どちらかといえばそうである		2 どちらかといえばそうではない		1 そうではない			
2. 参加してよかった	6人	100%	人	%	人	%	人	%	人	%
3. 内容は理解できた	4人	67%	2人	33%	人	%	人	%	人	%
4. 次の機会にも参加したい	6人	100%	人	%	人	%	人	%	人	%

アンケート結果及び分析

参加者の満足度が非常に高いプログラムであったといえる。昨年の本プログラム参加者以外は、旅行で海外を訪れたことはあっても、課題探究を目的とした海外研修ははじめてであり、本研修を大変有意義なものであったとらえている。参加生徒は、英語力において本校におけるトップレベルの生徒たちであり、大気汚染に関する事前学習も十分行って臨んだが、諸外国の学生に比べると、自分たちの英語力が不十分であることを実感し、今後の改善すべき課題として受けとめている。また、積極的に自分の意見を相手に伝えていくことが大切であることを実感し、アジア諸国の学生の優秀さを目の当たりにできたことで、今後の学習意欲向上につながっている。グローバル人材になるためには、もっと日本を知らなければいけない、国際政治や外交への興味関心が広がったという回答も得られた。

SGH事業(特別活動・環境整備)報告書

担当者: 菊池 美千世

事業名	ネパールのユースによる 女の子の権利と早すぎる結婚についての講演会 および 交流会
実施日時	2014 年 10 月 9 日(木) 13:20 ~ 14:30
場所	お茶の水女子大学附属高等学校 体育館 および 附属学校部長室
対象者 (参加者数)	講演会: 全校生徒 (358 人) 交流会 国際協力とジェンダーの受講者(14 人)
連絡先 (企業名・担当者等)	公益財団法人プラン・ジャパン コミュニケーション部 開発教育担当
実施概要	<p>10月11日は世界中の人々が「女の子の権利」を認識し、女の子のエンパワーメントを促すために、国連が定めた「国際ガールズ・デー」である。日本では10月10日(金)と11日(土)の2日間にわたり、第3回国際ガールズ・デー記念イベント「13歳で結婚。14歳で出産。恋は、まだ知らない。」が東京・表参道で開催された。今年は、ネパールから、プランの子どもクラブでリーダーを務める男女ユース(女子イスマタさんと男子ナビンさん)が招聘され、途上国で女の子が直面する教育機会の制限や早すぎる結婚などの現実、その困難な状況を変えるための取り組みが紹介された。</p> <p>このイベントに先立って本校でも10月9日(木)に、全校生徒を対象とする、ネパールのユースによる講演会が行われた。最初にプラン・ジャパンの奈良崎氏から、プランの活動についてご紹介いただいた後、イスマタさんとナビンさんがそれぞれスピーチを行った。二人は子どもクラブに参加して「早すぎる結婚」に反対する活動をしており、ネパールにおける女の子のおかれている状況と、その改善に努める子どもたち自身の活動を、写真を交えて紹介した。スピーチの後には生徒から次々と質問が出て、予定の時間を大幅に超過して講演会が終了した。</p> <p>講演会後には、グローバル総合「国際協力とジェンダー」の受講者と、ネパールのユースの交流会が行われた。最初は緊張のためか、なかなか話が弾まず、国際交流に必要な積極性に欠ける不安もあったが、慣れるにつれて少しずつ質問も出るようになり、最後は別れを惜しみつつ、校舎玄関前で記念写真を撮って、交流会を終了した。</p>

アンケート集計結果 (回答数: 331)

1. 内容が理解できた	4 そうである		3 どちらかといえばそうである		2 どちらかといえばそうではない		1 そうではない	
	223 人	67.4 %	103 人	31.1 %	5 人	1.5 %	0 人	0 %
2. 興味・関心が向上した	199 人	60.1 %	123 人	37.2 %	9 人	2.7 %	0 人	0 %
3. 進路の参考になった	71 人	21.4 %	110 人	33.2 %	121 人	36.6 %	29 人	8.8 %
4. 次の機会にも期待している	175 人	52.9 %	137 人	41.4 %	17 人	5.1 %	2 人	0.6 %

アンケート結果及び分析

「どちらかといえば」を含めると、ほぼ全ての生徒が内容を理解し、興味・関心が向上したと答えている。3年生も含め、半数以上の生徒が進路の参考になったとも答えており、講演会は有意義であったといえよう。

2・3年生は1年次の地理の特別授業で途上国の女性と妊産婦を守る活動をしているジョイセフの講演も聞いており、途上国の女性を取り巻く環境の厳しさはある程度は理解していると思われるが、ネパールのユースから直接話を聞くことで、あらためて問題の深刻さを知るとともに、厳しい環境に負けずに自ら解決に向けて活動する姿に勇気づけられ、恵まれた環境にいる自分達に出来る事は何か、考えるようになった。

一方、準備期間が短く、十分な事前指導ができなかったため、「早すぎる結婚」の背景にある宗教やジェンダーの問題を十分に理解できていない生徒もあり、せっかくの機会を生かすきれなかったことは反省として挙げられる。

SGH事業(特別活動・環境整備)報告書

担当者: 増田・葭内

事業名	台湾研修旅行
実施日時	2014年 10月 22日(水) ~ 10月 25日(土)
場所	台北市内
対象者 (参加者数)	(29人)
連絡先 (企業名・ 担当者など)	台湾日本人会・台北市日本工商会(山本氏)、台北市立第一女子高級中学
実施概要	<p>【事前学習他】</p> <ol style="list-style-type: none"> 台湾に関する学習 <ul style="list-style-type: none"> 夏休み中にDVDの貸出、映画館での参考映画鑑賞、参考図書の読書 夏休み事前学習レポート・発表会 <ul style="list-style-type: none"> 各自がテーマを設定し、レポート(B41枚)を作成 レポート発表会 9/5(金)、9/9(火)、9/11(木) 昼休み 中国語のレッスン等 <ul style="list-style-type: none"> 「校歌を台湾語で歌おう」「やさしい台湾語講座」9月末からお茶大大学院生(台湾からの留学生)による講義 <p>【研修スケジュール】</p> <p>10月22日(水): 国立故宮博物院・原住民博物館の見学</p> <p>10月23日(木): 午前 ①台湾女企業家の方の講話 ②中正記念堂見学 午後 ①台湾日本人会&台北市日本工商会を訪問し、事務局総幹事と現地で活躍されている日本人女性の方の講話をきく。 ②台湾大学キャンパス見学</p> <p>10月24日(金): 台北市立第一女子高級中学訪問 ①台北賓館、総統府見学 ②課題別ディスカッション 課題(ジェンダー、国際協力、環境、政治、経済) 24日夕刻~25日午前: 台北一女の生徒自宅へホームステイ</p> <p>12月18日(木)午前 研修報告会にて成果を報告</p>

アンケート集計結果 (回答数: 29)

1. 参加したきっかけ (複数回答可)	5 おもしろそうだった		4 友だちに誘われた		3 家族に勧められた		2 先生に勧められた		1 参加が必須だった	
		29人	100%	1人	3.44%	5人	17.24%	0人	0%	1人
	4 そうである		3 どちらかといえばそうである		2 どちらかといえばそうではない		1 そうではない			
2. 参加してよかった	29人	100%	0人	0%	0人	0%	0人	0%		
3. 内容は理解できた	21人	72.41%	8人	27.58%	0人	0%	0人	0%		
4. 次の機会にも参加したい	26人	89.65%	2人	6.89%	1人	4.44%	0人	0%		

アンケート結果及び分析

参加については全員「よかった」と回答している。また、内容は理解できたかについては、全員「そうである」「どちらからか」というと「そうである」と回答していることから、一定の理解を得たといえよう。次の機会も参加したいかの間には、1名を除いて肯定的な回答を得た。このことから、おおむね本プログラムに関して一定の評価を得たととらえることができよう。今後も研修内容の充実を図り、台北一女との交流やディスカッションを通じて課題解決につなげていきたいと考える。

SGH事業(特別活動・環境整備)報告書

担当者: 増田・葎内

事業名	国際シンポジウム「サステナビリティとジェンダー」
実施日時	2014年 11月 1日(土) 10:30 ~ 17:00
場所	国連大学 ウ・タント国際会議場
対象者 (参加者数)	2年生総合的学習の時間「国際協力とジェンダー」選択者 (16人)
連絡先 (企業名・ 担当者など)	お茶の水女子大学ジェンダー研究センター シンポジウム事務局
実施概要	<p>2014年11月、「持続可能な開発のための教育(Education for Sustainable Development, ESD)に関する世界会議」の日本開催にちなみ、お茶の水女子大学ジェンダー研究センターが中心となり、国連大学サステナビリティ高等研究所と共に開催されたものである。</p> <p>【基調報告】 「持続可能な開発のための教育とジェンダー—未来へつなぐもの」(スーヒョン・チョイ(ユネスコ教育局 教育・学習内容部長(ビデオメッセージ)) 「ポスト2014/2015年国際開発アジェンダとジェンダー課題」(ヒュンジュウ・ソン(韓国両性平等教育振興院教授))</p> <p>【パネリスト報告】 「エコロジカル・フェミニズムの超克」(萩原なつ子(立教大学教授)) 「〈不安〉から〈ヴィジョン〉へ—ドイツ市民運動と福島との接点」(高雄綾子(フェリス女学院大学専任講師)) 「震災におけるトラウマとジェンダー」(宮地尚子(一橋大学大学院教授)) 「地域からのエネルギーシフト—3万人のまちからできること」(岡部幸江(一般社団法人大磯エネシフト理事長)、渡辺順子(大磯町議員、元議長))</p> <p>【全体討議】 質疑応答: 基調報告者・パネリスト コメント: 田中由美子(JICA国際協力専門員)、北村友人(東京大学大学院教育学研究科准教授)ほか</p>

アンケート集計結果

(回答数: 16)

1. 参加したきっかけ (複数回答可)	5 おもしろそうだった		4 友だちに誘われた		3 家族に勧められた		2 先生に勧められた		1 参加が必須だった	
		1人	6.25%	0人	0%	0人	0%	9人	56.25%	14人
	4 そうである		3 どちらかといえばそうである		2 どちらかといえばそうではない		1 そうではない			
2. 参加してよかった	2人	12.50%	14人	87.50%	0人	0%	0人	0%		
3. 内容は理解できた	0人	0%	11人	68.75%	5人	31.25%	0人	0%		
4. 次の機会にも参加したい	1人	6.25%	11人	68.75%	4人	25%	0人	0%		

アンケート結果及び分析

参加に関しては全員「よかった」と回答しているものの、内容については、およそ3分の1の生徒が「どちらかといえば理解できない」と回答していた。国際会議という場に参加することそのものについては大きな意義があると考えられる。また、ジェンダーの視点から国際協力を考えるというこれまでの授業の内容から少し離れて、「サステナビリティ」というテーマの設定の中で、各方面の専門家からのお話を聞くことができたことは、貴重な体験であり、視野をさらに広げることができたと考えられる。しかしながら、内容的な難しさもあり理解するには少々事前学習が必要などころもあったやもしれない。今後も校外研修機会をできるだけ取り入れ、生徒の思考や見識を広めていきたいと考える。

SGH事業(特別活動・環境整備)報告書

担当者: _____ 原 _____.

事業名	伝統文化鑑賞会 <文楽>
実施日時	2014 年 12 月 17 日(月) 12 : 30 ~ 17 : 30
場所	立劇場(所在地 〒102-8656 東京都千代田区隼町4-1 半蔵門線「半蔵門駅」1 出口より徒歩5分)
対象者 (参加者数)	本校2年生 120名 (アンケート提出者 110名)
連絡先 (企業名・担当者等)	国立劇場営業課(03-3265-6751)
実施概要	<p>自国の伝統文化についての理解を深めるため、ある程度古文や歴史の学習が進んだ2年生を対象に文楽鑑賞会を企画した。 本公演の前に1時間半の事前レクチャーを受け、生徒たちは、人形、人形遣い、歌、三味線、舞台美術が織りなす総合芸術としての文楽の見どころなど、基礎知識を得た上で鑑賞に臨んだ。</p> <p>演目 1 伽羅先代萩 2 紙子仕立両面鏡</p> <p>費用 4,100 円</p> <p>引率 2年生担任ほか</p>

アンケート集計結果 (回答数: 110)

1. 内容が理解できた	4 そうである		3 どちらかといえばそうである		2 どちらかといえばそうではない		1 そうではない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
2. 興味・関心が向上した	22人	20%	69人	63%	19人	17%	0人	0%
3. 進路の参考になった	36人	32%	55人	50%	16人	16%	3人	2%
4. 次の機会にも期待している	3人	2%	6人	5%	64人	58%	37人	34%
	23人	21%	47人	43%	16人	15%	4人	3%

アンケート結果及び分析

今回の事前レクチャー及び鑑賞会は、内容の理解や興味関心の向上といった点においては、ある程度有意義な時間となったといえる。しかし、生徒たちの事後アンケートからは、「なぜ今、日本の数少ない伝統芸能を残すべきなのか」「なぜ、高校生のこの時期に、伝統芸能の学習が必要なのか」といった本質に迫る問いをたて、回答するような記述は見られなかった。

自国の伝統芸能を高校生に鑑賞させる場合、付け焼刃的なレクチャーと単発的な鑑賞会で終わらせることなく、その後、国語や歴史、音楽や美術といった様々な教科学習の中に取り込み、涵養する学びこそ、より深い伝統芸能の理解につながるのではないだろうか。今後は、グローバルを意識した授業展開や教科間の連携が必要になってくるであろう。

SGH事業(特別活動・環境整備)報告書

担当者: 吉村雅利

事業名	歌舞伎鑑賞会		
実施日時	2014年 12月 16日(火)	10:30 ~ 16:00	
場所	歌舞伎座 東京都中央区銀座4-12-15		
対象者 (参加者数)	第1学年 (115人)		
連絡先 (企業名・担当者等)	歌舞伎座 東京都中央区銀座4-12-15 TEL:03-3545-6800(代)		
実施概要	<p>スーパーグローバルハイスクール自国文化理解の一環として、1年生には、古典芸能に触れる機会として歌舞伎鑑賞を設けた。</p> <p>ホームルームでは、歌舞伎に関する事前学習会も行い、基礎知識を身につけた上で鑑賞に望んだ。</p> <p>また、事後指導として、ロングホームルームの時間を使い、扇崎秀蘭氏による実技を交えたレクチャーを受けた。</p> <p>演目 1.源平布引滝 義賢最期 2.幻武蔵 3.二人椀久</p> <p>費用 3,600円</p> <p>引率 一年生担任 ほか</p>		

1. 内容が理解できた	4 そうである		3 どちらかといえばそうである		2 どちらかといえばそうではない		1 そうではない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
2. 興味・関心が向上した	45人	39%	55人	49%	12人	10%	2人	2%
3. 進路の参考になった	4人	3%	4人	3%	69人	60%	38人	33%
4. 次の機会にも期待している	52人	45%	55人	48%	6人	5%	2人	2%

アンケート結果及び分析

1. 高校1年生には、少々難しいのではないかと予想していたが、内容の理解度について、22%が、理解できた、52%がどちらかと言えば理解できたと答えており、事前学習の成果が現れていると思われる。

2. 興味関心の向上については、39%が向上した、49%がどちらかと言えば向上したと答えているので、古典芸能に関心を持たせるきっかけとしては有意義なものであったと言えるだろう。

SGH事業(特別活動・環境整備)報告書

担当者: 沼畑 早苗

事業名	地理A特別授業「発展途上国の人口問題と国際協力」
実施日時	2013年12月19日(木) 9:15~11:00
場所	お茶の水女子大学 共通講義棟 2号館 201室
対象者 (参加者数)	一年全員 (118人)
連絡先 (企業名・担当者等)	公益財団法人ジョイセフ プログラム・マネジャー
実施概要	<p>公益財団法人ジョイセフは、国連人口基金(UNFPA)などの国連機関や国際家族計画連盟(IPP F)をはじめとした国際機関並びに外務省や国際協力機構(JICA)などとの連携協力機関として、人口・保健分野での日本におけるパイオニアNGOとしての重要な役割を担っている組織である。</p> <p>3学期に扱う「人口問題」につながる特別授業として、世界と日本の人口問題、妊娠・出産と女性の生き方、発展途上国の問題をザンビアの事例をもとに考えた。</p>

アンケート集計結果 (回答数: 114)

1. 内容が理解できた	4 そうである		3 どちらかといえばそうである		2 どちらかといえばそうではない		1 そうではない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
1. 内容が理解できた	88人	77%	26人	23%	0人	0%	0人	0%
2. 興味・関心が向上した	76人	67%	35人	31%	3人	2%	0人	0%
3. 進路の参考になった	34人	30%	44人	38%	33人	29%	3人	3%
4. 次の機会にも期待している	75人	66%	37人	32%	2人	2%	0人	0%

アンケート結果及び分析

約8割の生徒が内容が理解できたと回答し、約7割の生徒が興味・関心が向上したと回答している。人口問題という、一見進路とは全く関係ないテーマであるにもかかわらず、進路の参考になったと回答した生徒が3割、どちらかといえばそうであると回答した生徒を含めると約7割が参考になったと回答したことは、良い意味で予想外であった。自由記述から、発展途上国の現状を知ること、望まない妊娠などを原因とする人口爆発の問題に対し、女性として自分が何かできるのではないかと、しなければならぬのではないかと感じた生徒が多かったことがうかがえた。

人口爆発を防ぐための対策として有効なのは、中国の一人っ子政策のように子供を生むことを制限ばかりではなく、正しい性に対する知識をもつことであり、教育の問題と結びついているということを多くの生徒が理解したようである。

SGH事業(特別活動・環境整備)報告書

担当者: 木村 政子

事業名	e-ラーニングの活用
実施日時	2014年6月～2015年3月
場所	お茶の水女子大学共通講義棟3号館1Fランゲージ・スタディ・コモンズ、お茶の水女子大学附属図書館2Fワークスペース「ヘレネー」、附属高等学校コンピュータ室、各家庭等
対象者 (参加者数)	1～3年生全員 (360人)
連絡先 (企業名・担当者等)	お茶の水女子大学外国語教育センター(ホームページ: http://www-c.cf.ocha.ac.jp/flec/)
実施概要	<p><この事業について>2014年6月より、全学年に対してお茶の水女子大学外国語教育センター監修の自習用e-ラーニング教材(①ATR-CALL Brix、②TKコース、③Tell Me More)の利用を促し、自学自習を勧めている。①はネット環境があれば学外からでも使用可で、中上級の語彙や表現の練習、およびTOEIC対策ができる。②は学内ネットワークのみ利用可で、TOEFL対策や、Worldlink、Daily English等の大学生の日常生活を題材としたvisual aidsを駆使した問題演習、さらには文法問題集の学習ができる。③は大学構内の共通講義棟3号館1Fランゲージ・スタディ・コモンズ、附属図書館2Fワークスペース「ヘレネー」でのみ利用可で、イギリス英語、アメリカ英語だけでなくフランス語、ドイツ語、中国語にも対応しており、BeginnerからAdvanced Learnerまで幅広い学習者を対象としている。</p> <p><実施状況>6月に全校生徒に大学外国語教育センターからの「自習用e-ラーニング教材について」という印刷物および利用時に必要なIDとパスワードを伝え、利用を促した。但し3年生についてはICカード付の身分証明書を持っている1、2年生と違い、旧式の身分証明書しかもっていなかったために、6月段階では自習用Eラーニング教材の①②しか利用できなかった。そのため、大学の情報基盤センターの協力も仰いで別途e-ラーニング用のICカードを都合していただき、かなり遅くはなったが3年生には11月半ばにICカードを配付し、その時点から③も利用できることとなった。</p>

		全体	1(12)-1「e-ラーニング」を活用できれば使ってみたい					不明
			①大変そう思う	②ややそう思う	③どちらとも言えない	④あまりそう思わない	⑤全くそう思わない	
学年	1年	121 100.0	17 14.0	61 50.4	30 24.8	12 9.9	1 0.8	0
	2年	113 100.0	11 9.9	41 36.9	34 30.6	21 18.9	4 3.6	2
	3年	118 100.0	22 19.5	46 40.7	29 25.7	11 9.7	5 4.4	5
	合計	352 100.0	50 14.5	148 42.9	93 27.0	44 12.8	10 2.9	7

		全体	1(12)-2「e-ラーニング」を使用したことがある				
			よく活用している	時々活用している	ほとんど活用していない	全く使ったことがない	不明
学年	1年	121 100.0	1 0.8	7 5.8	11 9.2	101 84.2	1
	2年	113 100.0	0 0.0	5 4.6	11 10.2	92 85.2	5
	3年	118 100.0	4 3.6	7 6.4	12 10.9	87 79.1	8
	合計	352 100.0	5 1.5	19 5.6	34 10.1	280 82.8	14

アンケート結果及び分析

今年度はe-ラーニング自体の大学側のスタートが遅かったこと、種類の違うICカードを利用していたことで各学年の足並みがそろわなかったこと、またこちらの生徒への働きかけも十分ではなかったことから、生徒のアンケートを見てもe-ラーニングを利用したい気持ちはありながら(「利用したい」:1年生64%、2年生47%、3年生60%)、実際には自由記述にあるように、「利用方法がよくわからない」「日々忙しくてe-ラーニングまで手が回らない」などの理由であまり活用されていない(「活用している」:1年生7%、2年生5%、3年生10%)。しかしながら、3年生などは受験期でもあり、かつICカードが使えるようになったのは11月半ば過ぎであるにもかかわらず、約1割の生徒がe-ラーニングを活用できたことは、他学年の生徒と比べても今後の利用増加にかなり期待が持てるのではないかと。1、2年生は学校生活が忙しく、大学の校舎しかも利用時間の制約も座席数の制限もある教室に足を運ぶのは実際のところ難しいようであるし、また3年生は受験勉強で忙しく、海外の大学やTOEIC、TOEFLを受検しようということでもなければ継続してe-ラーニングで自学自習を促すのは難しいともいえる。しかし「利用したい」気持ちがある生徒がこれだけいるのであれば、こちらの働きかけ如何で今後e-ラーニングの利用を増やすこともできるはずである。来年度以降はその点に焦点を絞って取り組みを進めていきたいと考えている。

SGH事業(特別活動・環境整備)報告書

担当者: 玉谷 直子

事業名	AFSを通じた留学生の受け入れ
実施期間	2014年4月1日(火) ~ 2015年2月5日(木)
受け入れクラス	お茶の水女子大学附属高等学校 2年蘭組
連絡先 (企業名・担当者等)	交易財団法人AFS協会 東京支部 支部長
実施概要	<p>約10か月にわたり、第2学年蘭組にマレーシアからの留学生を受け入れた。留学生は日本語学習歴がほとんどなく、日常会話もできない状態であったため、本人の希望により、国語、数学、理科、社会、保健等の授業から合計21時間取り出し、お茶の水女子大学日本語教育コースの准教授とその指導を受ける大学院生及び大学生の協力を得て、週4回の日本語支援を行った。クラスでは、英語、体育、家庭科の授業を受け、特に体育ではその積極的な姿勢が他の生徒に影響を与えていたと好評であった。同学年の他クラスの生徒とは、選択科目である週2時間の美術と、週2時間の総合的な学習の時間として設置されている「異文化理解」の講座(受講者16名)においてともに学び、交流した。また、7月には合同ホームルームを設定し、留学生による日本語と英語をまじえたマレーシアの文化紹介を行った。この試みはアンケートにより、クラスを問わず好評であったことが確認された。</p> <p>課外活動では華道部に入学し定期的に活動したほか、茶道部やバドミントン部の活動の様子も見学し生徒と交流をはかった。また、体育祭(5月24日)、文化祭(9月20日21日)、ダンスコンクール(10月30日)、合唱コンクール(1月22日)にもクラスの一人として積極的に参加した。また、5月9日にマザー牧場で行った校外学習や12月17日に実施した自国文化理解「文楽」にも参加した。</p> <p>体育祭の応援の際には、3年生がムスリムである留学生用に特別に袖や丈の長い衣装を用意した。また、ダンスコンクールではクラスの生徒が作ったダンスに「ムスリムにはふさわしくない動きが多い」との理由で留学生が参加を辞退したが、クラスの生徒たちと話し合い、留学生が参加できる衣装と動きを追加してダンスを作った。このように、特別活動における交流において、お互いの文化に対する理解を深め合う姿が見られた。</p>

アンケート集計結果 (回答数: 110(内同学級36))

質問	学級	とても良い		良い		良くも悪くもない		悪い		その他		
		人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	
留学生を受け入れることは?	同学級	21人	58.3%	13人	36.1%	2人	5.6%	0人	0%			
	他学級	36人	48.6%	29人	39.2%	9人	12.2%	0人	0%			
留学生との関係は?	生涯の友			とても親しくなれた		時々話をした		あまり話さなかった		全く話さなかった		無回答
	同学級	1人	2.8%	7人	19.4%	18人	50.0%	10人	27.8%	0人	0%	0人
他学級	0人	0%	3人	4.1%	11人	14.9%	24人	32.4%	35人	47.3%	1人	1.4%
留学生と過ごしてよかったことは? (複数回答可)	授業			学校行事		クラブ活動		外国語で会話ができた		学校外での付き合い		その他
	同学級	11人	30.1%	32人	88.9%	4人	11.1%	12人	33.3%	1人	2.8%	1人
他学級	17人	23.0%	19人	25.7%	6人	8.1%	9人	12.2%	2人	2.7%	6人	8.1%

アンケート結果及び分析

アンケート結果からは、留学生の受け入れに対して生徒が好意的であり、生徒が同年代の女子との異文化交流ができることに大きな意義を感じていることがわかった。また、同じ学級で過した生徒は、他のクラスの生徒よりも留学生の受け入れに好意的であり、留学生との関わりが大きいほど、留学生の受け入れに好意的になることも確認できた。同学級の生徒の多くが、留学生と過ごしてよかったこととして学校行事をあげている。これもそう答えた理由からは、取り出しによる日本語支援の時間が多く授業における関わりが小さかったこととともに、行事や部活動などの課外活動の方がコミュニケーションをとる機会が多く、考え方の違い等を知ることができた様子がうかがえた。他の学級の生徒は、総合的な学習の時間等において交流を深めた様子がわかった。

留学生自身は、日本語支援により生徒とのコミュニケーションが可能となり留学生生活が充実したと満足しているが、日本語支援の比重が大きすぎる、本校生徒は留学生を受け入れる意義を感じなくなることがわかり、適正なバランスを探ることの必要性を再確認した。

3 取り組み全体の成果と評価、および課題

3-1 成果と評価

- ・「グローバル総合」を中心とした SGH の取り組みの成果として、生徒の社会の諸課題への関心、社会貢献や自己研鑽活動に取り組む意欲を高めたといえる。また、日本だけでなく世界が抱える社会課題に取り組む中で、進学先に関してもグローバル意識を持ち、国際化に重点を置く大学への進学希望も高まっている。
- ・また、海外研修は、参加生徒達に大変良い影響をもたらした。国際的な社会課題、政治や外交への関心が高まるだけでなく、現地の同世代の学生とふれあう中で、自国文化への知識の不十分さや語学力・コミュニケーション力等の技能の未熟さも実感し、改めて自らを客観視し目標をたてる機会となっている。

3-2 課題と改善点

課題研究に関しては、実施1年目ということで、担当教員も次に何をすべきか模索しながら進めたため、生徒たちが学び得た成果を生かして提言までまとめて発信していく過程に不十分なところがあった。また、生徒のモチベーションやディベート及びディスカッションの質を維持・向上させることも難しく、具体的な目標や評価方法の確立とその共通理解を図っていく必要がある。海外研修に関しても、研修先等が直前に確定するなど、実施初年度ならではの課題が多かった。また、本校1年生及び2年生に向けた海外研修報告会では、報告を聞く生徒たちの報告内容への理解度が低く、質疑応答が活発になされたとはいえなかった。次年度は、より詳細なスケジュール表を作成し、それを提示することで生徒たちの自主的に取り組む姿勢を促すこと、また、単に生徒が内容に満足するだけでなく、その効果に対しても実感が持てるような計画を立案することが課題である。海外研修においては、フィールドワーク先についての新たな検討も含め、より効果的な研修内容や事前学習の模索、また、海外研修報告を聞く生徒たちにとっても効果的な報告会のあり方の検討も課題である。

研究体制に関しては、今年度は3つのグループ（「課題研究グループ」「教養教育グループ」「特別活動・環境整備グループ」）と、それらの長と研究部でつくる「推進班」という組織で研究を行ってきたが、発信については議論する部署がなく、推進班で行うこととなってしまった。また、「教養教育グループ」が意識調査の項目を作成し、教養教育に関する評価を行ったが、本研究全体を評価する担当組織が必要であった。一方で、環境整備に関しては今年度ほぼ整えることができ、また特別活動に関しても、「グローバル講座」や自国文化理解のための行事は教科主導で実施していく見通しがたっている。そのため、次年度以降の組織は、「課題研究グループ」「連携・評価・発信グループ」の2本立てで行うこととする。

関係資料 1

【第 1 回 SGH 運営指導委員会】

- 1 日時 2014 年 9 月 10 日(水) 14:30～17:00
(13:00～14:20 高校にて「グローバル総合」の授業参観)
- 2 場所 お茶の水女子大学 第一会議室
- 3 出席者
 - ・運営指導委員 黒河内久美 (財)国連大学協会・評議員
永井 裕久 筑波大学大学院ビジネスサイエンス系教授
根津 朋実 筑波大学大学院人間総合学研究科准教授
田村 知子 岐阜大学大学院教育学研究科 准教授
 - ・管理機関(お茶の水女子大学)
耳塚 寛明 副学長 理事 教育担当 教授
清水 徹郎 外国語教育センター センター長 准教授
富士原紀絵 大学院人間文化創成科学研究科人間科学系准教授
 - ・校内出席者 村田容常 校長・大学院人間文化創成科学研究科 自然・応用科学系教授
SGH 推進班 菊池美千世(副校長), 荻原万紀子(主幹), 阿部真由美(研究部長)
三橋一行(教養教育グループ長), 土方伸子(特別活動・環境整備グループ長),
北原武(課題研究グループ長)
課題研究グループ 増田かやの, 葭内ありさ, 沼畑早苗, 玉谷直子
 - ・オブザーバー 校内全教員
- 4 会議次第
 - (1)校長より開会あいさつ (2)管理機関の取り組みについて (3)高校の取り組みについて
 - (4)運営指導委員より (5)協議
- 5 運営指導委員より頂いたご意見
 - ・グローバルな人材とは次のような力を持った人と考えている。①日本人としてのアイデンティティを持っている ②グローバルな課題について、日本人として何ができるか考え、考えをしっかりと発言できる ③コミュニケーション能力を持っている ④異文化に対する理解力がある ⑤国際社会で活躍する人材 ⑥教養がある⑦相手との信頼関係が築ける
 - ・本日参観した授業は、非常にアカデミックであったが、プラクティカルな面があればより強化できるのではないかと。貴校にとっての「グローバル力」とは何かを設定するとよいのではないかと。
 - ・参観した授業のグループ分けについて、なぜそのテーマを選択したのか、グループの問題意識を記録に残していくと、それが徐々に深まっていく過程がわかるので良いのでは。
 - ・アンケート項目について、パスポートの所有率や、海外経験の有無、など事実を問う項目があってもよい。
 - ・カリキュラムは見える化、共有化の手段であり、計画としてのカリキュラムはゆるやかな未完のシナリオである。実施されたカリキュラムは記録文書。全体計画、年間指導計画、単元計画の作成と充実を図ることが重要である。

関係資料2

【第2回 SGH 運営指導委員会】

1 日時 2015年3月2日(月) 15:30~17:30

2 場所 お茶の水女子大学 第一会議室

3 出席者

・運営指導委員 黒河内久美 (財)国連大学協力会・評議員

永井 裕久 筑波大学大学院ビジネスサイエンス系教授

根津 朋実 筑波大学大学院人間総合学研究科准教授

田村 知子 岐阜大学大学院教育学研究科 准教授

内海 成治 京都女子大学発達教育学部 教授

楠見 孝 京都大学大学院教育学研究科 教授

・管理機関(お茶の水女子大学)

耳塚 寛明 副学長 理事 教育担当 教授

清水 徹郎 外国語教育センター センター長 准教授

富士原紀絵 大学院人間文化創成科学研究科人間科学系准教授

・校内出席者 村田容常 校長・大学院人間文化創成科学研究科 自然・応用科学系教授

SGH 推進班 菊池美千世(副校長), 荻原万紀子(主幹), 阿部真由美(研究部長)

三橋一行(教養教育グループ長), 土方伸子(特別活動・環境整備グループ長),

北原武(課題研究グループ長)

課題研究グループ 増田かやの, 葭内ありさ, 沼畑早苗, 玉谷直子

・オブザーバー 校内全教員

4 会議次第

(1)校長より開会あいさつ (2)管理機関の取り組みについて (3)高校の取り組みについて

(4)運営指導委員より (5)協議

5 運営指導委員よりいただいたご意見

- ・海外教育機関との交流があるが、先方の学校に対してもどのような貢献ができるのかという視点を持つとよいのではないか。お茶大生と米国大学生との交流で、相手校から「大学生の生の声が聴けてよかった」といった反応があった経験がある。
- ・お茶大との連携がうまくとれており、大学の先生の講義、留学生など効果的に活用している。規模が小さいながらも外部の大会やコンテスト等をうまく使って生徒の力を発揮させているという印象。
- ・今後は評価が大事になってくる。生徒の自己評価だけでなく、パフォーマンスの評価ができないか。論文やプレゼン等、ルーブリックを作り、伸びたのか足りないのかわかるようにすることで、生徒の意欲も維持できるだろう。ポートフォリオ評価も有効である。日々の活動をファイルすることで、学びの履歴書となる。
- ・報告書にある卒業生の反応から、SGHが始まる前から、その目指すところに合致するような授業が行われてきたと考える。生徒の論文に関しては、テーマによっては背景となる一般的な状況説明、例えば「日本文化の対外発信」なら、その全体的枠組に関する注釈があればよいのではないか。
- ・取り組みの持続可能性という意味で、各教科のカリキュラムを本来の教科の目標もふまえ、

SGH の観点で見直したことは大変よい。

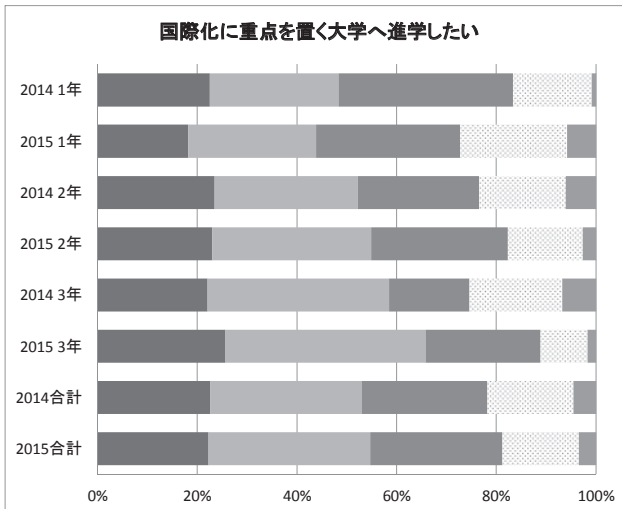
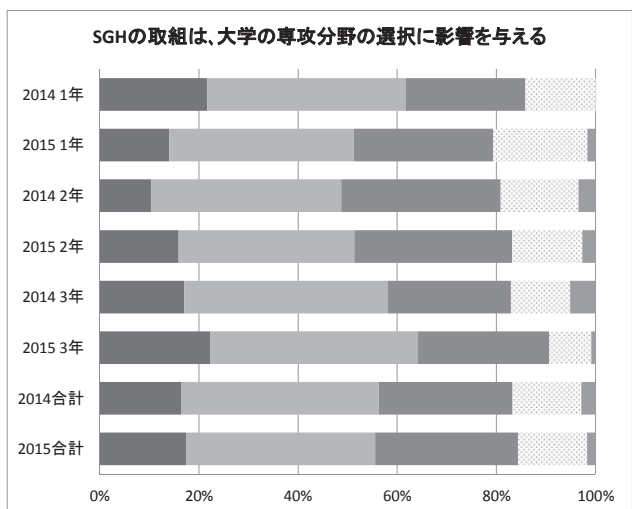
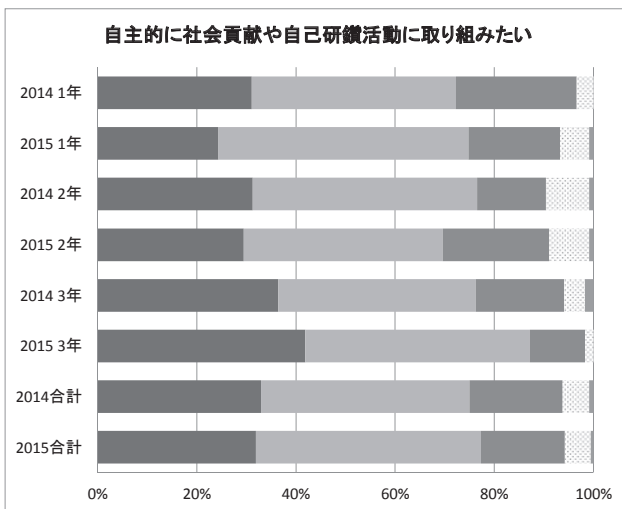
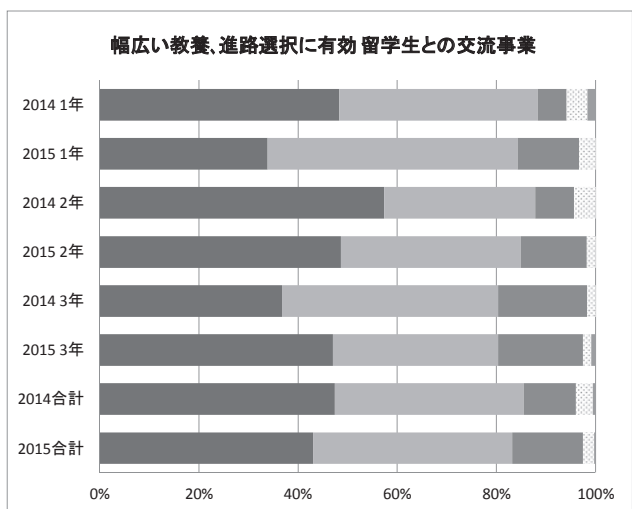
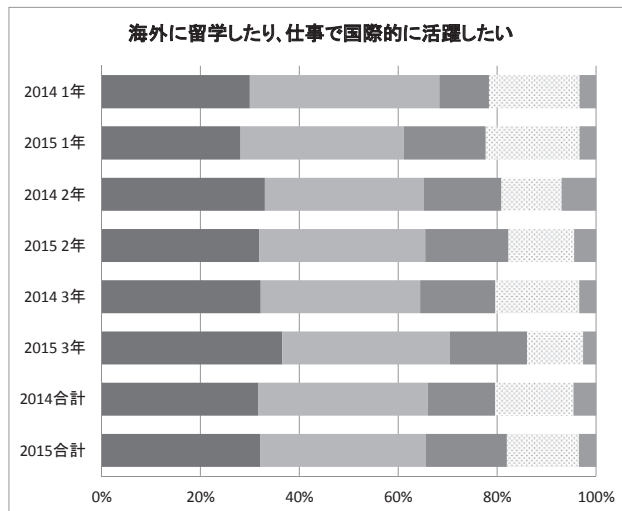
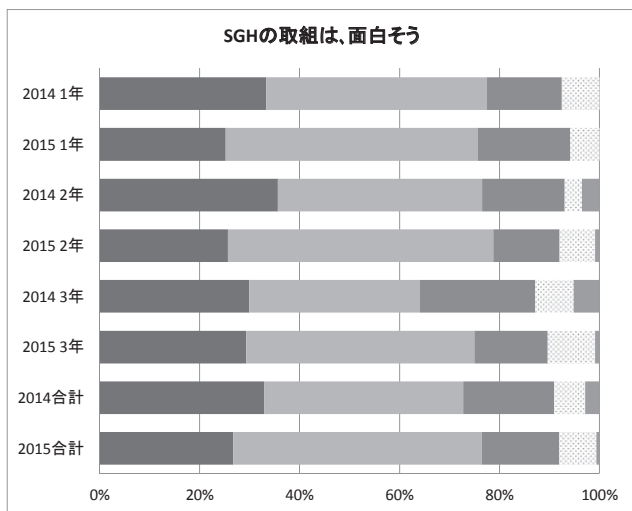
- 生徒は SGH の目標を意識しているのか。生徒の課題のゴールと、身につけさせたい資質・能力は連動する。両方を生徒が意識できるようにするとよいのではないか。
- スローガンに「女性のグローバルリーダー」とあるが、「女性リーダー」のモデルを明確にすると女子校としての取り組みが特徴づけられるのではないか。
- 小規模校ながら、手広く取り組んでいる印象。今後は、注力するものとそうでないものに分けていくことも大切。
- eラーニングについては、英語教育の中で、どのように活用していくのか工夫がほしい。また、英語構造力や語彙力などの基礎学力と、生徒のモチベーションが結びつくことが大切と考える。
- 評価については、SGH だけでなく、従来の教科の評価方法についても踏み込む必要があるのではないか。

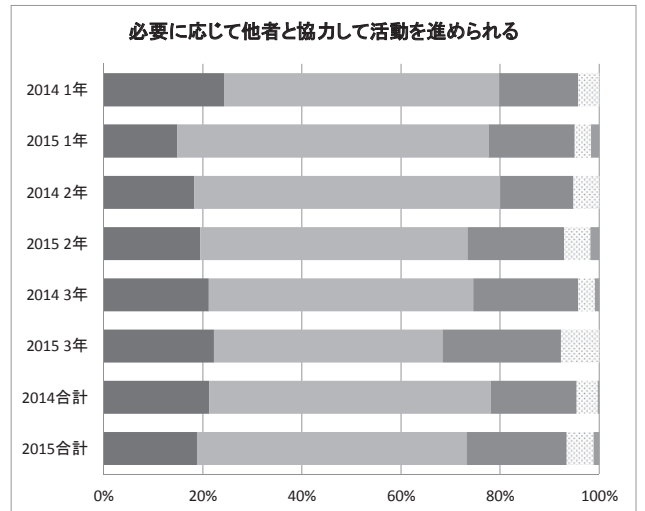
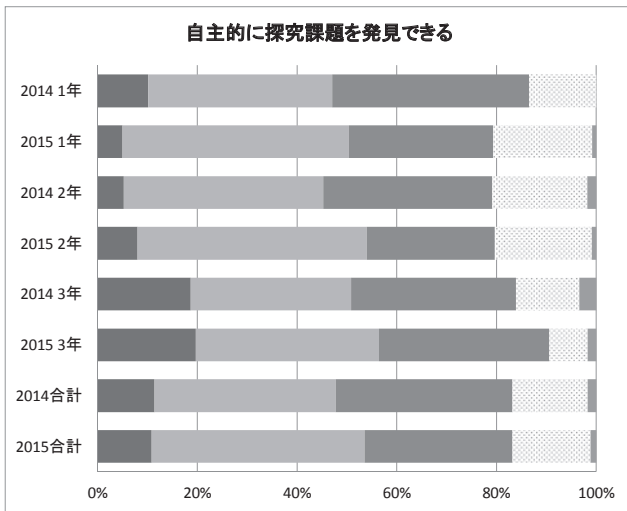
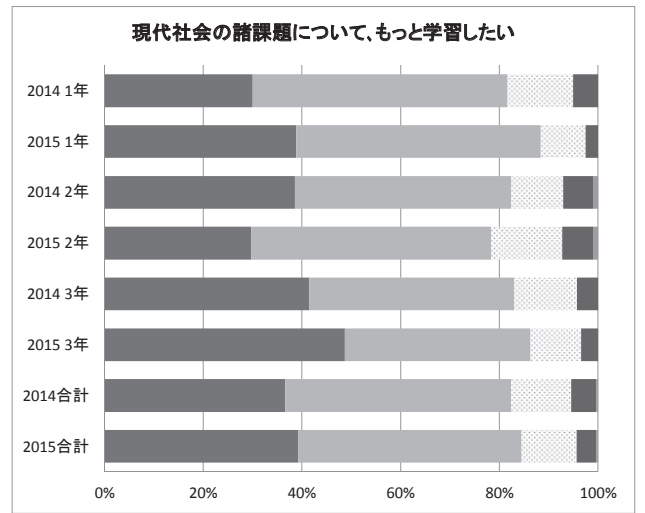
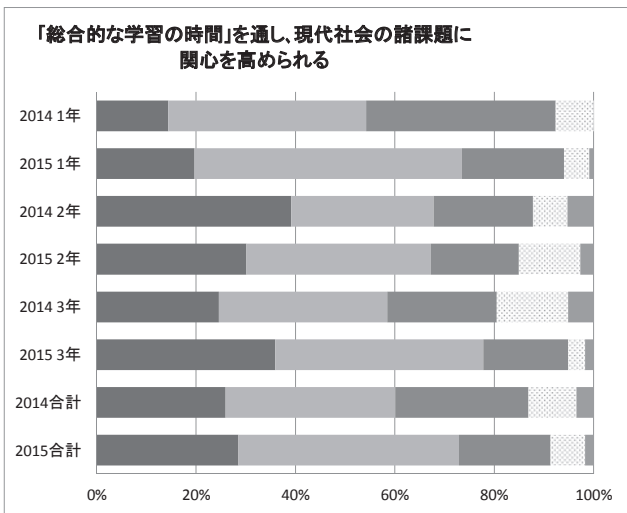
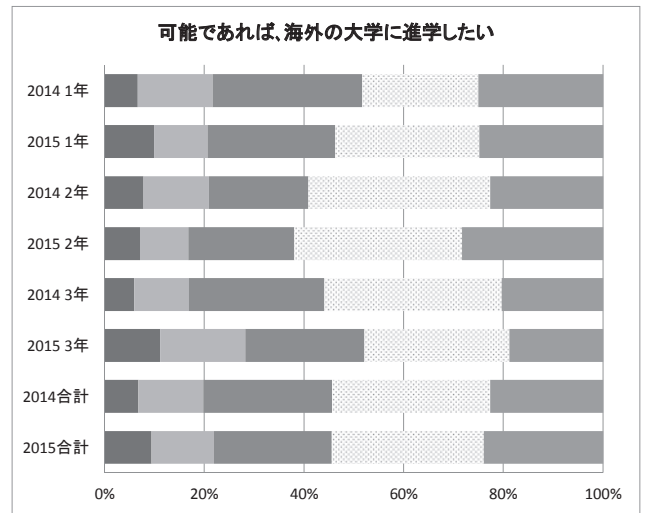
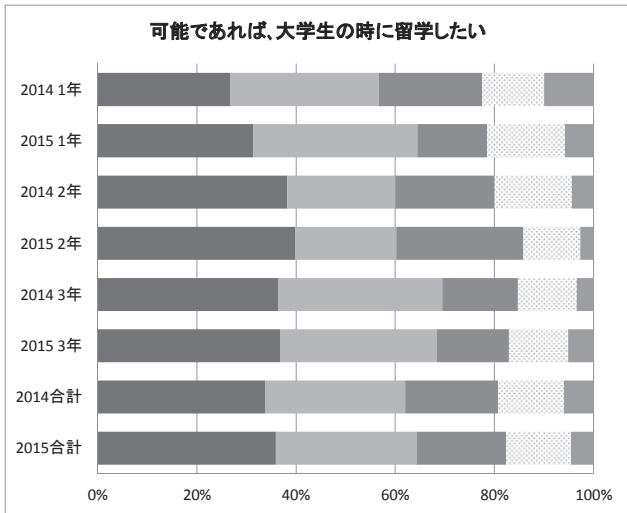
SGH意識調査 アンケート項目

項目名	
1. 取り組み全般・教養	
1	1(1)SGHの取組は、面白そう
2	1(2)今後身に付けたい、伸ばしたい能力や資質
3	1(3)海外に留学したり、仕事で国際的に活躍したい
4	1(4)-1 幅広い教養、進路選択に有効「教養基礎」
5	1(4)-2 幅広い教養、進路選択に有効「選択基礎」
6	1(4)-3 幅広い教養、進路選択に有効「附属高校生向け公開授業」
7	1(4)-4 幅広い教養、進路選択に有効 文理選択をせず学習を行えるカリキュラム
8	1(4)-5 幅広い教養、進路選択に有効 留学生との交流事業
9	1(5)自主的に社会貢献や自己研鑽活動に取り組みたい
10	1(6)SGHの取組は、大学の専攻分野の選択に影響を与える
11	1(7)国際化に重点を置く大学へ進学したい
12	1(8)可能であれば、高校生の時に留学したい
13	1(9)可能であれば、大学生の時に留学したい
14	1(10)可能であれば、海外の大学に進学したい
15	1(11)-1 海外に語学留学(研修)をしたことがある
16	1(11)-2-1 滞在先
17	1(11)-2-2 期間
18	1(11)-3 海外に旅行をしたことがある
19	1(12)-1 「e-ラーニング」を活用できれば使ってみたい
20	1(12)-2 「e-ラーニング」を使用したことがある
2. 現代の社会の課題に対する関心	
21	2(1)「総合的な学習の時間」を通し、現代社会の諸課題に関心を高められる
22	2(2)現代社会の諸課題に対する興味・関心のある課題
23	2(3)現代社会の諸課題について、もっと学習したい
3. 課題を発見し解決する力	
24	3(1)自主的に探究課題を発見できる
25	3(2)必要に応じて他者と協力して活動を進められる
26	3(3)課題を発見し、解決方法を考え探究する活動は将来の役に立つ
4. 言語活用能力	
4-I 英語を活用する能力	
27	4-I (1)英語で自分の意見や考え、探究の成果を多くの人に伝えたい
28	4-I (2)-1 トピックが身近であれば、長い話や複雑な議論を英語で理解できる
29	4-I (2)-2 標準的な英語であれば、ネイティブ同士の会話の要点を理解できる
30	4-I (2)-3 文章の構成を意識しながら、必要な情報を手に入れられる
31	4-I (2)-4 関心の高いトピックを、辞書を使わずに読み、相違点や共通点を比較できる
32	4-I (2)-5 綿密な読みが必要な場合、読む速さや読み方を変えて、正確に読める
33	4-I (2)-6 なじみのあるトピックなら、ニュースの要点について、英語で議論できる
34	4-I (2)-7 学んだトピックや興味や経験の範囲内なら、抽象的でも議論できる
35	4-I (2)-8 事前に用意されたプレゼンテーションを流しように行え、質問にも対応できる
36	4-I (2)-9 デベートなどで、トピックが関心のあるものであれば、主張を明確に述べられる
37	4-I (2)-10 そのトピックについて知っていれば、まとまりのある文を書ける
4-II 日本語を活用する能力	
38	4-II (1)成果や提案などを効果的に伝えたり、論文を書けるようになりたい
39	4-II (2)-1 講義の要点や複雑な議論の流れを的確に理解できる
40	4-II (2)-2 文章の構成を意識しながら、必要な情報を手に入れられる
41	4-II (2)-3 関心の高いトピックを、相違点や共通点を比較しながら読める
42	4-II (2)-4 記事やレポートなど、目的や必要性に応じた読み方ができる
43	4-II (2)-5 新聞・インターネットやテレビのニュースの論点を見出し、議論できる
44	4-II (2)-6 自分の意見を聴衆の前で述べられ、質問にも応じられる
45	4-II (2)-7 デベートやディスカッションなどで、論拠を並べて主張を述べられる
46	4-II (2)-8 考えの根拠を示し、語いや文構造を適切に用いて、論理的な文章を書ける
5. 論理的な思考力	
47	5(1)-1 議論や考察を繰り返しても、課題や主張を見失わずに把握できる
48	5(1)-2 事実であれば、客観的なものであるかを意識してより確かな推論や根拠を立てることができる
49	5(1)-3 主張と根拠の間に飛躍や誤りがないか、不整合な部分はないかを確認できる
50	5(2)-1 議論や考察を繰り返しても、課題や主張を見失わずに把握できる
51	5(1)-2 事実であれば、客観的なものであるかを意識して相手の発表を聞いたり、論文などを読んだりできる
52	5(1)-3 相手の主張と根拠の間に飛躍や誤りがないかを意識して相手の発表を聞いたり、論文などを読んだりできる
53	5(3)論理的な思考力を高めたい
54	5(4)論理的な思考力を身に付けることは将来の役に立つ
6. プレゼンテーション能力	
55	6(1)探究の成果や解決策の提案、意見などを効果的に聞き手に伝えられる
56	6(2)プレゼンテーション能力を高めたい
57	6(3)プレゼンテーション能力を身に付けることは将来の役に立つ
7. ICTを活用する能力	
58	7(1)目的やデバイスや機器の特徴に応じ、適切に選択し使用できる
59	7(2)ICTを活用する能力を高めたい
60	7(3)ICTを活用する能力を身に付けることは将来の役に立つ

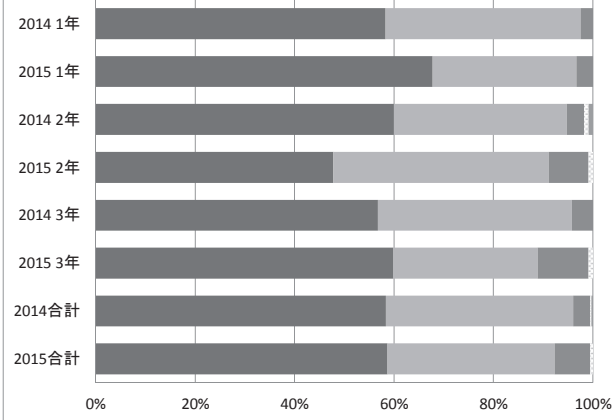
SGH意識調査 集計結果（2014年6月－2015年1月）

■①大変そう思う ■②ややそう思う ■③どちらとも言えない ※④あまりそう思わない ■⑤全くそう思わない

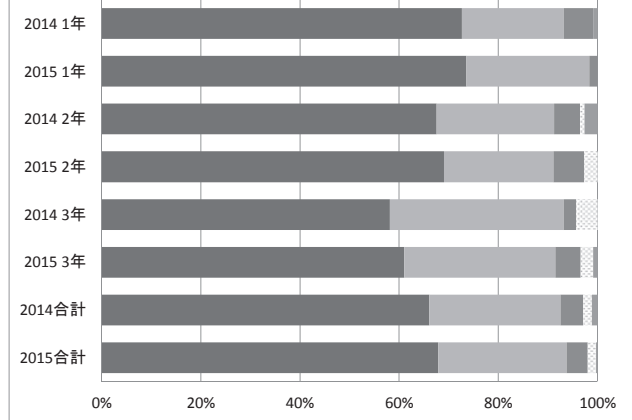




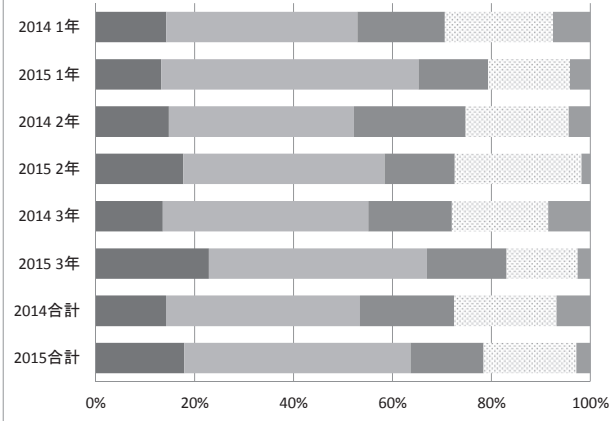
課題を発見し、解決方法を考え探究する活動は
将来の役に立つ



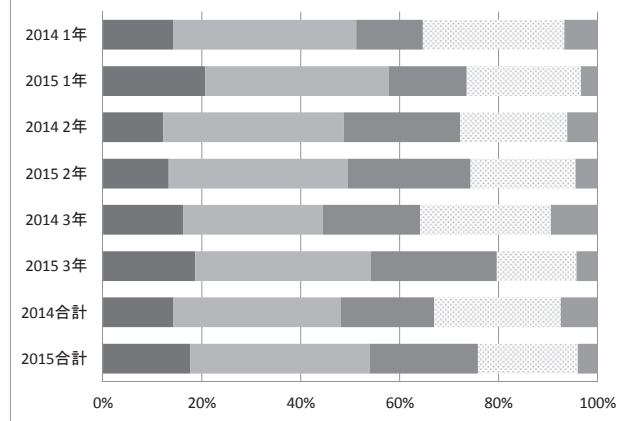
英語で自分の意見や考え、探究の成果を
多くの人に伝えたい



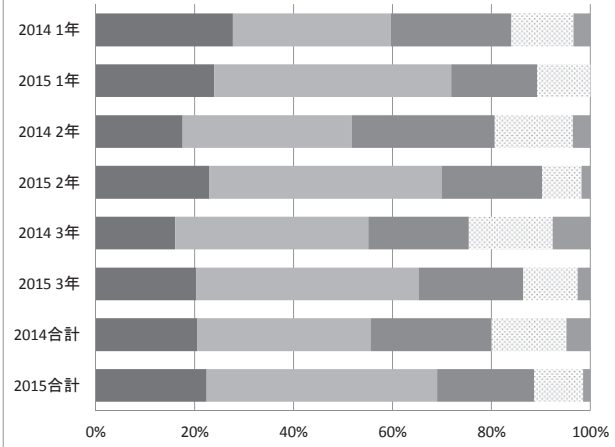
トピックが身近であれば、長い話や複雑な議論を
英語で理解できる



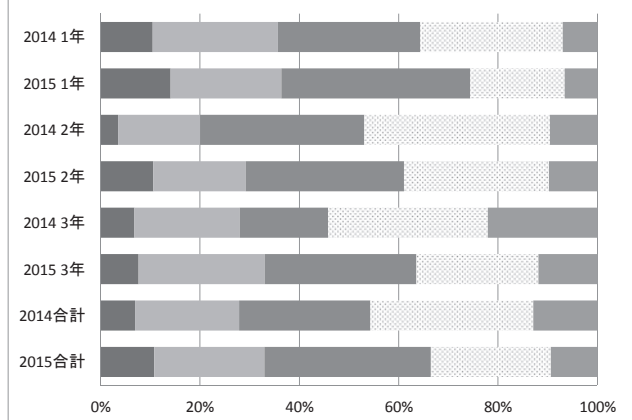
標準的な英語であれば、ネイティブ同士の会話の要点を
理解できる



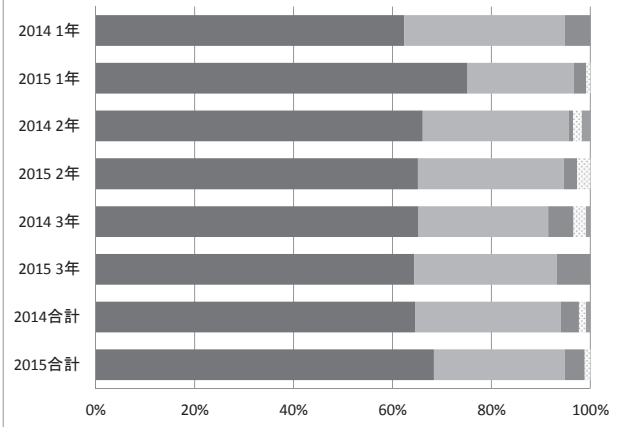
文章の構成を意識しながら、必要な情報を手に入れられる



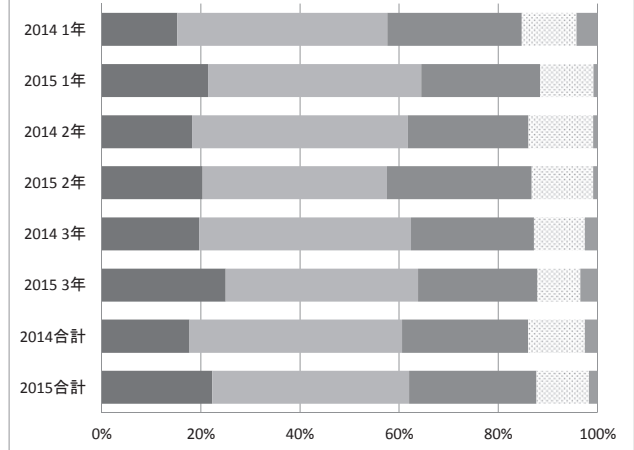
学んだトピックや興味や経験の範囲内なら、抽象的でも
議論できる



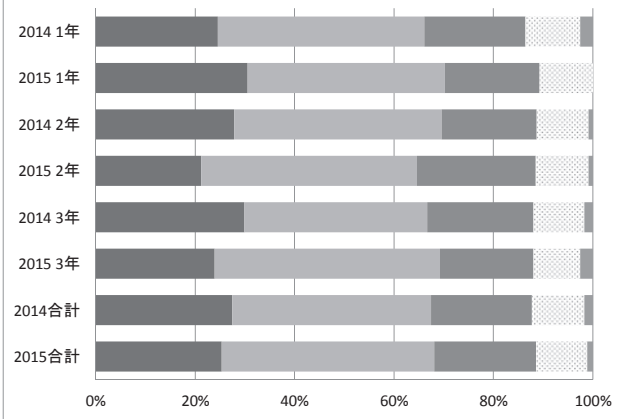
成果や提案などを効果的に伝えたり、論文を書けるようになりたい



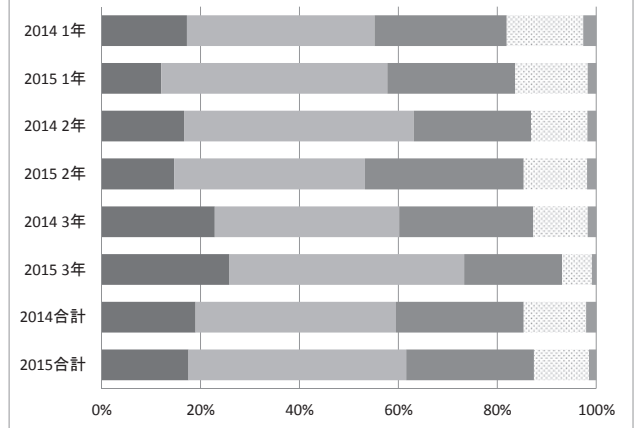
自分の意見を聴衆の前で述べられ、質問にも応じられる



ディベートやディスカッションなどで、論拠を並べて主張を述べられる



考えの根拠を示し、語いや文構造を適切に用いて、論理的な文章を書ける



関係資料 4

<金沢大学人間社会学域学校教育学類附属高等学校 視察報告>

日時 2014年8月19日(火)13:00~15:40

学校規模 各学年3クラス(125名) 男女比1:1 ※SGH対象生徒は全員

対応教員 副校長 風間先生 主幹教諭(学内教頭) 山本先生

訪問者 副校長 菊池美千世 研究部長(SGH推進班) 阿部真由美

目的 本校SGHの取り組みの充実と教員の研修の促進のため。

以下5項目についてご教示をお願いした。

視察報告(聞き取り内容)

○課題研究カリキュラム開発

- ・すでに総合学習の時間において行ってきた内容を、SGH的にリニューアルした。
- ・1年前期において、地域課題についてグループごとの調べ学習、能登現地学習を通じて、課題を発見し、解決方法の提案につなげる。9~10月にパワーポイントを用いて発表。1年の3月に生徒全員が台湾大学を訪問し、大学生等とディスカッション、フィールドワーク等を行う。2年次での海外派遣30名を目指す。事前学習として、英語の時間に金沢大学への留学生を活用している。
- ・教科SGH化を掲げ、全教科で取り組んでいる。極力、教科の授業の変更は行わず、指導要領に沿った教育課程で行う。授業の内容や方法を工夫し、課題研究に必要な力を身につけられるように考えた。

○外部資源の活用

- ・海外連携機関は校長の紹介。北陸先端科学技術大学院大学(海外からの学者が多い)との連携もおこなう。SGHといっても内容的には文系に限らないので、理系からのバックアップも大事である。

○検証評価の方法について

- ・年度初めに生徒・保護者に意識調査を行った。項目は、構想調書に書かれている目的・目標や、目標設定シートをもとに作成。

○目標設定シートの目標達成に向けての取り組みについて

- ・教員側の働きかけで生徒が積極的に科学オリンピックや模擬国連などに参加

○運営に関する体制および大学との連携について

- ・校内の体制は、学内教頭(研究部長)を中心とした、SGH推進委員会10名。
- ・金沢大学との連携=大学のグローバル人材育成推進機構(機構長:学長)のもとに、「SGH特区教育センター」センター長:教育担当理事(副学長)を設置。センターの下に「プログラム運営委員」委員長:教育担当理事を設置。生徒の課題研究への協力の依頼(大学や企業)なども行ってくれた。月に1回程度、会合を持っている。

<立命館宇治高等学校 視察報告>

日時 2014年10月16日(木)13:00~15:30

学校規模 生徒数 1600人(300人ほどが帰国生), 職員数 150人(30人ほどがネイティブ)
中学入学者が高校進学時にIBコース(1クラスで計20人, ほぼ帰国生), IM
コース(2クラスで計84人), 普通コースに分かれる。IBコースはバカロレア,
IMコースは1年間の留学が必須。SGHはIMコースを中心に実施。

対応教員 平田先生(国際主幹)

訪問者 進路部長(SGH推進班) 北原 武 津久井 貴之

目的 本校SGHの取り組みの充実と教員の研修の促進のため。

以下4項目についてご教示をいただいた。

視察報告(聞き取り内容)

○課題研究カリキュラム開発

- ・第1ステージ(高校1年4月~7月)では, 日本文化再発見を目的として, 「日本の精神(武士道)」, 「世界遺産(平等院)」, 「宇治茶」をテーマにした文化人・研究者による講演を実施。また, 「世界の中の日本文化」を視点に日本の現状と課題を確認する。
- ・第2ステージ(高校1年9月~12月 or 高校2年9月~12月)では, グローバルリーダーシップの習得を目的として, 「政治経済」, 「経営」, 「文化」をテーマにした連携大学, 連携企業, 連携団体による講演を実施。また, 現代のグローバルな社会課題の基礎的理解を深化させる。
- ・第3ステージ(高校2年1月~卒業)では, グローバル課題研究(使用言語, 作成論文はすべて英語)を実施。大学教員や院生による授業やアドバイスを受け, 「世界の環境・社会問題を解決するソーシャルビジネス」, 「グローバル企業における戦略のCSR研究」, 「宇治・京都の文化を世界に発信するビジネスの研究」を実施。また, 海外研修やISF(国際高校生フォーラム)を開催。
- ・課題研究の時間(金曜5・6限)は教科に任せるのではなく, 担任が入る。専門性がない分は, 外部講師や大学のサポートを含めたチームとして協同することで補完している。

○海外研修と英語での発信

- ・海外研修は生徒にとって楽しい研修ではなく, 苦しく実力のなさを思い知って帰ってくる研修を作っている。そうすれば帰国後に目の色を変えて学習する生徒を作ることができるし, そうしなければ留学してきた生徒が図に乗るだけになってしまう。大事なことは英語が話せることではなく, 海外で何ができるか。そこを強調して留学や海外研修に行かせる。
- ・海外を含めた多くの人に発信するという点で論文を英語で書かせるが, 書いて終わりではない。今の日本人には交渉力がないので, 英語を通して交渉力を磨いたり, その背景にある文化的心理的態度やスキルを身に付けさせたりすることがより大切。

○SGHの評価指標

- ・現実として意識調査が中心になるが, その他としては海外大学への進学者数になるだろうか。ただ, 評価のためにやりたいことを歪めることのないようにしたい。

○大学との関係性

- ・IBやIMのカリキュラムを通して英語で授業を受けてきた生徒たちに対応したカリキュラムを大学が作ることが大切。

関係資料 5

<バンコク視察報告>

日 程 2015年1月5日(月)～8日(木)

視 察 者 菊池美千世 土方伸子

目 的 チュラーロンコーン大学附属中等学校との交流協定締結の準備

海外研修の訪問先候補地の視察

視察日程 5日(月) 移動日 10:45 羽田空港 発 14:50 スワンナプーム国際空港 着

6日(火) チュラーロンコーン大学附属中等学校 訪問

7日(水) 午前 ドゥアン・プラティープ財団 訪問
午後 タマサート大学 および 同附属高校訪問

8日(木) ジム・トンプソン タイ ハウス および チュラーロンコーン大学訪問
14:50 スワンナプーム国際空港 発 22:30 羽田空港 着

視察報告

- ・ 6日 チュラーロンコーン大学附属中等学校 (先生方との面談, 校舎見学, 授業参観)

同校の日本語教師 鹿島剛先生, カヴィター・フォンサタポーン先生

副校長 (国際課) ワラーデート・ガラヤーナミット先生 と面談

- ・ 交流協定については, メールでのやり取りの結果, 修正した文案で合意した。

- ・ 来年度以降のバンコクでの研修の可能性について話し合う。

- ・ 訪問可能な時期 8月下旬が望ましい

- ・ ホームステイ 可能 1泊は短すぎるので2～3泊できると良い

- ・ 訪問可能人数 15人程度 (20人は難しいかも…)

- ・ 訪問時の時程案 金曜日の朝に学校を訪問 研究発表・討議, 授業参加など
夕方から日曜の朝までホームステイ (2泊)

- ・ 課題研究の発表について (1)事前に参加生徒を募集 メール等で自己紹介

 - (2)テーマを自分たちで提案して決める

 - (3)テーマに対して調査, 提案作成 互いに意見交換
相手の意見を参考に提案内容を修正

 - (4)学校を訪問し, 発表, 意見交換 共同提案?

*日本語コース所属生徒の日本留学 (本校での受入れ) 可能性の打診

- ・ 7日 1. ドゥアン・プラティープ財団

財団スタッフのラダパンさん 日本人ボランティア 中川さんと面談

- ・ 訪問時期 8月下旬の訪問は可能 月曜～金曜の午前中

- ・ 訪問時の時程案 (1)地域見学 (スラムの見学) 10～15分

 - (2)幼稚園見学 10～20分

 - (3)財団の活動紹介 + 質疑応答

- ・ 事前学習 ホームページやプラティープ氏の著書『アジアにかかる虹』

- ・ 訪問時の服装 制服 または ジャージ

- 2. タマサート大学および附属高校 (先生方との面談, 校舎見学, 授業参観)

スラーニット先生 (大学の日本語科)

パッチャニー先生 (附属高校の英語と日本語の先生)

- ・ タマサート大学には教育学部がなく, もともと附属学校はなかった。

- ・ 日本語選択は文科系のクラス 1学年 45～50人 (学年によって異なる)

- ・ 課題研究の発表をするならば, 日本語選択の高校3年生が対応

- ・ 8月下旬の訪問は可能

- ・ 8日 1. ジム・トンプソン タイ ハウス タイの歴史・文化・美術・産業の学習

- 2. チュラーロンコーン大学語学センター ジョイ先生, ヌーン先生

英語や日本語を学ぶ大学生との交流・研修の可能性を相談

<沖縄視察報告>

日 程 2015年2月9日(月)～10日(火)

視 察 者 玉谷直子

目 的 「持続可能な社会の探究Ⅱ」におけるフィールドワーク試行に関する打ち合わせ
「持続可能な社会の探究Ⅱ」におけるフィールドワーク候補地の視察

視察日程 9日(月) 8:30羽田発 11:25那覇着 JOCA訪問 琉球大学訪問

10日(火) 沖縄国際大学訪問 辺野古訪問 16:50那覇発 19:00羽田着

視察報告

・9日 1. 公益社団法人青年海外協力協会 (JOCA)

沖縄事業担当池田絃子氏と面談

・2015年4月14日に実施するフィールドワーク試行において訪問する3名の生徒の事前学習レポートを見せ、研修内容について相談する。

(1) 訪問時間は10:00～12:00とし、昼食をJOCAの食堂でとる。

(2) JICAおよびJOCAの事業の概要を説明

(3) 「沖縄発の国際交流」として移民への国際協力について説明

(4) 施設見学及び研修見学

(5) 食堂にて研修生に英語でインタビュー

・2016年度以降のフィールドワークに向けて、「持続可能な社会の探究Ⅰ」における事前学習のありかたについて相談する。

2. 琉球大学

広報室室長野原茂氏、係長眞喜志睦氏、留学生担当岡本淳子氏と面談

・2016年度フィールドワーク候補地になっていただけるか相談する

(1) 4月は年度初めで忙しいので、全生徒の受け入れは不可能

(2) 事前学習することを前提に、フィールドワークの候補地とすることは認める

(3) 琉球大学のシステムに則り、生徒がHPの書式から広報室に申し込む

(4) フィールドワーク中の事故に関する責任の所在等について検討を続ける

・10日 1. 沖縄国際大学

法学部教授佐藤学氏、総務部広報企画課課長佐藤珠美氏と面談

・2015年度4月14日に実施するフィールドワーク試行時の生徒受入可能性について相談する。

(1) 難しいが、場合によっては対応可能。

・2016年度のフィールドワーク候補地になっていただけるか相談する。

(1) 受け入れは可能。全員に対する講義も、課題研究のグループごとの受け入れも可能。テーマについても平和学習、環境、資源等幅広い分野で対応可能。

(2) 「持続可能な社会の探究Ⅰ」の講義への協力についても、環境問題及び基地問題において可能。

(3) 2004年8月13日の米軍ヘリ墜落事故関係の資料を提供していただく。

(4) 「持続可能な社会の探究Ⅰ」に役立つ図書・資料を推薦してもらう。

(5) 今後の「持続可能な社会の探究Ⅰ・Ⅱ」のカリキュラム作りへの助言もいただけることになり、継続的に助言をいただくことになった。

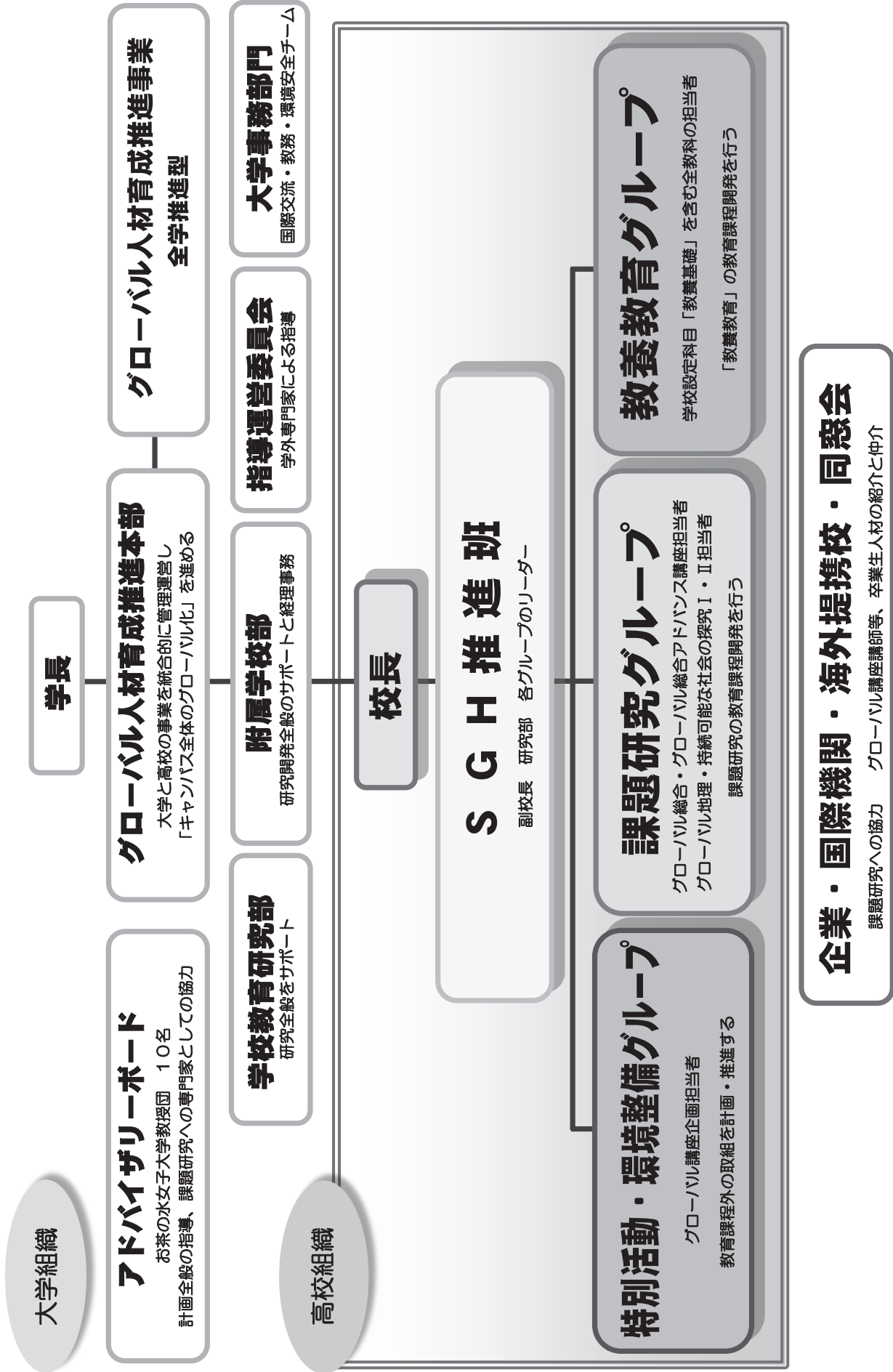
2. 辺野古漁港及び大浦湾視察

じゅごんの里ボランティア女性の案内で辺野古漁港・大浦湾を見学

・辺野古漁港での座り込み活動をする地元の方のテント等の見学

・辺野古漁港の様子を視察

・大浦湾の様子を視察し、湾の生物多様性に関する説明を聞く。



教育課程表(SGH)

平成26年度入学生用

教科	科目	1年		2年		3年	
		必修	選択	必修	選択	必修	選択
国語	国語総合	4				2	
	現代文B			2			
	古典B			2			
	国語表現 古典A 古典A 基礎「国語」I 基礎「国語」II 基礎「古典読書」A 基礎「古典読書」B	2		2			2 2 1 2 2
地理史	日本史A			2			1
	日本史B						4
	世界史A			2			1
	世界史B						4
地理	地理A	2					1
	地理B						4
公民	政治・経済 公民演習	2				2	2
数学	数学I	3					
	数学II			3			
	数学III	2					6
	数学AB			2			2 2
理科	基礎「数学」I	1		1			
	基礎「数学」II						
	基礎「数学」III						2
	物理基礎			2			1
理科	化学基礎	2					5
	生物基礎						1
	生物基礎			2			5
	地学基礎	2					1 5 2
保健	体育	2		2		3	
	保健	1		1			
芸術	音楽I	2					
	音楽II			2			
	音楽III						2
	美術I	2					
	美術II			2			
	美術III						2
外国語	書道I	2					
	書道II			2			
	音楽表現			2			2
	美術表現			2			2
	コミュニケーション英語I	4					
	コミュニケーション英語II			4			2
外国語	コミュニケーション英語III	1					
	英語表現I						2
	英語表現II						2
	英語会話	1					
外国語	基礎「英語」I						
	基礎「英語」II			1			
	基礎「英語」III						2
家庭情報	家庭総合	1		2		1	
総合的な学習の時間	社会と情報	2					
	一般総合			1			
	グローバル総合アドバンス 持続可能な社会の探究I 持続可能な社会の探究II						1
ホームルーム		1		1		1	
計		35		35		12	7~23

教育課程表(SGH)

平成27年度入学生用

教科	科目	1年		2年		3年	
		必修	選択	必修	選択	必修	選択
国語	国語総合	4					
	現代文B			2		2	
	古典B			2			
	国語表現						2
	古典A甲						2
	古典A乙						1
教養基礎	「国語」Ⅰ	2					
	「国語」Ⅱ			2			
	「古典読書」A						2
	「古典読書」B						2
地理	日本史A			2			1
	日本史B						4
	世界史A			2			1
	世界史B						4
	地理B						4
	グローバル地理	2					
公民	政治・経済	2				2	
	公民演習						2
数学	数学Ⅰ	3					
	数学Ⅱ			3			
	数学ⅢA	2					6
	数学ⅢB			2			2
	「数学」Ⅰ	1		1			2
理科	「数学」Ⅱ						
	「数学」Ⅲ						
	物理基礎			2			1
	化学基礎	2					5
	生物基礎			2			1
保健	体育	2		2		3	
	保健	1		1			
	音楽表						2
芸術	音楽Ⅰ	2					
	音楽Ⅱ			2			
	音楽Ⅲ						2
	美術Ⅰ	2					
	美術Ⅱ			2			
	美術Ⅲ						2
	書道Ⅰ	2					
外国語	「英語」Ⅰ						
	「英語」Ⅱ						
	「英語」Ⅲ						
	英語表現Ⅰ	4				2	
	英語表現Ⅱ	1					2
	英語会話						2
家庭	「英語」Ⅰ	1					
	「英語」Ⅱ			1			
	「英語」Ⅲ						2
情報	家庭総合	1		2		1	
	社会と情報	2					
総合的な学習の時間	アラカルト総合			1			
	グローバル総合アドバンス						1
	持続可能な社会の探究Ⅰ			1			
	持続可能な社会の探究Ⅱ						
ホームルーム		1		1		1	
計		35		35		12	7～23

平成 26 年度指定 スーパーグローバルハイスクール 第 1 年次
研究開発実施報告書

平成 27 年 3 月 24 日

発行 お茶の水女子大学
附属高等学校

〒 112-8610 東京都文京区大塚 2 丁目 1 番 1 号
電 話 03 (5978) 5856 ~ 7
F A X 03 (5978) 5858

印刷所 株式会社 甲 文 堂
〒 112-0012 東京都文京区大塚 1-4-15
アトラスタワー茗荷谷 105
電 話 03(3947)0844